

# あぶらむ 物語

人生のよき旅人たちの話

大郷博

Hiroshi Oogou







あぶらむ  
物語

人生のよき旅人たちの話

大郷博

Hiroshi Ogonu



あぶらむ物語

人生のよき旅人たちの話

大郷博

Hiroshi Oogou

## 序

石川文洋（写真家）

二〇〇〇年五月、沖縄県人会高山支部の集いが国府町の「あぶらむの里」で催され、私も「わが故郷・沖縄」のスライド上映で参加しました。沖縄といえはすぐ海が頭に浮かび、高山は文字通り山に囲まれています。沖縄の人もいろいろなところに住んでいるのだなと感心しましたが、考えてみれば沖縄生まれの私もいま信州の山の中腹で生活しているのです。

岐阜市に住む沖縄県人会の人も含め約五十人が参加し、泡盛、沖縄そばを賞味し琉球舞踊が披露されるなど沖縄色豊かな一日でした。琉舞とスライド上映は「諸魂庵」、県人会総会は「あぶらむの宿」の広間で催されましたが、建物の古い柱、床板などから昔の日本家屋の質感と歴史が伝わってきて、心が安まる思いでした。

県人会の人たちが帰った後、宿の主人、大郷博さんと酒を飲むことになりましたが、料理を作る妻の育さん、それを手伝う娘の舞さんたちから厚いもてなしを受け、いっそう酒が旨く感じられました。翌日は博さんの運転する車で白川郷へ案内していただき、さらに富山まで足を延ばしました。

「あぶらむの宿」にもう一泊。翌朝は敷地六〇〇坪のなかを回り、宇津江四十八滝まで森林浴をしながら歩いた後、博さん一家に見送られ「あぶらの里」を後にしました。大変よい時間を過ごすことができたという満足感がありました。

「あぶらむの里」を訪れ自然に囲まれた博さんの家族の生活を羨ましく感じた人も多いでしょう。私も博さんはよい生き方をしていると思いました。同時に、ここに至るまでの努力が大変であり、しかも、これで苦労が終わったのではない。でも、そのことが博さんの生き甲斐でもあるのだろうと思いました。

そのようなことも含め、博さんがどのような経過で「あぶらむの里」をつくる気持ちになったかと、たいへん関心がありました。そのことに答えてくれたのが本書です。「沖繩、そしてハンセン病との出会い」から読みはじめて、各章に今まで知らなかったことが書かれていて勉強になることが多かったのですが、博さんの行動のなかに私にも同じような体験があったことを知り嬉しくなりました。

博さんは人生を長い旅と位置づけ、そのなかでの体験、出会いを大切なものと考えています。芭蕉の『奥の細道』は「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり」という文からはじまっていますが、私はこの本が好きです。もともと落ち着きのない性格なの

で六三歳になる今日までふらふらとした人生を送ってきましたが、一九六四年は世界一周無銭旅行を計画して香港へ向かった忘れられない年です。

同じ年に博さんはハワイへ渡っています。乗った船のプレジデント・ウィルソン号という文字に懐かしさを覚えました。歴代大統領の名をつけたこの会社の船を香港の港でもよく見かけたからです。船上の若い博さんの姿が目に浮かぶようです。

六八年、博さんは沖繩のハンセン病療養所「愛楽園」を訪ねたことで、その後の人生の旅に大きな影響を受けたと述べています。私はその年、ベトナムのサイゴンの市街戦を撮影しながら、自分のベトナム後の生き方を考えていました。

二〇〇一年五月、ハンセン病国家賠償請求訴訟に対して熊本地裁の判決がおりました。そのなかでハンセン病は隔離政策を必要とする病気ではないと断言しています。本書でもハンセン病は遺伝ではない、完全に治る病気だと書かれています。それなのに、国・社会の無知、偏見による患者の苦しみは計り知れないものがあつただろうと思うと、私自身にも反省の気持ちが起こります。

博さんは愛楽園ができるまでの過程を紹介していますが、愛楽園の人々から教えられることが多かったと書いています。「転んだら起きなさいね」という山城タケさんの言葉は

現在の私にも励みとなります。

大学の牧師となった博さんは学ぶことには学校と現場の二つがあると考え、「愛楽園」、フィリピンへ学生たちと一緒にいきます。その時の学生の体験が本の中で紹介されていますが、学校では得ることのできない現場の人々との触れ合いは、学生のその後の生き方に大きな影響を与えたことがわかります。

私は大学へ行かなかったので、現場を生涯の学習の場と考えており、博さんの考えに共感もっています。学校、現場、いずれにおいても本人の自覚がなくては学んだことにはなりません。「あぶらむの里」づくりの構想のひとつに自覚の場として役立ってもらいたいという博さんの願いが込められています。

他の人の行動、発言や、社会、世界の動き、自身の体験などから、私たちは何かを掴んでいくのではないのでしょうか。読書もその中に含まれると思います。本書から私も多くのことを学びました。友人にはいろいろな職業の人がいますが、牧師を経験した人は博さん一人なので、今後、他の人とは違った視点から人生を教えてもらえると楽しみにしています。

目次

第一章 沖繩、そしてハンセン病との出会い

一・沖繩まで

私を導いた一つの言葉 14

もう一つの言葉 15

ハンセン病との最初の出会い 19

二・青木恵哉師との出会い

昭和初期の沖繩の状態 28

昭和初期の病者の生活状況 31

「旧癩予防法」に基づく沖繩における療養所設置計画 37

青木先生の息吹き 39

嵐山事件と青木師殺害未遂 42

屋部の焼き打ち事件と逃れの島、そして愛楽園誕生 51

23

12

11

6



三: ハンセン病について

55

四: 面接聞き取り調査で出会った人

71

上間源光さんのこと

72

一つの気づき

73

山城タケさんのこと

79

## 第二章 立教時代のこと

85

一: 沖縄キャンプのこと

86

沖縄キャンプ

89

学生たちの気づき

93

二: ある学生との出会い

123

その後の彼女の歩み

136

## 第三章 あぶらむの旅立ち

149

一: あぶらむ構想

150

精神の断食を求めて訓練校へ

154

## 第四章 家族

### 一. 結婚

238

237

### 五. 諸魂庵建設

229

愛楽園からの訪問団

227

あぶらむ債発行

210

古家探し

204

たくさんの不思議

198

### 四. あぶらむの宿建設

198

### 三. 「あぶらむ」の名の由来

186

夢を見るということ

182

あぶらむの里建設募金の開始

176

神様、どうかあの土地を私にください！

170

### 二. あぶらむの会設立と土地取得

170

新天地、飛驒の地へ

166

あぶらむ構想

159

二・ 子どもの誕生と成長	242
校則問題	250
親離れ、子離れ	261
第五章 魂の世話	265
一・ 山にやって来たヨット	266
海という砂漠を体験すること	266
鳥羽港への航海	272
二・ 立ちはだかるということ	277
真剣な魂の投げかけ	282
父の思い出	288
立ちはだかりを受け止める力	291
三・ 旅人の宿	294
サム・リフレッシュメント	294
旅情豊かな旅人たち	296
立ち止まること	307

四、旅の伴侶

独り言の名人 316

「共にある存在」を伴侶として 320

五、自分との和解

327

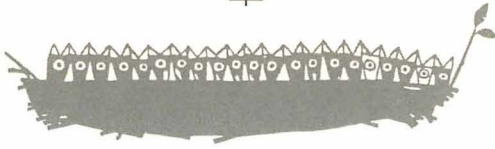
あとがき

332

※本書ではハンセン病について「癩（らい）」という呼称で表記している場合があります。これは資料を含め、その歴史的時代背景を伝えるために、その時代での呼称を用いたものです。関係者および読者の皆さんのご理解をお願い申し上げます。

(編集部)

第一章



沖縄、  
そしてハンセン病との出会い

## 一・沖繩まで

「それにしても、お前をハワイにまで勉強に行かせたこと、お前にとって何だったのだ」

私が牧師として働いていた時、晩年の父はポツリと語った。

「なあーん、あの時のことがなかったら今の自分はないがやちや」

私のそんな返答に父は理由をきくこともなく「そうか」といつてうなずいていた。

私には忘れられない光景がある。中学一年生の初夏、学校の帰り道、神通川の堤防道を歩いていたら、まったく突然に、

「人間、死んだらどうなるのだろう」

という思いが稲妻に打たれたように全身を走った。恐くて恐くて全身がブルブル震

え、道ばたにヘタヘタと座り込んだことを今もはっきりと憶えている。そんなある日、父と一緒に風呂に入ったとき、恐る恐るきいてみた。困惑したような父は、身近なところでおこった出来事と前置きしてこんな再生の話をしてくれた。

「ある人の坊やが水死したんや。その後その家にまた男の子が生まれた。不思議なことに死んだ子とまったく同じ場所に同じかたちのアザがあった。この世で、いい子で一生懸命生きれば、また、この世に生まれ出てくるのだ」

身近なところでおこった出来事という枕詞がきいたのか、私はすっかり安心し、何ごともなかったかのように普通の少年にもどっていった。しかし、心の底には「死」という言葉がしっかりと刻みこまれていったように思う。

B型の特徴か、元来あまり深く、深刻に考え込まない私（考え込めないというほうが正しいだろう）、「死んだらどうなるのだろう」という思いは自分を烈しく引き込むことはなかった。しかしそのかわりに、「なぜ死に向かって生きなければならぬのだろうか」、自分の心の中では「生きることの意味」を求める気持ちが強くなっていった。自分の心の中心に座る何か、人生のバック・ボーン（背骨）となる何かを求めている自分がいた。

## 私を導いた一つの言葉

高校生活も終盤に入り、現実選択をしなければならぬ時期、私の心に飛び込み、私を捕らえてはなさない「言葉」に出会った。

その一つは、アメリカのホテル王とよばれたスタットナーの

「人生は奉仕なり (Life is Service)」

という言葉であった(残念ながら彼のこの言葉とどこで出会ったか思い出せない。教科書かもしれない、乱読していた本の一冊かもしれない。その言葉の主と「人生は奉仕なり」という言葉だけははっきりと記憶に刻みこまれているのだが、その前後は何も残っていない)。

父の生業とも近いということもあり、私はスタットナーの言葉にひかれ、単純に「ホテル学校」への道に進むことにした。



もう一つの言葉

ホテルマンという希望をもって、私は故郷富山を出た。カバンの中に大切な手紙をしのばせて。それは中学二年の時から淡い思いをもちつづけていた人からの旅立ちへの手紙だった。故郷を出て現在の土地にたどり着くまで十数回の転居を重ねてきたが、この「旅立ちの手紙」だけは紛失することもなく、今も手元に残っている。

それはこんな一八歳の言葉だった。

大郷さん ジードの『狭き門』の中に聖書の

「力を尽して狭き門より入れ。」

滅びにいたる門は大きくその路は広く

これより入る者多し。生命にいたる門は狭く

その路は細くこれを見いだす者少なし。」

と言う言葉が出てきます。私はこの言葉が好きです。私もこの生命の門を見つけ

一人になりたいと思つています。生命の門を見つけることは、なんと難しく素敵なことでしょう。

はてしなくつづく海に航海に出る船は一つ道を間違えると及びもつかないことになります。

ましてや海はいつも静かで美しいとは限りません。荒れ狂う嵐の日もあります。それを乗り越え目的地にたどり着いた時の感動は今も昔も変りないと思います。大郷君も船の如く考え苦しみ楽しみ道を間違えず生命の門を見つけてほしいと思います。目的地にたどり着いた時の感激を私にもほんの少しだけ分けて下さいね。生命の門を見つけるには体を大事にして進んで下さい。

当時の私は、ジードの『狭き門』に出てくる聖書の一節よりも、最後の「目的地にたどり着いた時の感激を私にもほんの少しだけ分けて下さいね」という言葉に舞い上がっていた。五年間にわたる淡い思いが現実のものとなったからと思つたから。しかしこの「旅立ちの手紙」は別れの手紙であり、以後その人とは二度と会うことはなかった。私の中に残つたのは、青春の淡い思い出と「狭き門より入れ」という聖書の言

葉だけであり、それがキリスト教との出会いだった。

一九六四年、東京オリンピックの年、東京のYホテル学校で学んでいた私に、ハワイへの研修旅行の機会がやってきた。そのころ私たちには、今では想像もできないほどの外国への憧れがあった。高校進学の際は、自分の学力もかえりみず、私の希望は商船高校だった。そのころの私にとって外国へ通じる唯一の道だったから。しかし、船乗りは家庭を大切にできないという理由で、両親は猛反対（船員の方、ゴメンナサイ）。私のほうは相当抵抗したが、学力不足であっさり降参、しかし、外国への憧れは強くなるばかりだった。そんな時のハワイ行きチャンス、行きたくて行きたくてしかたなかった。ダメ元で親に相談したら意外とあっさりOKとなった。経済観念の薄かった私に、その参加費は親にどれほどの負担となるのか、想像することはできなかった。一ドル三六〇円、外貨持出し制限五〇〇ドル時代の海外旅行。プレジデント・ウィルソン号から見た朝焼けのダイヤモンド・ヘッドの光景は今も忘れることができない。はじめての外国の地、大きな大きな感動だった。

あれから三十数年、私はハワイには行ったことがない。訪ねてみたい気持ちは山ほどあるが、日本人ばかりと聞くとつい億劫になってしまう。

そのころのハワイでは日本人観光客はほとんど見かけなかった。一二月とあって、アメリカ本土からの避寒客や観光客ばかり。圧倒的な経済的格差の前に、口を大きく開けっぱなしの私だった。しかし、それとともに一つの深く大きい疑問が湧いてきた。

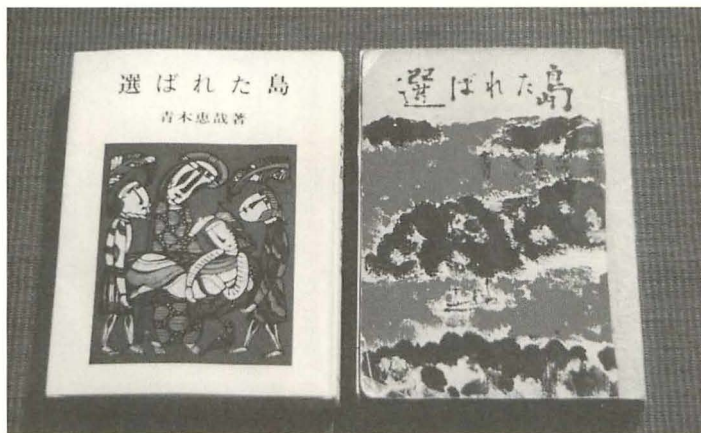
研修先のホテルで接する人はどの人もお金持ちばかり。「人生は奉仕なり」という言葉にひかれてこの世界に生きようとした私。だが、こんなお金に恵まれた人に、何が「奉仕」なのだろうか。スタットナーのいう「人生は奉仕」という言葉はまちがっていないが、その対象となるものはハワイや学校で学んでいたホテルの世界ではないという思いをもつようになった。ハワイの華やかな現実に触れれば触れるほどその思いは強くなっていった。

親にたくさんのお金を使わせての海外研修、そこで得たものは自分が進もうとしている世界への疑念だった。これから先どうすればよいのかまったくわからなかった。アメリカ本土へ逃げないか（不法滞在への道）という誘惑もあったが、国に帰り、道を探し求めることにした。一八歳の若者には激しすぎる変動だった。そして受験浪人を経てM大学の社会福祉学科に学ぶことになった。「奉仕」の対象者を福祉の世界に見たように思ったからである。

しかし、頭だけで「奉仕」という言葉をいじくっていた私は、一年もしないうちに行き詰まりを感じることもあった。頭の中だけでいじくっていた奉仕や福祉、はじめて福祉の現場に触れた時、自分の気持ちが惨めなものになっていくのに時間はかからなかった。所詮は世間知らずのボンボンの私だった。福祉の現場に生きていくという自分の心をつき動かす何ものもつていなかった。実に惨めだった。ホテル学校―海外研修―受験浪人―大学生、親にたくさんの経済的負担をかけながら追い求めてきた自分の道。しかし、それが眼前でもろくも崩れようとしていた。惨め以外、何ものでもなかった。

### ハンセン病との最初の出会い

そんな追いつめられた精神状態の私の前に現れたのが、ハンセン病療養所「沖縄愛楽園」という名前だった。そこを訪ね、そこに生きる人々との交わりの中で自分の立て直しができないならば、これまでのすべてのことを詫び、もう一度やり直そうと思っていた。一九六八年二月、藁わらにもすがるような気持ちで沖縄の「愛楽園」を訪ねた



青木恵哉『選ばれた島』の初版（右）と復刻版

私だった。

これまでの歩みとハンセン病療養所「沖縄愛楽園」、一見何の関連性も見当たらないのだが、それまでの歩みがなかったら、「愛楽園」との出会いもあり得なかった。

ハワイにいた時、私は一人の日本人留学生と出会った。服部春美さんという人だった。

「大郷君、こんな世界もあるのよ。機会があれば訪ねてみたら」

そういって彼女は一冊の本を貸してくれた。青木恵哉著『選ばれた島』という本だった。著者の青木先生と会って大きな感銘を受けた彼女、留学先のハワイにまでその本を大切にもってきていたのであった。宿



舎にしていたY M C Aホステルの安ベッドの上に寝ころび、一気に読んだ一冊の本。そのたった一冊の本が自分の人生を決定づけようなんて、当時の私には知るよしもなかった。

『昆虫記』の著者ファーブルが記していることがまさにわが身に起こったのであった。

誰にでも、その人の思想の向きに従って、それまでは夢にも思いつかなかった展望を見せてくれて、精神に一つの紀元をきしてくれる本があるものだ。それは新しい世界の扉を大きく開いてくれ、その後我々は知力をそこに傾けることになる。それは一つの火花で、炉に焰の口火を運んでくれるものだ。炉の中の薪は、この火花の助けがなければ、いつまでも役に立てられないままで終る。そして我々の思想の発展上、新しい紀元となるこんな本を手にする機会は、よく偶然が与えてくれるものだ。ほんのつまらない事情、どうにかして眼にふれた数行の文字が、我々の将来を決定し、運命の轍の中に、我々を引き入れてしまうのだ。

それはまさにくすぶるだけで燃え上がることのできなかった私にとって生命の炎の口火となった。一九六八年二月のことであった。



## 二・青木恵哉師との出会い

痛み経て 真珠となりし 貝の春

一九六九年三月六日、こんな句を残して一人のハンセン病（癩）を病んだ人が逝った。

沖繩救癩の父、青木恵哉師である。

遺体を移す時、ベッドの中に義足だった片足がポツンと残っていた。師の人生を象徴しているかのような光景だった。

その日、私は病気で手足や視力を失った重度不自由者の人たちに、遠藤周作の『沈黙』を朗読していた。当時はまだ、らい予防法の規則が、時として頭をもたげることがあった時代で、たとえば、私たち健康者は患者地帯に居住してはならないというこ

とで、園内での生活は拒否され、近くの落井出集落すむいから通うこともあった。また、肉親の面会は、面会所という狭い場所以外では赦されなかった。健康者と呼ばれる人が療養所を訪ねることはきわめて稀な時代だった。

「大郷さん、青木先生がお会いしたいといっておられますが……、病室まで来ても  
らえないでしょうか」

私はびっくりした。前年の六八年二月にはじめて愛楽園を訪ね、その時、彼らのあまりものひたむきな生き方に心打たれた私は、その夏より「愛楽園ボランティア・グループ」をつくり、大学の仲間たちとともに愛楽園でのボランティア活動を開始した。しかしその間、青木先生とは二、三度言葉を交わしただけだった。全体的に鋭く、厳しい感じの人で、また激しい迫害をくぐり抜けて愛楽園をつくりあげた人ということもあって、私のような若造には近よりがたい存在だった。だが、その青木先生が私を呼んでおられる、それは私にとって大きな驚きだった。

先生の側で看病していた人が、

「タンメー（沖繩方言で「おじいさん」の意だが、園内では青木先生への尊称だっ

た)、大郷さんがいらっしやったヨ」

と声をかけたら、先生は私のほうを振り向き、

「沖縄の癩のために頑張ってください。人生は……」

とまでおっしゃった後、激しい発作に見舞われ、「人生は……」の後の言葉は私には聞き取ることができなかつた。

「青木先生、休んでください。私はここにいますから」

と精一杯の思いでいった。先生はうなずかれるとともに背を向けられた。それから二〇分もたったかどうか、沖縄の教会の主だった人たちが急を聞いてかけつけてきた。

「タンメー、主教様はじめ皆さんいらっしやいましたヨ」

といったら、青木先生はこちらを振り向き、苦しい息づかいの中からしぼりだすように、

「私の人生は満足でした。お世話になりました。ありがとうございました」

といて息をひきとられた。生身の人間がこのようにして死ねるものなのか、何かドラマを見ているかのようであった。と同時に、このような大きな存在の人から最期の言葉をもらったという衝撃とともに、その人がその人生を何と総括されようとした

のか、「人生は……」の後にづく言葉を聞き損じたことがすごく悔やまれた。

青木先生が亡くなられた後、私は青木濠とよばれているところで一人海を見ながらたたずんでいた。戦争中、敵国宗教を信じているということで迫害され、師は海岸にできた自然濠の中に一時居住しておられた。その濠に私は花を供えとともに、しばしそこにたたずんでいた。

その日は油を流したような小波一つない穏やかな海だった。「海よ、こんな日になぜお前は穏やかでおれるのだ。悲しみをもってなぜ荒れないのだ」といって私は海に石を投げた。その時、それまで最期の言葉を聞き損じていたことを悔やんでいた私は次の瞬間にこう思った。まだ人生のジの字も生きていない自分が、人生の大先輩の最期の言葉を軽々に聞く、それは不遜なことだ。それは聞くべきではなかった。自分の人生を通して、お前は「人生は何」と総括するのか、後の言葉はお前自身の人生をもつて埋めなさい。これは青木先生から与えられた宿題、本当の遺産だと思った。なぜかわからないが涙が流れて仕方なかった。

青木恵哉。本名青木安二郎。明治二六年（一八九三）四月八日、徳島県で生まれた。

一〇歳で発病、発病当時のことを師は次のように記している。

ところで、わたしの病気は、いろいろの薬を用いても、道正神社へお百度を踏んでも、だんだん悪化する一方であった。

あんなに誇っていた家柄も血すじもぺちゃんこになり、かりそめにもわたしと血のつながるものは「ライ病すじ」という恐ろしい烙印を押されるので、親戚も次第に遠ざかってしまい、家族は後指をさされ、差別された部落の人たちのように暗い思いをして暮さなければならなくなった。あまつさえ、嫁いでいた三人の姉も二人まで離縁されて帰るという次第で、兄はやけを起こし、酒を飲んで放蕩にふけるしまつ。父は父でライを遺伝性とのみ思いこんで、家の血すじにそんな病気が出るはずはない、と亡き母の貞操まで疑ったりしたものである。わたしは子供ながらも、わが家の悲劇の因が自分自身にあることを知って苦しみ悶えた。そして神仏に頼る心が芽生えた。

〔選ばれた島〕

キリスト者となった師は、当時熊本で回春病院（私設ハンセン病療養所）を経営し

ていた、英国婦人ハンナ・リデルの命を受け、病友への伝道師として、沖縄へ渡った。世界大恐慌前夜にあつて「島苦び」（島であるがゆえの生活苦）に満ちていた昭和二年（一九二七）のことであつた。

話は少し小難しくなるが、ハンセン病療養所設立という師の働きが、いかに困難な状況のなかでなされていったのかを理解していただくため、当時の沖縄の社会経済状況、またハンセン病を病んだ人たちの生活状況を記すことにする。

### 昭和初期の沖縄の状態

昭和初期の沖縄は、「蘇鉄地獄」という言葉をもつて象徴的に語られている（食べるものがなくなつた時、最後の手段として蘇鉄の実を食べた。蘇鉄の実からは多量のデンプンがとれるが、精製を誤るとその強い毒にやられ死に至ることもある。事実、当時多くの人が中毒死した）。

当時の沖縄の窮乏化の原因は、「島の貧困」（島であるがゆえの生活苦）ということもあるが、それよりも本土政府の沖縄からの過酷なまでの差別的収奪であり、その結

果としての県外移出入収支における異常なまでの移入超過にあつたといえる。

たとえば、大正八年（一九一九）から昭和三年（一九二八）までの一〇年間に、沖縄県から国庫へ納めた諸税は六八〇〇万円、それに対して国庫から沖縄県へ支出された交付金は約二三〇〇万円、差引き四五〇〇万円の支払い超過となつた。

これを沖縄と面積、人口等において酷似する三県と比較すれば、沖縄はいかに差別的収奪を受けていたかがうかがえる。

大正一三年（一九二四） 国税納付額

大分県 四一九万三〇〇一円

宮崎県 二二六万四七九一円

鳥取県 一九八万九五六四円

沖縄県 四八四万九九九四円

ちなみに同年の沖縄県生産総額は六二八一万六〇〇〇円であつた。

このころの沖縄の産業経済基盤は圧倒的に農業であり工業などは皆無に近かつた。



しかし、その基幹産業の農業の生産総額も全国平均の半分以下と、きわめて劣悪なものであった。

このような状況の中で、沖縄県民は海外移民に活路を見出していった。明治三二年（一八九九）の第一回ハワイ移民以来の四十数年間に、海外移住者はのべ七万五〇〇〇人を数え、昭和一五年（一九四〇）の調査によれば、現住人口に対する海外在留者の比率は一〇パーセントに達していた。

沖縄県の海外移民は、「蘇鉄地獄」の大正末期から昭和初期にかけてピークをなし、全国総数の二〇パーセント近くの移民人口を沖縄が供給していた。これらの海外在留者からの送金が沖縄経済を一定程度支えることとなったが、世界大恐慌前夜にあってその荒波をまともにかぶっていた沖縄経済の難局打開を、移民者の送金にたよることは本質的に不可能なことであった。

当時の沖縄経済を支えていたのは黒砂糖の生産であったが、大正末期の砂糖相場の大暴落により、たとえば大正一四年（一九二五）には六四〇万円、昭和三年（一九二八）には一〇六五万円の移入超過となり、沖縄経済は完全に破綻した。このため、市中銀行は閉鎖され、県民の生活は貧窮化し、「蘇鉄地獄」という言葉が誕生したので



ある。

### 昭和初期の病者の生活状況

青木師の著書『選ばれた島』や、『沖縄救癩史』、個人面接等を資料としてみるに、この時代、この病気を病んだ人々の生活には「浮浪病者」「隔離病者」「一般病者」の三つの形態があつたように考えられる。

#### 「浮浪病者」

この種の病者は一般的に「浮浪癩」「乞食癩」と差別的な呼び方で呼ばれていた。沖縄だけではなく日本全土で、癩の「天刑説」という迷信的言い伝えが、広く信じられていた。それは、この病気は本人、あるいは親、兄弟、または先祖の犯した罪の現われであるという考えに基づいている。沖縄本島では古くから一般に、癩を病むと家族はこれを乞食に出すという因習があつた。それは、

戸毎に乞い歩いて、醜い姿を世にさらせば、天罰は晴れて病は癒え、その家族から再び癩が出ることはない  
〔沖繩救癩史〕

という天刑説に因を發しているといわれている。

また「葬祭」に關していえば、先祖崇拜の強い沖繩にあつて葬祭はきわめて儀式的かつ壮大におこなわれたが、病者に対しては消極的かつ残酷なたちでおこなわれたようである。

死亡するとカゴには乗せず棺のまま棒に吊して裏口から、裏口のないところは壁や石垣を取り壊して、夜間こっそりと近親者だけで野辺送りをするのが普通であった。しかし先祖代々の墓に合葬することは決してなく、人の近寄らない海岸や山中などに穴を掘って埋め、土盛りをせずその上に平たい大石を置いた。また、地方によつては逆埋めにし、甚だしいのは逆埋めする前に黒繩という丈夫な繩でしばるといふ、非道なことをする所さえあつた。

祭りは葬送の一回きり、立ち去る時墓の附近に炒り豆を蒔き、あるいは松丸太を

植えて、これが芽を出したら帰って来いと云い残して立ち去るのであった。(死者の霊との絶縁を意味する) 無論、その後は一切かえりみない。

『沖縄救癩史』

このような資料からも、昭和初期当時の病者に対する社会のむごい仕打ちがうかがえる。

また、このような天刑説の他に「血すじの病」(遺伝病)として周囲から嫌われたため、病者は家族への配慮から、自から家を捨て、「浮浪病者」となっていた者もいた(個人面接より)。

これら浮浪病者の生活は、墓場や海岸の洞窟などで野宿しながら島中を徘徊し、物を乞うていた。沖縄では「恨み癩<sup>うらみかんち</sup>」といって病者の怨恨を買うと自らが癩になるという迷信があったため、人々は同情とともに病者の怨恨を恐れきわめて親切を装ったようである。そのため歩行可能な限り餓死する病者は少なかったといわれている。

しかし、浮浪病者に乞われるままに食物を恵んでいた民衆の同情や親切も、それは浮浪病者の存在が一時的なものに限ってであり、一度病者が小集団で定着的生活をし

だと、それはすぐさましい迫害の対象となった。

### 「隔離病者」

「隔離」の当初は、たんに世間体を恥じての家族による、どちらかといえば人目に付かないように病者を隠した隔離であったが、県当局の、癩は恐るべき伝染病であるという広報の住民への浸透とともに、隔離は伝染予防の方向を目指し、集落単位で隔離小屋が設けられるようなところもあった。

たとえば、大正時代国頭村くにかみせん奥集落では、発病者に対してその家族と集落が共同して、村が指定した場所に隔離小屋を建て、病者には一日に一二〜一三銭、一か月約四円が集落より支給されたという（個人面談より）。また、島尻勝太郎氏の論文「宮古島農民の人頭税廃止運動」の中に、「癩病飯料三三石」という民費負担の項目が記されている。このような資料を検討するに、ところによっては集落単位で病者に対して一定の援助があったものとうかがえる。

これらの隔離病者は、自宅の一室、屋敷内の別棟、あるいは人里離れた海岸の洞窟や、山中などに隔離されていた。また前述したように、一部の病者は集落の隔離地帯

に小屋を建て住んでいた。彼らは実家より、またところによっては集落より十分ではないが援助があり、また周囲の土地を耕したり海で漁をしたりして、浮浪病者よりは精神的にもまた物質的にも、少しは恵まれた生活を営んでいたように考えられる。

しかし、昭和初期の「蘇鉄地獄」の沖縄にあつては、家族や集落からのささやかな援助もままならず、「浮浪病者」とならざるを得なかつた人たちも多くなつたものと推察される。

青木師は著書『選ばれた島』の中で、この隔離病者の生活実態を知るうえで、深く考えさせられる事実を描写している。

（隔離患者の）家は、一人住まいだから二坪位の部屋と台所だけの小さいものだが、備瀬やその他の病友の小屋とはちがひ材料もよく、建方も本式の茅葺きである。

備瀬その他の隔離小屋は板だけは立派な杉板だが、柱もお粗末なもので、掘立て釘づけの仮小屋ではない。この仮小屋の板がなぜ立派な杉板になっているかというところには理由がある。

由来沖縄には洗骨の風習があり、人が死んだら棺箱に収めて一旦墓に入れ、二、三年後、日を選んでこれを取り出し洗骨して骨甕におさめ再び墓の中に安置する。そして洗骨の際棺箱は焼却する所もあるが、多くは人目につかぬように捨ててしまふ。(中略) つまりこの棺箱が病友たちの小屋の壁になり、床になり、わたしの聖書棚になっていたわけだ。

これが「隔離病者」と呼ばれた人たちの生活だった。

### 「一般病者」

病者のうち、浮浪や隔離の対象となつたのは比較的病気の症状がはっきりしている人、一見してらいと識別される者であった。発病初期の病者は、らいの病状を「梅毒」「ジンマシン」といって極力病気を隠そうとし、また自らも病気でないことを信じようとしていた(事実、らい病はその病状において梅毒やジンマシン、たむし、しらくも等と誤診されやすかった)。

また、らい病は病気の性格上、個人の抵抗力の度合いにより長期間にわたって、初

期的病状を持続する者も多くいる。この種の病者は、家庭や職場にあつて病気でないことを祈り、また病気の治癒を信じて、他人に発覚しないように努めながら生活をしてきた。

### 「旧癩予防法」に基づく沖縄における療養所設置計画

明治四〇年（一九〇七）、「癩予防に関する法律案」（旧癩予防法）が制定された年、当時の内務省は真つ先に、癩濃厚地沖縄県に公立療養所設立の計画を立案した。明治四二年（一九〇九）、沖縄県当局は用地を現在の那覇市郊外に選定し、当時の内務大臣原敬に申請し許可を得た。その後県当局はただちに用地買収にとりかかったが、沖縄県議会は「那覇市将来の発展を阻害する」との理由で、沖縄県における療養所設立に反対し、県当局案を否決した。その結果、明治四三年（一九一〇）から昭和四年（一九二九）までの二〇年間、沖縄県は九州療養所に合併され、県内の患者は九州熊本療養所へ送致していた。

沖縄県のこの九州管区からの分離決定にいたるには、いくつかの理由があつた。そ



の一つには、故郷から切り離されるということで患者の送致が意の如くにならなかったことがあげられる。にもかかわらず多額の分担金を納入せねばならなかった。また、県内の発病者が減少どころか増加の一途をたどり、県内における療養所設立への抜本的対策を考えざるを得なかったのである。

しかし、九州の療養所へ県内の患者を送致していた間、沖縄県当局は県内の患者多発地区町村に、小規模の保養院（患者収容所）建設を立案した。その内容は全島七か所に保養院を設置し、患者二一〇名を収容するものであった。この計画により、まず宮古島平良町ひららと沖縄本島国頭村名護町が候補地として認定された。

宮古島の場合、当時の平良町長仲宗根勝米氏の尽力により、外部の患者は収容しないという条件で町議会の決議を取り、保養院設立に成功した。これが現在の国立ハルセン病療養所「宮古南静園」である。昭和四年（一九二九）八月のことであった。

一方、沖縄本島では保養院設置に対して住民の強い反対運動が起こり、名護町（現在の名護市）喜瀬きせにおける設置案に続き、同じく同町宇茂佐うもさ案にも失敗し、本島における保養院設置案は廃案に帰してしまった。

これに対して青木師は、「当局は最初から失敗を承知でやって失敗したに過ぎない」



と、激しく当局の無能無策ぶりを非難している。自らの力で道を切り拓こうと決心した師は、昭和五年（一九三〇）、ハンナ・リデルより送られてきた生活費を切りつめて貯めた金で、現在の「愛楽園」の敷地の一部、通称「大堂原」<sup>うふどうばる</sup>に三〇〇坪の土地購入を計画し、それに成功した。当時沖縄では二五〇坪の畑があれば甘藷を主食とする一人の生活が可能といわれ、師はこの土地に病者の「共同生活場」設立を計画し、また療養所建設に最適の土地と判断し、来たるべき時に備えたのであった。

### 青木先生の息吹き

青木先生の葬儀が終わったある日、私は何気なく愛楽園の浜を散歩していた。珍しく教会関係の方がたき火をしていた。青木先生の不用品の処理ということであった。見ると段ボール箱一杯の原稿があった。先生を知る貴重な資料になると直感し、中身を確かめることもなくそのまま東京へ持ち帰った。それは『選ばれた島』の完成原稿やその下書きとなった原稿など、先生の熱い息吹きが伝わってくる肉筆の数々だった。その中に喜び躍ったような字で、次のような文章がある。

また、或日学校から帰る途中であつた。

一人の行路病者が道端の小屋に救護され、大勢の人が集つていた。

その時も行路病者は癩病者であると聞いたので大急ぎで帰宅したことがあつた。

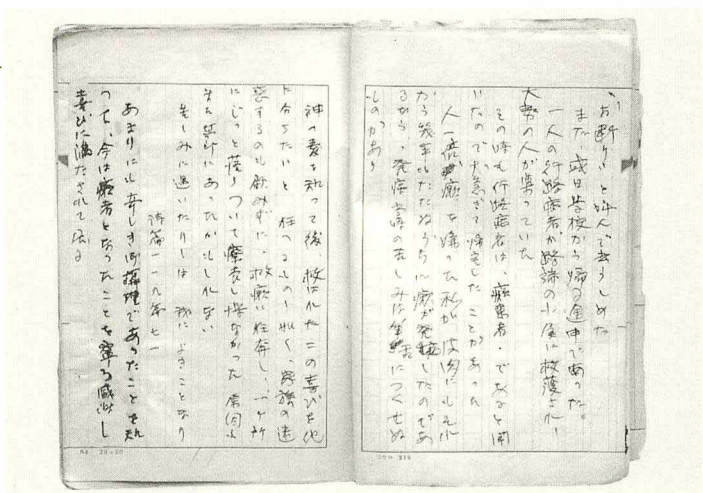
人一倍、癩を嫌つた私が、皮肉にもそれから幾年もたたぬうちに癩が発病したのであるから、発病当時の苦しみは筆舌に尽くせぬものがある。

神の愛を知つて後、救はれたこの喜びを他に分ちたいと狂へるものの如く、家族の迷惑するのも顧みずに、救癩に狂奔し、一ヶ所にじつと落ちついて療養し得なかつた原因もまた其所にあつたかもしれない。

苦しみに遇いたりしは 我によきことなり

詩篇一一九篇七一

青木先生の宗教的救いについて言及するのが本書の目的ではない。それはまた、別の機会に譲ることとして、度重なる身の危険を顧みることもなく、療養所設立に向けて闘つた、師の足跡を追うこととする。



青木恵哉師の『選ばれた島』肉筆原稿

青木先生をして療養所設立に向けて大きくつき動かした出来事として、師は源次郎さんの死について次のように記している。

夜が明け放たれたので、傷の手当をしてやろうと足を包んだボロ切れを取り除いて思わず「あつ」と声を上げた。足首の関節の骨が露出し、その周辺の肉が黒く腐つて、ものすごい悪臭は胸がむかつく。

(略)

気をとり直して石炭酸水で洗滌したら、内から蛆虫がたくさんころころ転げ出た。(略)

わたしが渡久地とぐちを発つた翌々日の朝、源次郎さんは半身を小屋から出して冷たくなっていたという。(略)

もうしばらく源次郎さんの側にいて様子を見るべきだった。多分急に破傷風をおこしたものにちがいない。死水をとってやることのできなかつた悔恨が身を噛む。すまない、すまない。私は慟哭した。

思えば源次郎さんもあの鏡地かがんじの病友も医者に診てもらうこともできずに死んでいった。沖繩の病友はみな適当な治療を受けることができない。しかも源次郎さんのように、誰にも知られず犬猫のように最期を終るものが少なくないにちがいない。

療養所が欲しい、療養所を建設しなければならぬ、つくづくそう思った。

『選ばれた島』

### 嵐山事件と青木師殺害未遂

名護町喜瀬、宇茂佐の保養院敷地選定に失敗した当局は、昭和七年(一九三二)第

三の敷地を羽地村嵐山に決定し、極秘裡に工事を開始した。だが、このことが新聞にすっぱ抜かれたため、地元では一町三村が連呼して強力な反対、阻止運動を展開した。これに対し当局は強行措置のかまえをみせ、全島から三百余名の警察官を動員し、三九名にもおよぶ検挙者を出すという強行手段におよんだ。これに対して地元羽地村では村長以下全役所吏員の総辞職をもってこれに徹底的に抵抗したため、県当局は三度にわたり保養院設立を断念せざるを得なかった。これが世にいう「嵐山事件」である。

先年、沖繩の書店で偶然手にした『山原の火』という本も、この事件に関して記述していた。それによれば社会運動家と呼ばれる人々もたくさんこの反対デモに参加したという。しかしその視点はあくまでも県当局の強行姿勢に対する住民側の生活を守るための正当な闘いという内容であり、苦悩のどん底に身を置きかろうじて生きながらえていた病者のことなどには、一瞥もなかった。

このようにこれまでの保養院設置に関する騒動は、すべて県当局対地元民の争いであって病気を病んでいる人たちに光があてられることは決してなかった。このような事実に対して青木師は、病者自らが立ち上がる以外保養院設置の可能性はないと判断し、病者自身による保養院設置運動（闘争といったほうがよい）を決意したのである。

師は、実に機知に富んだ人であったらしい。

青木師の病者たちによる実力行使（意志表示）の第一歩は、師が買収していた大堂原に隣接している官有地への居座り、そしてその既成事実による居住権獲得戦術で開始された。

師は、病者の安住の地としての保養院（療養所）、その用地獲得の実現可能性を民衆の共同意識の偏狭さに見出していたように思われる。やっかいなものが自分のところさえこなければよいという虫送りの意識を承知しつつ、嵐山候補地が一町三村の反対運動にまで拡大したのはそれらの町村の水源地近くであったためで、ヤガシ屋我地島のはずれの大堂原であれば一部地元民の反対しかないと計算した。しかし、実際はその通りであったが、一部地元民の反対、反発が過激化し、青木師殺害未遂となっていた。

青木先生の著書『選ばれた島』は、その名前に落ち着くまでに、「阿旦葉のかけに」や「カルバリの路」と二度ほど題名を変えた。

最初の題名「阿旦葉のかけに」は、師の心情がよく出ていると思う。阿旦アダンは沖繩の浜辺に広く自生している灌木であるが、その葉かげに守られて殺害からまぬがれたか



らである。

青木先生に率いられた病者たちが大堂原の一角に居座ったことは嵐山事件直後でもあり、その行動は地元<sup>すむい</sup>済井出の集落民を極端に刺激することとなった。激昂した集落民は「青木がいるから」ということで、首謀者青木殺害の謀議がなされた。昭和九年（一九三四）一月一日、青木師殺害未遂事件のようすを、師は次のように記している。

「みんな元気ですか」とわたしはテント溜中へはいった。すると病友たちは久しぶりの対面だというのに笑顔さえも見せず「青木さんが来た。大変だ、大変だ！」とろたえた。

「どうしたんですか」というと嘉元さんが小声で早口に説明した。部落の人々はわたしを殺すといきまいて、夜となく昼となくわたしが来るのを待ちかまえており、今夜ももう見張りに来る時分だという。部落の相談を平永さんが聞き、ひそかに家を抜け出し、胸まで水につかって知らせてくれたのだった。そして彼の話が終わるか終わらぬうちにもう一人の病友が、「来た、来た。青木さん早く隠れて。早く早くっ！」とわたしをテントの外へ押し出した。

嘉元さんは自転車を軽々と脇にかかえるや阿旦林の中に無茶苦茶に突入した。わたしは何を考ふる余裕もなく彼の後を追った。阿旦の葉が音を立てて枝がいくつも折れた。密林の奥に自転車とわたしを残して嘉元さんは出て行った。と思うまもなく、「間違ひなく来ているぞ、逃がすなっ」という殺気あふれる叫び声が出た。そして群衆が雪崩を打って迫った。

先頭の者がテントの前でがなった、「青木を出せ。たった今渡し場から来たはずだっ」。

彼らはわたししの自転車の電灯の光を見たにちがひなかった。だが、病友たちはひっそりと静まりかえっていた。

「テントにはいない、その辺に隠れているぞ、阿旦の中を探せっ」という声とともに、葉と葉のすれ合う音が次第にわたしの方へ近づいてきた。わたしはもうこれまででと思った。棍棒を持った男が、茂みをぶん殴ったり突ついたりしながら葉をおし分けて近づくのが見えた。今や「ライ患者の怨み」など問題でないほど彼らの怒りが大きいのをわたしは悟った。それに群衆心理も手伝っている。見つけたが最後流血の惨事を免れない。男は段々接近する。わたしは眼をつむった。



観念のほどを固めた。

沖縄救ライの人柱！ わたしは息絶えて病友たちに取り囲まれた自分の姿を想像した。その瞬間、不思議な閃きがわたしを打った。そうだ、一羽の雀でさえ神のお許しがなければ地に落ちることはないのだ！ すべてはみ心のままに進展するのだ。み心におまかせしていればよいのだ。そう気がつく、恐怖の心がすうーっと消え、かわりに深い深い平和が与えられた。そして殺意に満ちて騒ぐ人々にすまないという気持が湧いて、父よ彼らを赦し給えと御憐れみを乞い祈るまでに恩寵に満たされた。

わたしは眼を開いた。その時、数歩手前まで来ていた男は方向を変えてそれであった。それはひとときわよく繁った阿旦の枝でもってわたしを彼の眼から護って下さったからである。

（『選ばれた島』）

この青木師殺害を未遂に終らせたのが大城平永さんの勇氣であった。

大城平永さんは愛楽園のある済井<sup>すむい</sup>出身<sup>で</sup>である。一九歳の時サイパンに渡り、そこで発病、失意のうちに親元へもどってきた。青木先生と知り合い生きる勇氣を得た平

永さんは、青木先生を手助けすることを使命と感じその結果危険な橋をいくつも渡ることとなった。

その一つが大堂原うふどうばらの土地取得であった。青木師名義となれば計画を相手に知らせるようなもの、大城平永名義で登記をし、集落の人の目をごまかした。このことがいつ発覚するかと平永さんはおびえつづけたという。まるで「爆弾を抱えているようだった」と述懐している。

また、青木師殺害未遂の時も平永さんは自分の命をはって青木先生を守った。その時のようすを私のインタビューに答え、平永さんは次のように語ってくれた。

大郷 あともうひとつ、青木先生がここにこられてですね、村の青年たちが青木先生を追い払う。特に療養所が出来るのは青木のせいだと言うことで、例の危ない一時がありましたよね。その辺のところを少しお話しいただきたいのですが。

大城 青木先生は私がおこにおる間に、済井出に上陸しようとして、しよっちゅう船から上陸しとったんですよ。その時に、青木を殺してしまえば、あとは指導する者がいないから、もう離散してしまうだろうと、青年たちは考えてましてね、

この青木をまず殺そうじゃないか、刑務所に入っても懲役十年ぐらい、あとに残った家族は部落民が面倒を見てくれるから思い切って実行しようじゃないかと、村の青年会で相談したものを、私の弟が私に告げたんですよ。それを聞いて、これは大変だと思って、青木先生のいるところへ行つて、「村の青年たちがやがてくるから、青木先生は早く逃げてください」と言つて逃がしたことがあるんですよ。そのの浜の川尻から、もう潮が満潮で、頭に着物を巻き付けて、渡つていったのです。その時青木先生は命拾ひしましたよ。あの時、村の青年たちは青木先生を殺そうと相談していましたから、青木先生には申し上げませんでしたけれども、本当にそういうこともありました。

その私がおる時にも、青木先生たちは、テントの小屋を建てておったんですよ。まあ、そこで十四、十五名ぐらいがいすわつて『居座り』運動をしておったところが、もうみんな村の人たちが、棒で引っかけたテントを海に流してしまつたんですよ。そういうこともありました。

また、青木先生たちはかわりの家を建てて、新聞によるとそこで祈つておったんですが、青木先生たちは非常に苦勞して生活しておりました。まあ、私の家

も部落民から攻撃されておるんですけれども、青木先生たちは実際に攻撃されても忍耐強く、非常に頑張りましたね。青木先生たちのおかげで愛楽園というものができたのだというふうに言っても過言ではないでしょう。

このような証言を見ても、青木師はじめ病者に対する迫害が、いかにすさまじいものであったかが理解できる。

なお、愛楽園誕生の陰の功労者ともいえる大城平永氏（一九八五年逝去）について一言、附しておきたい。

村社会にあつて、村の決定に逆らうということはいへん勇気のいることである。平永さんの青木先生への尊敬の念と勇気がなかったら、愛楽園の誕生は定かではない。その平永さんがいちばん喜んでいたことは、愛楽園の誕生もさることながら、その設立以来今日まで地元から一人も発病者がいないこと。そしてその存在により地元経済が他のどこよりも安定していることであつた。

屋部の焼き打ち事件と逃れの島、そして愛楽園誕生

屋我地島の一角、大堂原に座り込んだ青木師はじめ病者は、集落民の予想以上に強い迫害のため、ついに四散を余儀なくされた。間一髪で命拾いをした青木師は、病友数名とともに屋部に逃げ、次の行動にそなえた。

昭和一〇年（一九三五）五月、青木師の訴えをうけた救世軍那覇小隊長花城武男は、沖縄における救癩活動の急務を訴え、「沖縄MTL」（Mission to Lepersの略）が創設され、病者の生活救護を開始した。沖縄MTLは青木師と救護所地帯に小屋を増築し、浮浪病者二〇名を収容した。しかし、このことが「癩救護所設置計画」と新聞に書き立てられたため、屋部の集落民は激昂し、病者の家屋焼き打ち事件にまで発展した。家を焼かれ、即時退去を迫られた青木師はじめ病者二〇名は、路頭に迷ったあげく、羽地内海に浮かぶ無人島ジャルマ（奴隸、卑賤の意味）への避難を余儀なくされた。師はこの時の心境を一つ詠んでいる。



小島ジャマルの現在。焼き討ちにあった20名は、この島に避難した。

魚ならば海に潜りて生きん。

鳥ならば空に上がりて逃れん。

五尺のからだ置き処なし。

水もなく、強風が吹けば島全体潮がかぶってしまふ三〇〇坪たらずの小島ジャマルでの生活は二名の犠牲者を出した。それはもはや病者にとって長続きする環境ではなかった。

昭和一〇年一二月、青木師は病友一五名とともに、一度命を失いかけた大堂原へ移住し、小屋を建て、地元民に永住の強い意志を再表示した。当初は強い拒否反応を示した集落民も、青木師はじめ病者の決死的覚悟の前に、ついに妥協したのであった。



時に昭和一〇年一二月二八日のことであった。

青木師はじめ病者の大堂原における地元済井出部落民からの既成事実による居住権獲得により、明治四二年（一九〇九）以来失敗に失敗を重ねてきた保養院（療養所）の敷地問題が、ここにはじめて解決されたのである。

大城平永さんが隠し守った青木師の土地三〇〇〇坪の寄贈をうけ、昭和一三年（一九三八）一月一〇日、「旧癩予防法」制定以来実に三〇年、青木師の働きより一〇年目にして、公立癩療養所国頭愛楽園が開所されたのである（昭和一六年へ一九四一）国へ移管された）。

私が青木先生から最期の言葉をもらってから三二年、今こうして改めて師の足跡をたどってみると、「凄まじい」としかいいようがない。当時二三歳の私にとって、それがどれほど凄まじいことなのかはわかっていなかった。その間、自分は自分なりの修羅場をいくつつかくぐつてきたつもりだが、それでも師が直面せざるを得なかった「凄まじさ」とはどれほどのものなのか、とうてい理解できるものではない。師の私への最後の「人生は……」、私はその完成文を聞かなくてよかったと、今も改めて思

越えてきて骨を埋むる一葉かな

惠哉

青木先生が沖縄に着いたときに詠まれた句。  
「越えてきて骨を埋むる一葉かな 惠哉」

っている。しかし、たった数文字のその文章を完成させるということは何と難しく、重い作業だろうか。

しかし私は、「痛み経て 真珠となりし 貝の春」という冒頭の句に一つのヒントを感じる昨今である。凄まじいとしかしいような人生を終えるにあたり、生きることへの気づきとして師は、「痛み経なさい」と語る。

いまだ二〇歳そこそこの私に、中途半端に悩み苦しむのではなく、それらとしつかりと向き合い、悩み苦しみ抜くことの大切さを語られた。女性の胸元を美しく飾る真珠。その輝きは、傷口を癒すために分泌された体液による貝自身の癒しの業である。そんな真珠貝に自分の人生を重ねて、師は「痛み経て」と語るのである。人生旅路を旅するうえで、何か一つの道すじを照らし示されているように思う。



### 三. ハンセン病について

はじめに、私はこれまでこの病気のことを、「ハンセン病」「癩病」「らい」「ライ」など、さまざまな名前や文字で呼んできた。読者のみなさんも戸惑われたことと思う。どれも同じ病気のことなのだが、時代や分野（医学、法律）などによって呼び名や使用文字が変わってきた。それは本病に対して、あまりにも激しい差別、偏見、人権無視があったからである。

たとえば、私の手元に二冊の本病に関する医学書がある。一冊は一九七〇年発行、国立療養所長島愛生園園長高島重孝監修の『らい医学の手引き』である。他は一九九七年発行、東海大学出版会の『ハンセン病医学』である。前者には「ハンセン病」という呼称はいつさい用いられていない。それに対して後者は「ハンセン病」で統一され、「らい菌」や「らい反応」など医学用語のみに「らい」が用いられている。

一九八〇年代の差別用語排除の中で、本病の「らい（癩）」も差別用語とされ、かわりに「らい菌」を発見したノルウエーのH・G・A・ハンセンの名を取って、「ハンセン病」と呼ぶようになった。

私も青木師の足跡を書きつつ、「癩（らい）」というすべての呼称を「ハンセン病」に書き改めるかどうか迷ったが、資料は資料として、また、その時代の中での本病の呼称をそのままに用いることにした。関係者および読者のご理解をいただきたいと思う。

また、長年にわたる本病に対する差別や偏見、そして「らい予防法」の性格やそれが生みだした患者の人権侵害の事実、それらに対する訴訟問題（現在係争中）などが実に難しいさまざまな問題を抱えこんでいる。しかし、本書はそれらについて言及することが目的ではないし、また私にその能力も資格もない。一人の若者がハンセン病を病んだ人に出会うことによって、何を考えどのよう生きていったのか、「ハンセン病」に関してはそのに必要な範囲内で触れることとしたい。

私の手元にハンセン病に関わる、財団法人藤楓協会発行の小冊子がある。ハンセン

病を正しく理解するための啓蒙冊子である。それには一般向けに、わかりやすく次のように書かれている。

ハンセン病は治る病気です

ハンセン病の正式の病名は「らい」です。長いあいだ、人びとはらいに對して偏見と差別をもちつづけてきたためにいまわしい過去をきりすてて、正しい認識をもつてほしいというねがいから、らい菌の発見者ノルウエーの医学者ハンセン博士の名をとってハンセン病という一般名が、使用されております。

ハンセン病は、らい菌による慢性の感染症です。末梢神経がおかされる病気ですが、皮膚のおかされることも多く、他の組織がおかされることもあります。ハンセン病は遺伝しません。ハンセン病は治ります。

らい菌は、結核菌に似た細菌ですが、結核菌よりもはるかに感染力が弱く、よほどのらい菌に對する抵抗力の弱い状態で、しかもくりかえして接触しなければ感染することはなく、感染しても発病するのはごく一部の人にすぎません。

明治以来、近代的なハンセン病の療養所が設立されて百年になりますが、そこで

働いていた職員でハンセン病になった人は一人もなく、どんなに感染しにくい病気が実証されています。

感染して発病した人でも、その人の菌に対する免疫のちがいがいから、自然に治る人もあり、治療しなければ治らない人もあります。

昔から、自然に治る型の人、治ったあとは誰にも感染するおそれはなかったのですが、末梢神経がおかされて、それがもとどおりにならず手や足に変形がのこったり、知らない間に傷をしたりするため、いつまでも病気のままだと間違えられておりました。

治療を要する型の人、よい薬がなかった時代は、次第に病気が進行して、気の毒な状態になりましたが、一九四三年にスルフォン剤がハンセン病に使用されるからは、完全に治る病気になりました。

「ハンセン病は治る病気になりました」。一九四三年に治らい薬スルフォン系薬剤D Sやプロミンが発見、使用されることにより、ハンセン病は治る病気となった。それまではといえは有効な薬物はほとんどなく、ハンセン病は不治の病として恐れられ

てきた。病気が治るようになってまだ五十年余しかたっていないのである。

それに対して不治の時代はあまりにも長すぎた。古代インドでは紀元前六〇〇年ごろには医学的にも信頼できる書物に記されているという。私が出会ったころの人たちは、不治の時代に病にかかった人々であり、二千数百年余の間に蓄積された差別や偏見の重さを背負っている人々であった。

ハンセン病がなぜ差別や偏見の対象となったのだろうか。東海大学出版会の『ハンセン病医学』に、「差別、偏見の対象となりやすい条件」として次のように記されている。

差別・偏見の対象となりやすい条件

人に喜ばれたり、好かれたりする疾患は皆無に近いが、それでも大部分の疾患は喜ばれないまでも差別と偏見の対象となることは少ない。それにもかかわらず差別と偏見の対象となりやすい若干の疾患があり、その1つの典型がハンセン病である。

差別と偏見の対象となりやすい条件はいくつかあり、それが1つだけであっても対象となりうるが、多数の条件が重なりと一層差別・偏見の対象になりやすくなる。その条件となるいくつかの例をあげる。

- ① 遺伝性疾患あるいは遺伝性と信じられている疾患。血友病など。
- ② 死亡率の高い疾患。がんなど。
- ③ 難治性の、あるいは慢性の疾患。各種の難病など。
- ④ 感染症、とくに「恐ろしい」伝染病。結核など。
- ⑤ 外見上の脱落・変形・変色を伴う疾患。ケロイドなど。
- ⑥ 浸出液・異臭を伴う疾患。慢性湿疹など。
- ⑦ 肉体的に能力が劣っていると思われる疾患・機能障害。肢体不自由者など。
- ⑧ 精神的に能力が劣っていると思われる疾患・障害。知的障害など。
- ⑨ 不道徳とみなされている疾患。麻薬中毒など。
- ⑩ 宗教・慣習により社会集団でのみ特別視される疾患。アルビノ（先天性白色症）など。

ハンセン病はこれらの条件のうち③、④、⑤、⑥、⑦、⑩に該当し、かつては①、

②にも該当していた。すなわち差別や偏見を受けやすい多数の条件を備えていた。

一つだけでも十分に差別や偏見の対象になるというのに、ハンセン病は八つもその条件をかかえている。どうしてそんなことになるのだろうか。

その理由の一つにハンセン病は顔や手足など外見に変形をきたすことがあげられる。たとえば「末梢神経」の中の「知覚神経」が冒されると「痛み」を感じる事ができなくなる。麻酔をかけられたような状態で、感覚麻痺がおこり、火傷や切り傷などしやすくなる。温度感覚がなく熱湯の中に手を入れていたとか、真夏の太陽で焼かれた戸のレールの上に座っていて火傷をしたなどの話、数限りがない。

逆に私たちの健康が守られているということは、痛みを痛みとして感じる事ができるからであり、熱いものを熱いものとして感じ、瞬時に危険から身を遠ざけることができるからである。らい菌に「末梢神経」を冒された人たちは、肉体を守る手段である「感じる事」ができなくなり、その結果変形をきたすのである。「結核菌」と「らい菌」は同じ抗酸性菌でいわば兄弟であるが、たまたまハンセン病は肉体の外形をむしばむため、結核を患った人以上に激しく差別や偏見の対象となった。私たち人



間はやはり外見には弱い存在なのである。

ハンセン病に対する差別と偏見は、その呼称にもよく示されている。呼称には本病に対する世間の見方、態度がよく表現されていて興味深い。

沖繩では

- ・ 「クンチ」、「クンチャー」。これらはいずれも「乞食」の意。
- ・ 「チーヤンデ」、「チークル」。血液の病気の意。
- ・ 「チュラムン」。チュラは美しいの意で、病者の変形した容姿を皮肉つたもの。
- ・ 「シチャジ」。秘密にする病気の意。
- ・ 「コーター」。病者の変形した指を表現したもの。

本土では

・ 「かたい」（乞丐）または「かったい」と呼ばれ、道路の傍らなどにいて、人に金品を乞い求めるもの、「乞食」を意味している。

また、旧約聖書では「メソラー」といい、「打たれた者」の意味であり、ドイツ語では「アウスザッツ（Ausatz）」隅に片よせるといふ意味である。このようにハンセ



ン病の呼称をみただけでも、洋の東西を問わず本病に対する共通した態度が見受けられる。

このようにハンセン病に対する社会の無知、無理解は深い差別や偏見を生み、この病気を病んだ人に大きな精神的苦痛、苦悩を与えてきた。

私の手元に保管されている手紙の中から、彼らの苦悩の一端を書きとどめておきたい。

今年は幸先よろしいようです。私の母が八五歳の誕生の祝、息子や娘から電話がきたり、今まででなかったことでしたので胸が一杯になりました。息子の声は二〇年振り、娘の声は三五年振り、文通ばかりで生の声を聞いたことがなかったので夢のような出来事でした。今も夢心地なのですが、どうしてここの電話がわかったのか、知らせもしないのにびっくり致しました。やがて会えるのです。今から心配やら嬉しいやら、何をいいだすかわかりませんが、楽しみでもあり恐ろしくもあります。わかってしまえばもう仕方ありません。その時は主が力づけて

下さることでしよう。

私も、この新年は息子が三つの特別れたきりでしたが、長男親子を迎え四〇年振りの母と子の面会で、それこそ最高の幸福をいただきました。小さな特別れた息子ですから全々私をおぼえてはいませんでしたが、昔の写真の面影で話をしてやると、おぼろげながら思い出したりし、お互いが涙ながらの話でした。

また、こんなハガキも残されている。

前略。今後の通信すべては表記の会社宛に送付下さる様お願いいたします。

たったこれだけである。

母親の安否を問うこともなく、たったこれだけである。三分の二以上のハガキの空白に病気を病んだ者、それを親にもった子、お互いの苦悩がにじんでいる（ハンセン病の場合、身体の抵抗力が落ちた時に発病へと至る。女性の場合、出産後の発病とい

うことが多くあり、このような悲劇となるのである。

たまたま、それもまったくの偶然の重なりで病むことになった病氣、ハンセン病。そこには病んだ人の意志とは無関係に、「強いられた生」が待っていた。それがハンセン病（らい）である。

この項を終えるにあたり、詩雄二の「癩は長い旅だから」の一節をもって終わりたい。

## 海

### I

此処からは、

海は、とおい。

この頂から、海は――。

チチシス レンラク コウ

雲はれぬ、この尾根は、

今日も、雨——。

ボクの顔を打つ、死、

枯れ残る熊笹に、しぶき。

ユケヌ ヨロシク タノム

東京で、

父が、死んだ日、

とおく、海をおもう。

海よ——ボクは行きたい！

II

オヤジ、やい！

まだまだ、生きていねばならんのに、

働いて、働きぬいて、

貧しいままに、骨まで枯れて、

あさがた、死んだ。

——おまえが継がないで、だれが継ぐ

オヤジは、しかし、

いまでも、息子に目をむけて、

きびしく、要求する。

オヤジの死の、その奥ふかく、

もえたつは 生きるかなしみを貫く標か！

——ボクは、ライを病んでいる

この尾根の頂きに、立ち、

どしゃぶりの雨に打たれて、

なぜに今日、海を恋する心か！

愛しいひとよ、こんな日、

海にも暗く、雨は降りしきるのだろうか？

III

健康で美しいひとよ、

ボクのおフクロは、ライの子を生んで

そして、ライに死んだ。

眼も、耳も、声も、奪いとられて、

手指や足も、もがれて、

髪の毛までもむしりとられて、

人間の姿ではまるでなくなつて、

終戦の年の、そのあさがた、

黙って、

死んでいきました。

IV

けれど、ボクは生き残った！  
恋しいひとよ！！

V

健康で美しいひとよ、  
あなたは、白い砂浜に立ち、  
何を、おもう、  
雨に濡れて――。

チチシス レンラク コウ

此処からは、  
海は、とおい。  
ライの尾根の、



この頂から、海は――。

詩  
雄二「癩は長い旅だから」

#### 四．面接聞き取り調査で出会った人

一九九六年四月一日、ハンセン病患者を「隔離」する根拠となっていた「らい予防法」が廃止された。三十数年間、間接的にはありながら、病気を病んだ人々に関わってきた私にとっても、ハンセン病を特別な病気にしていたその法律の廃止は、記念すべきものとなった。

「らい予防法」廃止記念に、私はある一つの場所を訪ねることを決めていた。一人の病者が一八歳から二八歳までの一一年間、一人暮らしをしていた場所である。

山城タケさん、明治四一年（一九〇八）三月生まれ、私のガール・フレンドであり口げんか相手のオバーである。一九六八年夏、はじめてボランティア・グループを組織して訪ねたとき、このタケオバーは「人が怖い」といって押入れに逃げ込み、私たちと顔をあわせようとはしなかった。今でこそ「人が怖い」という言葉が通用するが、

まだどこか牧歌的なあの時代に、「人が怖い」といって押入れに逃げ込むその姿は異様であり、シヨックだった。私はそのタケオバーに強くひかれた。

どれだけ通っただろうか。二、三年たったころにはいつしか一緒に話し合えるようになっていた。何がそうさせたのかはもう記憶がない。ただ、人間が恐かったその分だけ、反動として人との交わりを求めていたのだろうか。フタを開けてみればとって人も人なつつこい、ユーモアのあるオバーだった。

### 上間源光さんのこと

大学四年の春、私は卒業論文のテーマに、沖縄のハンセン病を選んだ。入園者の、発病そしてその後の生活に関する生の声加わればということ、面接調査を実施することにした。

しかし、彼らの苦悩をじかに見ていると、とてもではないがその苦しみの日々を思い起こし話してくださいとはいい出せなかった。

どのように切り出そうかと悶々としていた私を察して、上間源光さん（一九八四年

没)が助け船を出してくれ、数人の方に協力を頼んでくれた。

そして上間源光さんが最初の人となった。誰もいない礼拝堂の昼下がり、私は何をしたのようか聞いてよいかわからなかった。緊張で身体がガチガチになっていたことだけはよく憶えている。そんな私を気遣ったか、源光さんは出生、発病そしてその後のことなどを淡々と話してくれた。

### 一つの気づき

明治四〇年(一九〇七)生まれの源光さんは当時六三歳だった。両目の視力はほとんどなく、そして極度の難聴。心臓にはペースメーカーが入っており、両手両足の指は、戦時中の激しい労働でほとんどなくなってしまっていた。

貧しい家に生まれた源光さん、小さいころに漁師として糸満イトマンに売られていった(戦前の沖縄では女性は廓へ、男性は漁師として糸満へ売られていった)。カツオ漁を主にしてきたという。二〇歳ころに発病、そのために年季明けを待たず帰された。故郷の山に入り炭焼きを業として生計をたてたという。その源光さんは、二六歳の時、結

婚したという。私はてっきり同病の方との結婚と違ってその点を確認したら、病者ではない女性と聞いて少々驚いた。それも相手の女性は源光さんの病気を知ってのうえということに私の驚きは倍加した。私たちの想像を絶するほどハンセン病を嫌っていた当時、病者ということを知ったうえでの結婚は考えられなかった。よっぽど好きあっていたのだなあーと思った私だった。

しかし、源光さんの病気は悪化の一途をたどった。このまま自分と一緒に、妻は幸福にはなれないと思い、離婚することを決意したという。「別れなさい」という源光さんと、「何があっても別れない」という妻。そこで源光さんは一計を案じたという。遠く離ればなれになればやがて熱き心や思いも離れていくだろうと。「このままでは生活ができない。私は療養所に入り治療を受ける。私を助けるとして働きに出てくれ」といって、愛する妻を紡績女工として大阪へ出したという。そして、それから五年間、源光さんは毎日のように「別れなさい」という手紙を書いたという。

話がこのあたりに来たころには、私はもうボロボロだった。わずかな想像力を働かせるまでもなく、離別の手紙を書きつづける源光さんの胸中、痛いほど伝わってきた。私は泣き出してしまった。彼のあまりにも過酷な現実が内臓が引き裂かれるような思

いととともに、卒業論文の資料という身勝手な理由で、痛みきった彼の心の中に土足でドカドカとあがりこんでいった自分のどうしようもなさ<sup>に</sup>情けなくなり泣き出してしまった。

しかし源光さんは優しく、泣きじゃくる私をいたわりながら、「大丈夫ですよ」といい、話をつづけた。それは彼の苦悩の序章でしかなかった。

妻の再婚を確認した後、源光さんは療養所内で同病の人と再婚した。

源光さんたちが治療、生活していた愛楽園は、昭和十九年（一九四四）一月一日、沖縄戦の大空襲ですべての建物が爆破され、焼失してしまった。離れ小島の一隅にある療養所が大爆撃をくらったのである。それには次のような理由があった。

国立ハンセン病療養所沖縄愛楽園は、沖縄本島北部、羽地内海に浮かぶ屋我地島<sup>やがじ</sup>の一隅にある。深く切れ込んだ狭い入江をはさみ、対岸は本部半島の運天港である。現在でも台風時の避難港としてこの一帯は重要な役割をしている。

戦争中、この地形を利用して、特殊潜航艇（人間魚雷）「回天」の出撃基地がつくられた。愛楽園のたたずまいが、兵舎とみなされて誤爆されること、誰もが容易に想像できた。米軍の偵察機に対して、そこが療養所（病院）であることを示すため、赤

十字の旗を立ててほしいという患者自治会の要請に対して、病院当局はなぜかそれを認めようとはしなかった（私がある入園者に次のような話を聞いた。愛楽園内にも「大政翼賛会」が組織され、戦争への協力体制がしかれた。病院の存在を示す旗あげ要請の時、当局側からこのようにいわれたという。「この戦時、わずかな金でも必要な時に、お前たちは大事な血税で養われている。敵の目をここへ引きつけておけば、その間わずかでも友軍は闘いを有利に展開できるのだ」。今となつてはことの真相を確かめることはできないが、時代背景や入園者への処遇を考えると、そのような発言があつてもおかしくないと私は思っている）。

爆撃による直接的犠牲者はなかったものの、愛楽園の、建物という建物は灰燼に帰した。その後の困難な復興作業や栄養不足で、多くの入園者が死に、また手足を失つていった。

さて、源光さんの話にもどろう。戦後まもなくのある日、源光さんの奥さんは不発弾に触れ爆死した。名ばかりの昼食を二人で食べながら、今日も残り無事に過ごそうねといひあつて、別々の作業に出かけた直後、浜の方で鈍い爆発音がした。大急ぎでとんで行くと奥さんが倒れていた。腹から腸が飛び出し、苦しむうめく妻に何もして



やれなかったと彼はいった。この事故で四名が死亡した。

「私はこのような精神的苦悩と、肉体的な苦痛によって私の視力は衰え、昭和二六年（一九五二）ころには完全に失明しました」と遺稿の中で語っている。

聞き取りが終わったある日、入園者の方が逝去された。当時は霊安室などなかった。私が宿舎としていた祈りの家教会の日曜会館が霊安所として用いられていた。お通夜や告別式に家族が出席することは当時は稀れだった。遺体にヨレヨレのシーツがかけられて帰ってきた時、「看護婦さん、最後の時だけはもう少しきれいなシーツをかけてやってくださいヨ」と訴えるように叫んだ病友の言葉が今も耳にこびりついて離れない。仲間内で朝まで遺体を守った。私もその仲間に加えてもらった。

気の弱い私、葬式が終わった日の夜、一人でその宿舎に帰るのが怖いのである。布団を敷く時、どう工夫してみても遺体が安置されていた場所にかかる。そこで一人寝るのはどうも苦痛だった。そんな私を案じてか源光さんが声をかけてくれた。二人で一緒に寝ることになった。お互いはじめての経験、私にとって人生の偉大な教師と見える人と枕を並べて眠れること、至福の時であった。もうその時は、あの聞き取りの

時のような緊張は私にはなかった。あの時たずねられなかったことを聞いてみた。聞き取り調査の際、私は泣き出してしまい、やめましようといった時、「いや、大丈夫ですよ」といって話しつつづけていった源光さんのことは先に書いた。私はその「大丈夫ですよ」という言葉の中に詰まっている源光さんの気持ちを聞いてみた。

「私もあのころはまだ若く、神仏など素直に信じられなかった。いや、神仏を呪いました。なぜ一つ二つの不幸だけです、こんなに背負いきれないほどの苦しみを自分に背負わせるのかと。

これまで自分の苦しみと闘いながら生きてきました。一時はすべてを恨みました。もし私が自分の苦しみに目をつむって、それを見ないようにして生きてきたのなら、今こうしてあなたに話すことは辛くて、とてもできないでしょう。でも私は自分の過去を見つめながら生きてきました。だからもう大丈夫なのです」

と静かに話してくれた。「私は自分の過去を見つめながら生きてきました。だから、大丈夫なのです」——この源光さんの言葉が、その後私がものごとを考えていくうえで、一つの大きな気づきを与えてくれた。

### 山城タケさんのこと

聞き取り面接調査の二人目が冒頭の山城タケさんだった。タケさんが発病を知ったのは一二歳のころ、そのため学校は小学校五年生までしか行けなかった。家に閉じこもり悶々とする日々、タケさんの病気が理由で、弟や妹はいじめられ、学校から泣いて帰ることがたびたびあったという。また、家にいると、那覇の町や内地、たとえば大阪や東京などへ出稼ぎに行った友だちから、それぞれの家庭に送金があった話を聞かされた。その話を聞くたびに自分が恨めしくて、惨めな思いをした。そして、自分がこのような病気にならなければ、両親に少しは楽をしてもらうことができるのにと、涙を流して親不孝をわびたという。

あまりもの世間の仕打ちに、自分さえいなければと思い、家を出ることにした。集落から三キロメートルほど離れた海岸に小屋を建て、畑を耕し海に潜って漁をして、一八歳から二八歳までの、人生でいちばん華やいだ年代をタケさんは一人で生活した。「夕暮れ時がいちばん淋しかった」とタケさんはいった。そのころ、お月様の中に

神様がいると漠然と思い、夜になるといつも空を仰いで、「神様、なぜ私を、私一人をこんな病気にしたのですか。私は何も悪いことをしていないのに、どうして私一人を、人に嫌われ家族と一緒に暮らせない病気にしたのですか。ねえ、神様、私を助けてください」といつて手を合わせ、そして白い砂浜に座って泣いたという。

そんなある日、父危篤の連絡が入った。近所の人の目が恐くて家に行くことはできなかった。そして父の死。家人が訪ねてきて、これだけは務めだからきちつとお別れしなさいと、きつく申していったという。その時のようすを語るタケさんの表情を私は忘れることができない。「人が恐くて、人と顔を合わせることが恐くて。父が亡くなった日その夜を待つて、私は家を出てからはじめて家に向かった。人に会うのが恐かったから、墓場から墓場へと身を隠しながら家に近づいた。途中、どうしても橋を渡らなければならなかったが、橋の上で人に会うのが恐く、着物を頭にのせて川を渡った。家にはあがることなく、遠くからお父さんに我が身の不幸をお詫びし、お別れしました」——これがタケさんの青春だったのです。

そんなタケさんが、面談の最後に私にいった。「大郷さん、長い人生の中、たくさんの山坂を越えなければなりませんヨ。時には転ぶ時もありますヨ。でも、転んだら

起きあがりなさいね」

「転んだら起きあがりなさいね」——この時からこの言葉は激しい勢いをもって私の中を駆けめぐるようになった。そしてそれまでの私を打ち壊していった。それは私にとって大きな「カルチュアショック」だった。なぜならば、それまでの私は自分の人生において転ぶことを恐れ、転ばぬようにと「転ばぬ先の杖」を太く、強くすることに汲々としていたところがあつたからだ。ホテル学校から大学へと、確かに自分探しの旅があつたとは思うが、しかしどこかで「転ばぬ先の杖」を太く確かなものにしてしようという、人生において転ぶことを恐れていた自分があつたと思う。人生旅路を転ぶものという前提に立ち、「転んだら起きる」という単純な道理を身をもって語るタケさんに、私は本当の自由人を見たように思った。

ちなみにギリシャ語では「人間」を「アンスロー・ポス」という。これは「アンティ」(〜に抗する。抵抗する。反対するの意)と「レポー」(沈む、倒れる、屈するの意)という二つの言葉からできている。人間とは、打ちひしがれて倒れること、沈み込むことに抗する存在なのである。人生、「転んだら起きる」、これこそが人間であり、旅人であることを、タケさんは簡単な言葉でいいきった。まさしく人生の達人、哲人で

あると思つた。

一九九六年四月五日、私はそんなタケさんを愛樂園に訪ねた。ハンセン病を病んだ人々の生活を代表するものとして、私はタケさんの青春時代の地を自分の目で確認しておきたかった。また、タケさんが死んでしまえば彼女やハンセン病を病んだ人々の苦しみが染みついたその場所は永久にわからなくなってしまう。それは何か大切なものを失うようで、私には耐えがたいものと思われた。

私の申し出にタケさんは半信半疑だった。あんな場所に行つてどうする、あんな場所がそんなに大事なところかと繰り返す彼女。「転んだら起きあがりなさいね」という彼女の一言に、どれだけ私が導かれ、支えられ、強められてきたかを縷々話し、その大切な場所をこの目で見、次の世代にも伝えていきたいことを話して、彼女の協力を願つた。

しかし最後は、八八歳の高齢で足も悪く、海岸への道をよく歩ききれないといった車から海岸の小屋跡まで背負つて行くからという私のねばりに、タケさんは根負けしたのか、「そこまでいふのなら行つてみるか」といい、一緒に出かけることとなった。

そこは沖繩本島北部東海岸（太平洋側）、安波あはの集落を抱き込むようなかたちの半

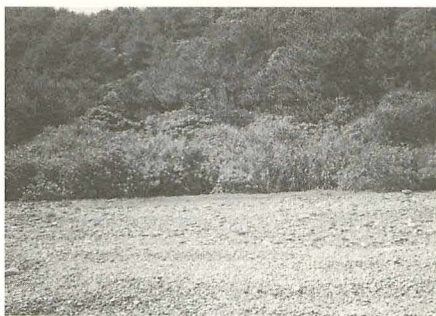


島の裏側で、集落から二、三キロメートル離れたところで車を降りた。タケさんは、自分の死ぬまでもう一度見ておきたいが、背負ってもらって行くのも難儀なので車の中で待っている。そのかわり、親戚の方でその場所を知っているという年輩の方が案内してくださった。車道から海岸への道を下りはじめると、タケさんを背負って歩くことは無理であることがすぐにわかった。大小の石（岩）がゴロゴロした傾斜のきつい道だった。一五分ほどで海岸に出た。砂浜は申し訳程度で大部分は石や岩のゴロゴロした、自然条件の厳しそうな海岸だった。干潮時で水は沖へ引いてはいたが、満潮時には水が満ちるだろうと思われるところ間際までアダシや琉球松などでぎっしりおおわれ、ジャングルのようになっていた。「タケオバーの小屋はあの辺でしたヨ」と指さされた場所にその痕跡を見出すことなどはあり得べくもなかった。傷の悪化で片足を断切し、義足歩行のタケオバー。室ではその義足を枕に昼寝していた。そんなユーモアな光景をひやかすと、「ウン、私の足、一足先に天国に行ったからね」といってやり返したタケオバー。そうやって笑い飛ばすようになるまでどれだけの涙を流したことだろうか。一八歳〜二八歳までのこの地における一人暮らしと、流してきた涙を思うと、泣けて泣けて泣けて仕方がなかった。一緒に行った入園者の松岡和夫さんも、



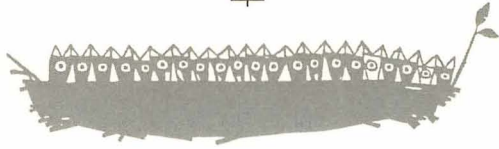
「こんなところで一一年間もいたのですね。大変でしたね。ご苦労様でした」といく度もいく度も涙をふいておられた。

「長い人生旅路の中で転ぶ時もある。でも、転んだら起きあがりなさいね」。タケオバーは私に伝えるその一つのセリフをはくために、この場所に代表されるような苦難に満ちた歩みがあったのだと思うと、その場所が「聖地」に思えてならなかった。



安波の海岸（上）とタケオバーの小屋があったあたり（下）。私にはここが「聖地」に思えてならなかった。

第二章



立教時代のこと

## 一・ 沖繩キャンプのこと

一九七八年、町の教会で牧師のタマゴとして働いていた私は、当時大学院生として通っていた立教大学の礼拝堂付き牧師（チャプレン）として赴任した。自分の能力のなさをかえりみず、三年間大学院で「キリスト教神学」を学んだが、論文を書くことはできなかつた。自分の能力不足もあつたが、自分がこの目で見てきたハンセン病の人たちの生きざまとアカデミズムの中での神学との乖離<sup>かいり</sup>を埋める方法を、どうしても見つけることができなかつた。許されるもう一年で論文をと主任教授に申し出たら、「いやー、また子どもが一人増えたらたいへんだから」と、あっさりとかわされてしまった。一人の子持ちで大学院へ入学した私、三年間の間にどういふわけか四人の子持ちとなつていた。三月三十一日付けで退学届を出し、翌四月一日付けで礼拝堂付き牧師の辞令をもらった。ハチャメチャな出発となつた。

大学という場で学生を相手に、自分は牧師として何ができるか、いや何を役割として果たしていかなければならないのか、私の仕事はそこからが発だった。

キリスト教大学とはいえ、私が卒業した大学のようにキリスト教の必修や礼拝参加の義務や配慮など一切なく、まったくの自由、課外活動の扱いだった。

始業礼拝は朝八時半から。第一限目九時からの授業出席者も少ない状況の中で、履修単位と関係のない礼拝出席、それも八時半という時間帯。出席者なし、自分一人という惨めな日がいく日もつづいた。始業礼拝の中で語られることが自分にとって必要である、学生にそう受けとめられない限り、開店休業となるのである。ひじょうにわかりやすい理屈であるが、自分にとっては重く難しい課題であった。しかし、出発はそこからしかなかった。

そのころ林竹二先生の本をよく読んでいた。師は「教育」は「パイディア」(παιδία)、「それは「魂の世話」と訳され、「やがて自分で自分の魂を世話していく力」を養い育てることと語っておられる。「教育」、「パイディア」、「魂の世話」、「やがて

自分で自分の魂を世話していく力」、これらの言葉が私のからだ全体をとびまわった。与えられた大学という場での自分の役割、そして混沌としたままである沖繩愛楽園での体験、それらを整理し、深め、統合してくれるキーワードになるように直感した。

しかし、学生たちの現実には「自分の魂を世話していく」という世界とは、少しばかり隔たりがあった。心のバランスをくずした学生たちがたくさん相談にやってきた（それが私の仕事なのですが）。自殺した学生もいた。私は「悩み」に軽重はないと思う。また、軽重の判断などしてはいけないと思う。しかし、ささやかな人生の負荷に深く挫折し、心のバランスをくずしたり、自らの命を絶つ若者の前に、「なぜそれぐらいのことで」と叫んでいる自分がいた。

自分が直接触れてきたハンセン病を病んだ人々の生への姿勢、他方、明日の社会を背負っていきべき若者たちの心の状態。そのあまりものコントラストに私は自分のなすべき役割を激しく問わざるを得なかった。そして、私ができることとして、「自分で自分の魂を世話している人」、そのありのままの姿を学生たちに見せようと、彼らと一緒に愛楽園の人々の門をたたくことにした。一九八一年三月のことだった。

## 沖繩キャンブ

私は常々、「学ぶ」ということに関して、大別して二つの方法があると思っている。一つは学校とか教室とか限られた空間の中での学び、一般的にはキャンパス・エデュケーション (Campus Education) と呼ばれているものである。もう一つは学校という、限定をはずした空間、実際の (現実) 場からの学び、私はこれをキャンパス・エデュケーション (学校教育) に対してフィールド・エデュケーション (Field Education)、「場の教育」と呼んでいる。この両者は互いに排除しあう関係ではなく、補いあつていく関係と考える。一つの現場で出会った一つの光景、そこでの体験をもち込みながらいろいろな角度から問い、自分なりの仮説を導いて考えを深めていく、そんな場が学校であり、そしてそこでの深まりをもつてまた実際の場に出て新しい体験を得ていく。学校教育と場の教育は相互補完的であり、循環的なものであると考えている。沖繩、そしてハンセン病療養所という場の中で、学生たちは何を考え、何を問いとし、「自分で自分の魂を世話していく力」をどのように得ていくのか、私たちのささやか

な試みをはじめた。

ハンセン病療養所沖縄愛楽園での私たちの「パイディア」（自己成長）としてのプログラムは、入園者の人々の居室訪問、一日の出来事の中で思ったこと、考えさせられたこと、気づいたこと等々を文章化する「ふりかえり」、そして各々の思いや気づきを共有化するための「ミーティング」（話し合い）、この三つの要素が主になって組み合わさっていた。とくに、夜のミーティングは激しく、相手の気持ちを受けとめられなかったり、自分の心の中にわだかまっているものが何かわからずもがいていたり、入園者の真摯な生き方に触れることによって自分と向かい合わざるを得なくなったことによって生まれてくる強烈なエネルギー等々、それらがすべてまざりあって、人と人との激しい心のぶつかりあいがある、時には明け方の五時ごろまでつづくこともあった。その激しいミーティングの中から、いつしか「大郷地獄」という言葉が生まれた。

この「大郷地獄」という言葉に関して、少しばかり説明を加えたい。

七人姉兄の末弟の私は、いちばん年上の姉とは二〇歳離れている。私が生まれたこ



ろはもう結婚していたようだから、姉弟として一緒に生活したことはない。親からお前の姉といわれてきたからそうなのだと思っっているような感じだった。兄姉というものは二〇歳ぐらいの年齢範囲にあることを当然のことと思っていた。大学で働きはじめたのが三二歳、学生たちは自分の弟妹範囲であった。そのため、けっこう遠慮会釈なく学生たちに体当たりしていったため、それをよしとした者もいただろうが、反面戸惑い傷ついた者もいたことだろうと思う。

しかし、それ以上に自分の気持ちを真剣にし、その真剣さゆえに厳しくしたのは、学生たちへの思いとともに、療養所に生きる人々への思いがあったと思う。

先年パリで客死された森有正氏はその著書の中で、私たちが日常的によく用いる言葉、「体験」と「経験」とを区別して、次のように語っている。

私の生活の中にある出会いがあつて、それが人であろうと事件であろうと、その出会いが私の中に新しい生活の次元を拓いて行く、そして生活の意味自体が変化して行く。それを私は『経験』と呼ぶのであつて、記憶の中にただ刻みつけられ、

年月とともに消磨して行くもの、あるいは自分の生活の一部面の参考となるに止まって、そこに新しい次元を展くに到らないもの、それを私は『体験』と呼ぶのである。

一九六八年、はじめて愛楽園を訪ねた私はいろいろな意味でショックを受けた。なぜなら、この自分が生きるということ、根底から問われたからであった。

愛楽園で発見したことの一つに、彼らは一世一代の名セリフをはく人々であり、しかもその名セリフを惜しげもなく無償で私たちに語り、教えてくれるということである。

「痛み経て 真珠となりし 貝の春」と詠み、苦悩の果てにある輝く世界を示し、教えてくださった青木先生。

「アドアイ・エレ。主の山に備えあり」といつもおおいなる存在を信じ、その意志に従って生きることを語り、その人生をもつて自ら示された徳田先生。

「自分の過去に目をつむって生きてきたならば辛くて話せない。私は自分の過去と闘いながら生きてきました。だから（こうして話しても）大丈夫ですよ」と淡々と苦

悩の日々を語ってくれた上間源光さん。

「私の足、一足先に天国へ行つたヨ」と笑い飛ばしながら、「転んだら起きあがりなさいね」と教えてくれた山城タケさん。

どれもこれも珠玉の名セリフである。私たちが出会う愛楽園の人たちは、その人しか語れないたった一つのセリフを口にするために、あの苦しみを耐え抜いてきたのだなーと思うと、私は自分で耳にし、自分のこの目でしっかりと見た愛楽園の人々の生きる姿を、単なる想い出や人生の部分的参考程度の「体験」ととどめることはできなかった。自分自身の人としての在り様を根本から変える「経験」にまで深めなければ、自分には人ではないと思った。そのような思いがいつしか自分を激しいものにしていたと思っている。

### 学生たちの気づき

一九九三年クリスマス、激しい老齢化を迎えた入園者の人たち。お互い、いつ今生の別れとなるかわからないので、お世話になった方々がお元気なうちに、一度ともに

集う会をもとうということになった。鬼や地獄といわれた私が女房と一緒に招待を受け、沖繩までの交通費までプレゼントしてもらった。その時、せっかく集うならば文集をつくろうということになり、卒業生たちの思いのこもった一冊の文集ができあがった。学生たちがその時何を考え、その後どのような思いで生きているのか、彼らの声の一部をお届けしたいと思う。

参加者の声の終わりに入園者の一人与那原さんのエールも載せたいと思う。

八二年三月と八六年一二月の二度、沖繩キャンプに参加しました。現在、外資系のホテルで働いている関係で、名護の手前の恩納村おんなそんのホテルへ出張で何度か行く機会に恵まれ、その度に愛楽園へも足を運びました。キャンプ参加以来、なかなか沖繩を再訪できない仲間の多い中、自分は本当に幸運だと思わずにはいられません。

さて今回の「愛楽園に集う会」の素晴らしい企画、そして文集の制作にあたって、私にとって「沖繩キャンプ」が何であったのか、現在それがどう活かされているのか、考えてみました。一回目キャンプに参加したのは、大学一年の時でした。

静岡の田舎から東京に出て、やっと一年が終ろうとしている時でした。さほどの強い動機もなくキャンプに臨んだ私を待っていたものは「地獄」と称されるミーティングでした。私は、自分をみすかされそうな気がして、何も発言することができずに何日もが過ぎ、最後の最後、「大郷先生が怖くて怖くて」と情けない自分の心情を泣きながら告白しました。そして顔を上げた時、大郷先生の、そしてキャンパーたちの優しい眼差しに囲まれていることに気付きました。日中は、居室訪問で愛楽園の皆さんに、そして夜はミーティングの場でキャンパーの仲間に、自分を受け容れてもらえる喜び、人と向き合い心を寄せる難しさと喜びを教えられました。

二度目のキャンプには、自分が今後どう生きていったらよいのかを考えながら参加しました。というのは八三年一月に大きな事故に遭い、多くの人が亡くなつた中、自分が生き残ったという経験をしたからです。ご記憶の方もいらっしゃると思いますが、静岡県掛川市のレジャー施設『つま恋』というところのレストランでのガス爆発事故のことです。不幸にも、立教の学生がアルバイトでその場に居合わせ、私もその一人でした。昼食中に起きた事故でした。私のテーブルの向

かい側に座っていた方はお亡くなりになりました。たった一メートルたらずのテーブルをはさんで、まさに、生死が分かれたのです。「運命」といって片付けるにはあまりにも、シヨックな出来事で、こうして「生かされている」自分はこれからどうしていくべきなのだろうかかと悩みました。しかし、私に一体何ができるというのでしょうか。

出した答えは至って単純でした。「生きていくこと」です。自分の生を全うしていくことでしか、亡くなった方への供養はできないのではないかと思うのです。そしてそれは、「自分」を受け容れ、自分が生かされていることに感謝の念を忘れずに、人と真剣に向きあい、心を寄せて生きていく、という沖縄で学んだことを実践していくことにはかならないのではないのでしょうか。そしてまた、これが大きな優しさで私たちを受け容れて下さった愛楽園の皆さんへ、私たちができる唯一のことではないかと思うのです。

「痛み経て 真珠となりし 貝の春」

この句そのもののような人生を歩んで来られた愛楽園の皆さん、私たちを受け容れて下さって、またその強さに裏打ちされた優しさを惜しげもなく私たちに示し

て下さって、本当にありがとうございます。皆さんと出会えたこと、そしてこうして生きていることに感謝の気持ちでいっぱいです。

今年のクリスマスが今から待ち遠しいです。愛楽園の皆さんと、大郷先生と、歴代のキャンパーと過ごせるなんて夢のようです。

「生きていて良かった」

一九九三年一〇月 太田喜久子（八三年キャンプ参加）

大好きなおじさん、おばさん、お元気ですか。最後に伺ってから、二年近くがたつてしまいました。いつも沖縄のことを思っては力を頂いて、また頑張っています。前回お会いした時は、お体を悪くされている方が多く、心が痛みました。神様がお一人お一人を守っていて下さいますこと、お祈りしています。

私の方は、あの時お腹にいた子が、もう一歳半になります。生かされて感謝です。でも随分と重荷を負って生まれてきてしまいました。今まで五回の入院をし、先日五ヶ月ぶりに退院してきました。一歳までは慢性の喘息とアトピーが絶えず強く、息苦しさを、顔や身体の痒みで昼夜金切り声で泣いていました。笑うことは



少なく、不機嫌で、下痢や嘔吐が続きました。一歳になると、難治性進行性腎炎とネフローゼになり、手術の結果、三歳ぐらいまでには、両方の腎臓がだめになるだろうと言われました。左右の足の付け根のヘルニアの手術と、巨大に脹れ上がった陰のう水腫の手術もしましたが、今度は腹壁からヘルニアが出てきてしまいました。今回の入院では、腹水と全身の浮腫で体を横たえて眠ることもできなくなり、泣く力もなくなり、無表情で弱っていく日々が三ヶ月続きました。この子は苦しむために生まれてきたのかと思う日々でした。その後も繰り返す膀胱炎で膿が出て痛みが、自分の髪をむしり泣き叫ぶので、たまには体を休ませてあげたいと思ってしまう弱い親です。腎炎から来る高血圧、血尿、たん白尿、貧血、また、食物アレルギー、喘息、アトピーと薬づけですが、確かに生かされ、不思議なことです。

子供は、調子の良い時は笑い、遊びます。痛み・痒み・辛い検査や処置には全身で抵抗し、これがこの子の生命力の強さの源かと感謝しています。

親子で大海を漂う小舟に乗っているように感じる時も、この子の人間としての希望を失うことがなかったのは、愛楽園で、どんな暗闇に思えても、その先に必ず

光の在ることを、この目で見、体で感じてきたからだと思います。

私は、この子を神様からお預かりするために、愛楽園に招かれたのですね。その恵みに深く感謝いたします。

初めて愛楽園へ伺ったのは、一二年前、一九の春でした。

どうして自分のような心の醜い者が生きているのか苦しんでいました。色々な想いに、がんじがらめになっていた時、清善おじさんに、「人生は山あり谷ありですよ」と言われました。フツと楽になったのが始まりでした。

神島さんのおじさん・おばさんは、娘のように可愛がって下さいました。孤独な思いにとらわれていた私に、それがどんなに安らぎとなったことか。一緒に唄ったり、お食事をいただいたり、お話をしていると、心が溶けていくようでした。あの喜びは、今も決して忘れられない力です。

美智おばさんは、最初、「恐くないですか」とおっしゃいました。この言葉の奥の痛みと悲しみも、愛楽園を思う時、一時も忘れられません。そこへ突然訪れた私たちの存在の申し訳ない切ない想いも、決して消えませんが、後に、美智おばさんのお宅に一週間も泊めていただきましたが、その時の楽しさ！ あんなに楽し

いことが、人生にはあるのですね。おじさんが入院していらしたのが、とても残念でした。おばさんには元気を頂き、おじさんにはたくさんの人生訓を頂きました。何か心の底で呻いていた、自分でもわからない悩みが、ここでは聴いてもらえました。

聴かれることは、心の安らぎで、自分がいることを赦された、と感じます。私はこのままの姿ですべて受け容れられている、ということを経験したことが、私の生命の意味を変えました。私たちはすべて神の作品なのです。

第一センターの朝の祈り会でのことです。部屋の空気が何か細かい粒子のようなもので光っていました。ああ、これが聖きよいということか、と感じました。一度だけでなく、それは何度もでした。集まり祈る方々の感謝と喜びで部屋が満ちる世界があることを知りました。これ程の苦しみの人生を歩み、今も不自由な手足、様々な体の重荷と心の重荷を持ちながら、感謝に満ちる…。暗闇の先に光が必ずある…。その確信が、それからの私の道標みちしるべとなりました。

園の方との楽しい思い出は尽きることがありません。心からの素直な喜びと楽しさです。

青い海、空、丘の上の風、盲導鈴、ブーゲンビリア、泡盛、祈りの家教会…。

息子は長い闘いの中にあります。あらゆる面で恵まれています。入院先の子供の専門病院には、小さな体と心には、あまりにむごい病氣と障害の子がたくさんいます。親に拒否された子も、子の首を何度も絞めては絞めきれなかったという親もいます。今では、その親の苦しみもわかるようになりました。

世界中に誠（息子の名）がいます。弱り果て、孤独で、生きたことを誰にも知られないような子が。TVや新聞にも次々と映され、消えてゆきます。

おじさん、おばさんが負った苦しみを変えていかなくてはいけない。すべての人に希望が伝えられなくてはいけない。自分の子育てだけではないのだと思います。「受けるより与える方が幸いです」

聖書 使徒二〇章三五節

これを身をもって私たちに示して下さい。あなたたちは偉大な師です。その足跡をたどって、同じように他の人へしてゆく事ができますよう、どうぞ見守って下さい。

いつまでもお元気でいて下さい。また一緒に楽しい時を過ごせる日を楽しみにしています。

木村（中沢） 秀子（八一年キャンプ参加）

「あれからもう十年以上！？」

学生部の西田さんから、この文集のことを伺って、初めて「十年」という大きな歳月が経ったことに気づきました。

沖縄キャンプで初めて愛楽園の皆さんとお会いした後、殊に大学を卒業してからは、ずいぶん様々な経験をし、たくさんの人達とも出会いました。社会人になり、転職をし、また改めて学生として北ヨーロッパの国、ノルウェーのオスロに住んでいます。

卒業して以来、仕事の上で、また、個人的なことで悩んでいる時、身近で相談にのり、力になってくれたのは、あの沖縄キャンプと一緒に経験した友達です。また、自分ではどうしようもなく苦しみもがいている時に、支えになって下さったのは、愛楽園で出会った皆さんの姿、あの何とも優しく温かい思い出でもありません。

愛楽園には、八二年の三月に、沖縄キャンプのメンバーとして初めて伺ったのですが、その時は、このキャンプで出会った人々が、こんなにも深く、自分の中に在り続け、迷いあぐねた時、心が戻ってゆくところになろうとは思っていません

んでした。

愛楽園の皆さんを知らなかったら、果たして耐え切れたでしょうか、と思われる時期があるのです。

それは、卒業直後の八三年から八四年にかけての約二年間です。

私は八三年四月から、社会人として勤め始めました。まずまずのスタートだったと思います。ところが、その年の五月頃から、母が病気になったのです。うつ病でした。

肉体的な病気も、もちろんのことつらいのは当然ですが、神経・精神に関わる病気は、たとえばレントゲンで映して『これが病気』と具体的に目に見えるものでなく、初めて出会った者にとってはつかみどころもなく、それだけに一層不安です。それに、病気になったのは母であっても、その原因は家族全体に因するわけでもありません。父、弟、私は、まったく予期もしていなかった『うつ病』ということに途方に暮れました。

医師によると、母の病気の原因は、更年期障害、引越（関西から東京へ）、子供



(弟と私) が成長して手を離れた、等々が一度に重なったためだろう、ということでした。父にしてみれば、やっと一息つけるようになる、と思った矢先の母の病気でした。

不眠や精神の不安定から、食事を取ることもできなくなった母は入院することになりました。病院で点滴を受けて、数週間後、体力が回復してきたところで退院してきますが、一週間もしないうちに病院に逆戻り、ということがくり返され、一年以上となると、私たちが家に残る者にも疲れが出てきます。もう少し、もう少し、と思いつながら、良くなっていると明らかにわかるような印は何もありません。いつまで続くのだろうか？ という不安も大きくなってきます。

「仕事をやめて家に居て、病院と家のことをやりたい」と父に言ったことがあります。しかし父は私に仕事を続けるように言いました。当時五十歳代前半の父にとって、自分の体力、精神力、そして経済力にも不安が出始めていたのかもしれない。弟はまだ学生。母の入院はいつまで続くとも知れず……。

私自身も、余裕がなくなり、常に精神的に緊張した状態が続いていたと思います。友達や知人が心配して電話をしてくれてくれるのさえ、時にはうとましくなります。



「大丈夫、何とかやっています」「心配して下さってありがとうございます」というのもできなくなるのです。病人を助ける立場でありながら、自分自身で手一杯になり、「私の方こそ病気になってしまいたい」と思っていました。

そんな中で、仕事の休暇がとれると、私は逃げる様にして沖繩に飛んでゆきました。愛楽園で、深山さんや糸数さんの所に居る時は、心の底から安らげたのです。事細かく母の病状について話すことをせずとも、一緒に居て下さるおばさん、おじさんの温かさの中で、私は、母の入院以来の緊張から解き放たれていたのだと思います。自分の中にある不自然な緊張——疲れ——が消えていったのです。私は自分で、「私は今、ここに甘えさせてもらっている。ああ、でもこうやって心から甘えさせてもらえるところがあって、本当に、本当によかった」と思っていました。

数日、愛楽園で心の底から安心して、また、東京の自分の現実に帰って行ったのでした。少し元気を取り戻して。

母の病気は、多少の病状の変化を経て、発病より約二年で、家に戻れることになりました。本人は、病気になる前の自分より、心が軽くなった、と言います。幸

いにも、その後再びうつ病になることもなく、今日に至っています。

客観的にみると、二年とはさして長くないはずと思えますが、当時は、一日一日が重く長い日々でした。あの二年間の記憶は、今でも他の時期とは異質です。

しかしまた、この母の病気のおかげで、今まで思っても見なかったような経験をし、考えなければならなかったのは、私たち家族にとつて良いことだったのかもしれない。敢えて話し合ったり議論するということは、あまりない我が家ですが、それぞれが必死で、このつらい時期を越えたのだ、という無言の了解があるように思います。

母が家に戻って来てしばらくは、家の中が何となくぎこちないようでもありましたが、一、二年過ぎると、まるで何ごともなかったかの様になりました。

それにしても、あの一番苦しかった時期に愛楽園がなかったら、一体どうなってしまうていただろう、と考えると恐ろしくなります。私には、愛楽園には、愛楽園の皆さんには、他とは違う不思議な温かさ、他のどこでも癒すことのできないものでも、温かく包んでしまう、不思議な力があるように思えます。

いつの間にか、私も三〇歳を過ぎ、「甘えさせてもらう」などと言っている齡ではなくなりました。まだまだ心に余裕十分とはいきませんが。こうして遠い国で一人で暮らしてられるのも、ある意味では、あの時期があつたお陰かもしれない。こんなに離れていても、少ししんどくなると、あの二年間と、その支えとなつて下さった愛楽園の皆さん、そして美しい海と緑の木々を思うのです。本当にありがとうございます。そしてこれからも、ありがとうございます。

矢部直美（八二年キャンプ参加）

沖縄キャンプから現在へ

私は、八二年度と八六年度に沖縄キャンプに参加し、愛楽園を訪ねさせて頂きました。

最初のキャンプに参加した当時の私は、それまでの体験に呪縛されており、生き方や物の見方、人間関係等において、悲観的な価値観に支配され、また、それを変えよう（闘おう）とする気力もエネルギーもない状態でした。

沖繩行きの船の中で撮ってもらったスナップ写真を、今取り出して見ると、自分

でも何と暗い表情をしていたのかと、つくづく思います。

しかし、愛楽園においては、ゆっくりとした時間の流れの中で、（自分が、それまで人にとっていた、身構えるような態度をとることをさせずに）落ち着いた気持ちで、話をさせて頂きました（肯定してくれるものがありました）。特に、センター及び病棟で出会った方々には、大変にお世話になりました。

園での出会いの中で、私の心に大きな比重を占めているのは、与那原朝英氏の力強さであります。「私には、これといった趣味はありませんが、敢えて言うならば、病氣と楽しく闘うことです」と話されていた言葉の持つ意味は、自分の現実と向き合おうとしていなかった、当時の私にはあまり理解できずに、ただ氏の人格からほとばしり出る言葉と迫力に衝撃を受けていました。

あれから十余年たつて、日々の社会の中に今自分が在るわけですが、この間も（やはり生きている限りは）自分の現実と直面しなければならぬ場面に何度も遭遇し、その度ごとに逃げを打ちたい衝動にかられながらも何とか踏み止まって（あるいは、踏み止まらざるを得ずに）現在まで乗り越えて来ることができました。また、乗り越えた後に自分が変化していること（後から、強さが付いてまわ

つてきていること)に気付かされました。

結局、(今後も乗り越えてゆくであろう)自分の現実と闘う気力やエネルギーを養うのに十余年の歳月を要しましたが、それにしても、その出発点は愛楽園での出会い(人間への肯定と現実と闘う強さ)でありました。あの時に出会っていないれば、今日までの十余年が、一体どういうものになってしまっていたのか。それを想うと、改めて園の方々に対し、感謝の念で一杯であります。

現在、私は東京の下町の役所で、高齢者向けの住宅を供給する仕事をしています。が、仕事を通して見えてくるのは、その人間に何らかの社会的なハンディ・キャップがある場合(単身の高齢者・障害者、母子家庭、外国籍等)物理的にもハンディ・キャップを背負わざるを得ず、社会の中で自分の居場所を確保することさえ困難な現状であります(実際に高齢等を理由に、アパートの更新を拒否され仕方なく不動産業者を回って物件を探し求めても、同じ理由で仲介を断られてしまいまつたく途方にくれてしまうような状況が、特にバブル景気以降激増し問題化しています)。

一方で、現在の福祉行政の方針は、老人医療費の伸びを抑制するという見地から、

在宅福祉が、声高に叫ばれています（現状は、病院が施設の機能を代替している  
ので、社会的入院をしている高齢者が退院を余儀なくされて、行き場を失くして  
います）。

WHO（世界保健機構）の「らいに対する基本的な考え方」の中に、「らいは治  
る病気である。しかし、本当に治るという意味は、肉体的・精神的・社会的に回  
復するということであるはずである」という一節があります。

回復されるべき社会が、ハンディ・キャップを背負っている人間にその居場所も  
行き場も失わせしめているような状態であっていいはずがありません。愛楽園で  
お話を伺った者の責任として、（また、将来必ず高齢者になる自分自身の問題と  
して）ハンディキャップを持つ者が、当然に自分の居場所を確保できる：地域で  
当たり前に暮らせる：社会をいかに構築するかを現在考えています。

平野幸男（八二年キャンプ参加）

沖繩キャンプをふりかえって

今、沖繩キャンプをふりかえって自由に書こうとしても、なかなか文章が浮かん



できません。原稿用紙を前にして、考えれば考えるほど、何をどう書いていいのか困ってしまいます。そこで、当時の『ふりかえり』のように、思いつくまま、とりとめもなく書き始めようと決め、ようやくペンをとりました。

キャンプから約十年がたち、その間、あつという間だったような、長かったような、不思議な感じがします。一体あのキャンプは何だったのか、改めて考えてみると、大学生活の一行事として流されてしまう気もするのですが、何かが私の中に残っていることは確かなようです。それは、大学卒業後、今日までの自分を支えている大きなエネルギーとなっています。就職をするときに、何故か大学という場にこだわりがあつて、今の大学に勤めることになりました。最初は、立教での生活との違いにとまどい、迷いもありました。でも、しばらく勤めているうちに、自分なりのスタイルをつかんで、今では毎日とても楽しく生活しています。もちろん、今の職場の人に恵まれてもいるのでしょう。しかし、それ以上に、キャンプで得た何かが、私の中で大きな力になっている気がしてなりません。それが何なのか、具体的には、うまく表現できないのですが、何か人間を越えた大きな力を感じます。そして、キャンプでのあらゆる出来事が、十年後の今も、強烈



な存在として、私を動かすエネルギーになっています。これは、わかる方にはわかるでしょうし、何を言っているのかさっぱり、という方もおられると思います。とにかく、私にとっては、はつきりと、十年前の体験が私の命になってると感じられ、また、この先何十年たっても、その力は変わらないのではと思われま。それほど、あの沖繩キャンプは、私の中で大きな出来事でした。沖繩キャンプ以外でも、立教の四年間は、私の今を生かし続けている原点になっています。

何げない毎日の生活の中に、宝物がたくさん隠されています。この宝物の探し方をキャンプの体験によって教わりました。あとは、各自が日常のくらしの中で応用できるかどうかで、無数の宝物を手にすることができるようでしょう。十年たった今、ほんの少しですが、自分なりの『探し方』がつかめてきた気がします。日々、アンテナをはりめぐらせていないと、いつの間にか時間は過ぎていきます。そして、人は忘れやすい生き物でもあるので、意識して思い起こさないと、せっかくの体験もどこかへ消えてしまっそうです。

『ふりかえり』のように書くつもりでいざ書いてみると、自分で思うように書けません。ほとぼしるように文章がわいてくる、あのエネルギーは、やはり、キャ

キャンプの体験の中で出てきたものなのでしよう。今の私は、ごく普通の、取り立てて話すこともない、変化のない生活をしています。それを敢えて文章にすると、このようにしか書けません。でも、私にとつては、この何げない日常生活がごくかけがえのないものであり、日々ふれあっている人々の命が、いとおしく感じられます。どんな人でも、それぞれの人生を精一杯生きていて、かけがえのない命だということ。少々大げさかもしれませんが、今感じていることです。

これからも、私は私の与えられた「場」で私なりの宝物探しを続けていきたいと思えます。多くの人々の命に支えられながら……。

上埜一樹（八三年キャンプ参加）

生きることの証し

私の好きなウチナーグチ（沖縄方言）独り芝居の演者、北島角子さんの作品のなかに、「針突（はぢち）」という芝居がある。

針突とは、女性の手に三角や四角などの様々な模様を彫り込んだもので、明治から昭和にかけて、沖縄の村の女性に流行したひとつのおしゃれとも言えようか。

針突の彫り師が、一年に一回か二回、葉売りのように村を廻って来るのだそう。テレビも新聞も普及していなかった時代に、その彫り師は様々な流行の話題や情報を持って来て、その話を聞きながら針突をしてもらうのが、沖縄の村の女性の楽しみのひとつだったと言う。当時は現金収入がほとんどなかったので、女性たちは、庭先で鶏を飼い、その玉子を売って小銭を貯めたのだそうだ…。

芝居の内容はざっと次のようなものである。

明治生まれのおばあが、結婚を間近に控えた孫娘とのやりとりのなかで、針突の説明を通しながら、当時の沖縄の女性や昔の沖縄の「心」について淡々と語っていく…。

孫娘は最初、針突は単なる「入れ墨」と思い、沖縄の野蛮な風習と思っていたのだが、おばあの話聞くうちに、針突に込められていた沖縄の女性の「心」やおばあの生き方に共感していく…。

そして、「針突」という沖縄独自の「心」（文化）がおばあの世代を最後にこの世から消え去るのはとても悲しいと涙を流す。

するとおばあは、「確かに針突はこの世から姿を消すかもしれないが、お前が覚えていてくれれば、お前の心のなかに針突がこれからも生きていくことになるさ。それで私は嬉しいさ……」とひとこと言つて芝居は終わる。

おばあ語りからは、ウチナンチュとしての誇りが感じられ、彼女のこだわりや、これまでの人生が優しく、温かく伝わって来る。針突にはおばあが凝縮されていて、それはおばあが生きることの証しであつたのだと思う……。

私はこの芝居を見ながら、愛楽園の多くの皆さんの顔が浮かんできつてしよつがなかつた……。この芝居の中に愛楽園の皆さんの人生が、そして私たちに対する想いが象徴されているように感じられ、涙が止まらなかつた……。

愛楽園の皆さんは、癩という病を引き受けて生きてこられた方々である。

「癩という病を引き受けて生きてきた……」。

文字にしてしまえば、たった十六文字だが、この言葉の背景には、測り知れない苦しみや悲しみ、悲惨な出来事が数多く含まれている。

そして転びながらも、その都度、起き上がっては、淡々と人間らしく生き抜いてこられた、愛楽園の皆さんの人生を垣間見ることができているのではないだろうか…。愛楽園の皆さんは、いつでも、誰に対してでもその人をありのままに受け容れて下さる。そして、何十年にわたって自らが培ってきた、その人にしか語ることでできない宝物の言葉を惜し気もなく私たちに分け与えて下さった…。

入園者のある方の言葉を、私は忘れることができない。

「立教の沖繩キャンプが終わった時、私たち入園者は二度、涙を流すのですよ…。」最初の涙は、「とても心待ちにしていた立教の学生たちが、居室訪問で自分の部屋を訪ねてくれ、お茶やお菓子をともにしながらの交わりがとても楽しく嬉しかった。十日間があつと言う間に過ぎ、学生たちは東京に帰ってしまう。また、来年の春まで自分が元気に生きていられるかねえー」と思いながら流す涙なのだと言う。

もう一つの涙は、「これからの社会を担う立教の学生が自分の悩みや生き方を考える時に、それまで社会から差別され、見向きもされてこなかった『癩者』であ

る自分たちの生き様を真剣に聴き、一生懸命に向かい合って、考えていた…。悩みを抱えていた学生が、元気に笑顔でたくましくなっていく姿を見て、『癩者』である自分たちが必要とされ、少しでも学生の役に立てたのではないかと思う時がある」その時に心の人間としての喜びを感じて、もう一度流す涙のことを言うのである。

愛楽園に出会った私たちは、この涙をどのように受けとめればよいのであろうか…。

先に記した針突の話に出てくるおばあさんと孫娘は、そのまま愛楽園のおじい、おばあさんと私たちの関係に置き換えられるのではないだろうか…。

あと三十年すれば、日本からハンセン病者はいなくなると言われている。人間が生活していく上で、難病がなくなることは望ましいことなのであろう。

しかし、現象面としてはそうだとっても、愛楽園の皆さんに出会う中で、人間として生きる原点を教えてもらった私たちにとってはどうであらうか…。

私たちは一人ひとりが愛楽園の皆さんから、その人の大切な大切な「生きること

の証し」をこれまでもらい続けてきたのだと思っっている…。

私の心のなかで、針突のおばあの言葉がこだまする。

「確かに針突はこの世から姿を消すかもしれないが、お前が覚えていてくれれば、お前の心のなかに針突がこれからも生きていくことになるさ。それで私は嬉しいな…。」

一人ひとりが各人の心のなかに愛楽園の皆さんからもらった「針突（生きることの証し）」を大切に温めながら自分の人生を歩んでいけたらと思っっている。今度は私なりの「生きることの証し」を求めて……。

佐藤一宏（八三年キャンプ参加）

好きです、愛楽園

夕焼けに赤く染まった愛楽園の居室棟と白い壁。何となく、ただ散歩したくなっ  
て小石を踏む私の耳に、どこからともなく三線の音さんしんが聞こえてくる。沖縄名産の



オリオンビールが胃のヒダに浸透するように、三線の音が私の心に染みわたる。「交通費はちよつとかかるけど、愛楽園に来てよかった」としみじみ思う瞬間だ。誰が、どこで三線を弾いているのかわからない。知ろうとも思わない。もしかしたら、この三線は天に召された愛楽園の方々の琴線きんせんの響きなのかもしれない、とふと思う。はるかかなたに寄せては帰す波の音。私は立ち止まり、三線のメロデーに耳を傾ける。私の周り、居室の人たちも一緒に聞いているかもしれない。三線の音は、沖縄の人の喜びや悲しみや怒りを織り混ぜて愛楽園の夕暮れの中を流れていく。

私が初めて愛楽園を訪れてから、もう五年が過ぎたとは信じられない。その後も会社の夏休みや出張をフルに利用して年に一度は園に足を運んでいるが、通えば通うほど奥の深さを感じる。七十年近く生きてきた人たちの人生を、たった数日間とか数時間でわかってしまおうというのが無理な話なのだ。

療養者の方々との新たな出会いは嬉しい。こんな人間的な魅力を持った人もいるんだ、と思うことはたびたびだ。だが、悲しいことに私の滞在時間は限られている。あまり交友範囲を広げると、皆さんへの挨拶回りだけで帰らなくてはならな

くなる。せつかくの誘いを断らなければいけない時は、とても申し訳ない。旧知の方々と語り合えるのは楽しい。泡盛を傾けながらの何げない世間話の中から、長い人生を送りハンセン病を患って初めて語れる珠玉の言葉がこぼれ落ちる。そのうちのいくつかは、わたしの心に刻んで大切に持ち帰った。が、飲みすぎてついついすべての言葉を置き忘れたことも数知れない。私はとても反省している。世界の中で日本はとても裕福な国の一つになった。しかしそれだけに、見栄えがよいだけの表面的で嘘っぽいものが蔓延してしまっている。何が大切で何が必要なものか、いつも目を凝らしてじっくり見詰めていないと楽な方へ流されてしまう。特に私のような人間は。

園の方々と語っていると、そんな流されやすい私の足元を照らしてくれているようだ。そして、私が東京へ戻るときはランチヨンミートなどのおみやげと一緒に必ず『元気』も持たせてくれる。

体は不自由だが精神力は強靱なYさんが私にこう言ってくれた。「勉。私も頑張るからお前も頑張れよ。(東京に戻っても) 一生懸命やりなさい」と。この人からこの一言を聞いただけでも沖縄に来たかいたったというものだ。

またここに来よう！ 愛楽園の方々と同じ時代に人生をとにもすることができ、私はとても幸せだ。

長谷川勉（八九年キャンプ参加）

そこが言いたい！

入園者の人より（一部）

先輩療友たちの歩みを聞くと、昨今では想像もできないイバラの道。人間は運命の歯車が狂い始めると、なぜか次々と悪い条件が重なってくるようなもので、ある女性療友は「時には崖っ淵に立たされたこともある」と涙をにじませて訴える。また、年配療友の一人は、底なしの貧乏だった。それに当時（五、六十年前）は、親と子が、夫と妻が別れ別れにならなければいけない、極めてヤツカイな病気にもなってしまった。加えて、人間が人間でなくなる戦争にも巻き込まれた。この三大苦難の荷物をもろに背負いこまされ、流れ流れてここに至る、と目を細める。あまりにも重い十字架ではあった。だが誰一人泣きごと、弱音は言わなかった。なるほど！ こうした、くじけず、へたばらずの開き直りの根性がしたたかな生きざまを生んだのか、と考えたりする。そういえば、こんな歌があった。「憂きごとのなおこの上に積もれかし 限りある身の力ためさん」。

キャンパーたちの愛楽園体験学習が、交通信号のように右から左へと、すぐに変化がみられるものではないことは言うまでもない。しかしだ。人間、長い人生行路では、まったく風波に出会わないことは、まずないだろう。つまづいてしまった。思うようにいかない。そんな難局に直面した時だ！ 大学のキャンパスでは得られなかった形の、雨も嵐も蹴飛ばして「生きること耐えること」を心訓にして生き抜いてきた愛楽園の友人たちを見て、聞いて、触れて気づいた魂の響きが活かされるのは…。私はそう確信する。この長ったらしいレポートもそこが言いたかった。

## 二. ある学生との出会い

たくさんの学生が愛楽園の人たちに癒され、一人ひとりの人生を歩むエネルギーと道標をもらっていった。そんな中でとくに私の心に残る一人の学生がいた。彼女からはその後もいろいろと教えられ、「自分で自分の魂を世話していくこと」とはどんなことなのか、私が考え展開しようとしている「人生のよき旅人」の旅人たることを彼女自身のその後の人生で教え示してくれた。

彼女とはじめて会った時のことを、二〇年ほどたった今も鮮明に憶えている。私がやっていた「課外活動」としての沖繩キャンプ（ハンセン病療養所沖繩愛楽園を「場」としての自己成長のプログラム）は、大学の履修単位と関係がなく、すべて一般公募、つまりこの指止まれ式で参加者を募っていた。「フィリピン・キャンプ」（フィリピン、

ルソン島山岳州サガダ村周辺を「場」としてのプログラム）など学生募集の際、今どきそんな高い参加費を払って参加する学生がいるかと、学校関係者からいわれたこともあった。直接「単位」と関係のないものには学生は反応しないのだろうか。自分自身と向き合い、自分の人間的成長を求めようというこのような正課外プログラムには参加しないのだろうか。そんな不安はなかったといえれば嘘になるが、きつと喰いついてくる学生がいることを信じていた（私の働いていた立教大学のよいところは、わずか一〇から二〇名ほどしか集まらないこのようなプログラムに、建学の精神を表現するものとして予算をつけてくれたことである。これからも人の心に関わるプログラムを大切にしていってほしいと、学校を離れた今も願い祈っている）。

キャンプの説明会を終えたある日、一人の女子学生がやってきた。彼女は前年度の第一回フィリピン・キャンプの参加者だった。美人だが表情がかたく、笑顔の時もその目は笑うことのない厳しい感じの学生だった。沖縄キャンプ参加の希望を伝え、申込み書と参加動機を私に手渡すと、用事を理由にさっさと帰っていった。申込み第一号の学生だったので、いろいろと話したかったのだが、彼女はややつつ

けんどんな感じを残して出ていった。何気なく目を通した彼女の参加動機、一瞬座禅の時の警策きようさくを打たれたように背中に電気が走った。

鎌倉の円覚寺に参禅した時、朝昼晩の坐禅三昧で、慣れぬ私の行きつくところは「無我の境地」どころか、肩・背中・足——の痛みだった。深く組みあわせた両足は「しびれ」をとおりこして、ひどく痛み、坐禅の間じゅう私の意識は自分の両足に向けられていた。「足が痛い。足が痛い。」その時、私は痛みをとおしてハッキリと、我両足の存在を意識した。痛み、あるいは失うことによつて、あらためてその存在をつかむ——「死」に直面するということは、同時に「生」に直面することのように。私は中学二年の時、頭髮のほとんどを失った。自分の髪の毛が、ちよつと触れただけでどんどん抜けていく……恐怖だった。そして毎日、鏡にむかつては髪の毛がなくなった頭をながめていた。こつけないくらい醜い自分の姿を、見たくはないはずなのに、見ずにはおれなかった。「みんなと違う」という意識、「欠けている」、「失っている」という意識——この九年間、私はずっとこれらにとらわれて生きてきた。何年たつても、自分の肉体の一部を失ったという



意識は生々しいし、失った肉体も生々しい。ライ病により、姿形が変わった。また、肉体の一部を失った人々は、毎日毎日その事実を見つめながら、自分たちが負っている苦しみをどうしてきたのか。私にとって、これは他人事ではない問題だ。沖繩キャンプで、私がこの九年間、考え続け、悩み続けてきた事柄（「失った」ものにこだわりながら生かざるを得ないということ）をあらためて見つめなおしたいと思っている。

彼女のありのままの姿をもつての体当たり、そのあまりもの激しさに戸惑った。というよりも及び腰になりそうな自分だった。自分はそれをどのように受けとめていけばよいのか、受けとめるだけの力が自分の中にあるだろうか、学生からはじめての真剣勝負をいどまれたような気がして、私は身震いした。

一人の学生が入園者の人々との交わりの中で、何に感じ、何に気づき、どのように変化していったのか、彼女の日々の「ふりかえり」を追ってみたい。

フーコの日記（沖繩編）

二月二六日（愛樂園第一日目）

「生きた化石」と笑われ続けた悪夢のような二日間が過ぎ、やっと愛樂園にやってきた。（注：本土と沖繩までの距離感を実感するため、東京から船で沖繩へ入った）

ライ園について具体的なイメージが全く浮かばず、いつたいどんな所かと思っていたが、園内をまわってみると、その広さ、明るさに驚いた。広い道、平屋の宿舎が整然と並んでいて、なんともあっけらかんとしている。しかしその「あっけらかん」の中になかなか入っていけない。

最初の訪問先は第一センター（日の出）の「ウシ」さんというおばあちゃん。「ワッ！ 沖繩！」という感じのことばの流れに、参った。わからない！ 十分後、やっとどうにか慣れた時の会話……

フーコ「何かお手伝いすることありますか？」

ウシさん「不自由ないね」

フーコ「おばあちゃん おいくつですか」

ウシさん「いくつに見えるね？」

——おばあちゃん　クックツと笑う——

フーコ「ウーン　六五ぐらい？」

ウシさん「アハー　七三」

キャンプは始まったばかり。アセらずリキまずぼちぼちやるーと。

二月二七日（二日目）

登校拒否の子供のように、どうも「居室訪問」に向かう足が重い。今日は何処におじゃましようかと、チラチラ窓から室内に目をやりつつ歩いていると、それだけで緊張してしまい、気がめいる。

「大郷」も「ボランティア」も知らないお年寄りを前にしたとき、通行手形も切り札もないと悟ったフーコは急に弱気になって落ちつきを失った。いったい何を話せばいいんだろう。ぎこちない会話は、話題があっちへとんだりこっちへとんだり。それもまるきり質疑応答だ。「会話」なんてものじゃない。

突然奥にドーンと座ってらした九九歳で耳が遠いというおじいちゃんが「××ー！」と私にはわからないことばでさげびながら、しつかりテレビの画面

を指さした。とまどう私に、おばあちゃんが「テレビを見なさいと言っているで」とおしえてくれた。

画面いっぱい新珠三千代がニーツと笑ってる。どうやら私は気のきかない珍入者だったようだ。

二月二十八日（三日目）

この三日間、あるおばあちゃんのもとに通い続けた。私はこの十年ほど自身の病気を考えるたび、意識するたびに、そしてそれによって苦く重たいものを感じるたびに、「もし私に信仰があったら、もう少し気が楽なのではないか、何かすぐれるものがあつたら……」と思い続けてきた（あこがれ続けてきたといえるかもしれない）。しかし、この今まで私が思い描いていた「信仰」とはいったいどんなものだったのか。おばあちゃんはいう。「イエス様に手を直してもらおう、足を直してもらおうとは思わないよ。この病気をなおして下さいと祈ったことないよ」。おばあちゃんはここに來てから四〇歳近い時に洗礼を受けたという。おばあちゃんにとって「信仰」とは「キリスト教」とはどんなものなのか。彼女は

「信仰」にすがって生きているのか。「信仰」とはすぎるものなのか。おばあちゃんはいう。「信仰をもつと強いよ」。私は、「ネエ、おばあちゃん、信仰するってにげることにはならないの」ということばをグッと飲み込んで、目の前にあるみかんをむき始めた。おばあちゃんはみかんを前歯でむいた。

## 付記

彼女のふりかえりに触発されたのか、翌日ささやかな議論がおこった。参加者の大多数は「宗教」や「信仰」とは自称無縁な学生たちである。しかし、過酷な現実を背負いながら生きている入園者の人々の生の生きざまなまに接し、なぜあの人たちがこのように生きられるのか、彼らの背後にある力の源泉について問わずにいられなかった。両手両足がすりこぎ棒のように変形し、すべての指を失ってしまった老女、一本のジューズ缶をさし出す時も、注意深く缶を両手にはさみ気合いをいれなければならない。一つ一つの動作の中に必死に生きる姿を見て、信仰とはすぎるもの逃げ込むものではない、信仰によって与えられる力をもって自己の現実を現実として見つめ、引き受けて生きてゆくことと教えられたと語る。

そして、それに触発されたかのように他の学生は次のように記している。

私は解決を見つげにここへ来たのですが、ここに来て今まで段々わかってきたこととはどこにもそんなものは用意されていないということです。私の解決というのは、私が今までかかえて生きてきた心の中の空白を埋めてくれるものを見つけることでした。そんなものは世の中に存在しないのです。私がとらなければならぬ道はそのことを認識し、空白を空白としてはっきりと認識することだと思いううになりました。私は空白をかい駈らそうと思いはじめたのです。時には苦しみの上でダンスをするんだとBさんはいった。苦しみ、これと仲良くしていこうだなんて今まで考えもつかなかったことです。

三月一日（四日目）記入なし

三月二日（五日目）

陽のあたるあつたかい場所におばあちゃんと二人並んでしゃがみ “ニガナ植え”

をした。「私もしたい！ やっていい？」ときくと、「手が汚れる！ あんたは学問してればいい。あんたには農業はできんよ。農業するとそのきれいな白い顔が真黒になるよ」それでもしつこく土に触ろうとする私に、何度もこの言葉を繰り返す。しばらくねばっていると、おばあちゃんが私にいいつけた。「ナイフでここを切れ」「水をくんでこい」無性にうれしい。「石をのぞけ」——ハイ、ハイ、最後の最後まで「植え」させてもらえなかったけれども満足！ 指のある私がナイフを使い、力のある私がバケツに水を入れて運ぶ——しごくあたりまえのことだ。……たりないところを互いに補いあいながら、共に生きていく。おばあちゃんに教わった「ティンサグヌ花」の歌詞にも次のようにある。

イチタラン クトウヤ

ツイ タライタライ

タゲニ ウジナテイル

トウシヤ ユイル

(お互いにたりないところは、お互いに補って、年をとってゆく)



二人並んで手を洗って、「働いたあとのパイナップルはうまい!!」と笑いあう。部屋の中でじっと向かいあつて話すことだけじゃないんだな。いっしょに何かをするって楽しい。

五月にはおばあちゃん、あののがなを摘むんだな。

三月三日（六日目）

「気がきく」とか「かいがいしい」と、生まれてこの方二二年、一度として言われたことのないフーコは愛樂園にやってきて、どうも落ち着かない。おばあちゃんが「冷たいもの持つてこようね」と、よいしょと立ちあがる。「アツ」と思つて、どうしようかなと揺れて、しかし、私のおしりはでーん（!?）と畳の上のまま、「ありがとう! いただきまアース」と声だけがとぶ。気持ちは揺れても手伝う気配などみじんもない私におばあちゃんはニコニコ イソイソ ッピラミレモンを両手ではさんで運んでくれる。私はおばあちゃんの手助けに来たのではありません。フーコはおばあちゃんの「お客さん」で、しっかりとてなされてくるのです。

部屋をたずねると、砂糖てんぷらや新グロモントがどんどん出される。毎日続くと、＼出るのが当たり前＼になりそうだ。ニカツと笑って座ったまま＼もてなし＼を受けても、＼ヒラミレモン＼をとってきてくれるおばあちゃんの心意気を「ありがたい」と思う気持ちは失うまい!!

おまけ..笑顔が松坂慶子に似てるといわれた。今日はいちにち気分がイイゼ!

フーコの finding

三月四日(七日目 滞在最終日)

今のフーコはさっぱりスキリのびのびしている。自分がかかえてる悩み、苦しみがなくなったわけじゃない。忘れたわけでもない。だけどそれらにとらわれることがなくなった。

自分を守ろう、傷つくまいとするためか、私は常に緊張していた。笑っていても、神経はいつもとがっていた。他人に向かって構えていた。でも今は気ばらず、構えず…

それゆえとても楽になった。いなおりでも悟りでもない。あるがままの自分をそ

つとおいておく。解放されたのか、強くなったのか…

このおじいちゃん、おばあちゃんがいとoshii。その心意気がありがたい。互いにおもいやること、その豊かさを知った。

〃与えること〃と〃与えられること〃

——愛楽園に来て居室訪問を始めた頃は、〃与える〃ことにとまどい、〃与えられる〃ことに負担を感じた。だけど私たちは生きていく以上、好むと好まざると、また、意識しようとする無意識だろうと、互いに〃与え〃また、〃与えられ〃ている。このことに気づいた今、私はこのおじいちゃん、おばあちゃんと肩の力をぬいて接することが出来るようになった。

私たちは常に〃与え〃〃与えられ〃生きている。素晴らしい。

——これがフーコの気づきです。ハイ。

おまけ

♪♪ いまのフーコはピカピカに光って、

松坂慶子、山口百恵、栗原小巻（大郷先生説）に続き、〃ピグモ〃という声も…  
いったいフーコはどんな顔をしてるんだい？ 二〇歳をすぎたから自分の顔に責

任をもたねばなんねエーぞ！

このように日一日と変化して行く彼女、一週間の滞在を終えるにあたり、「気づき」として次のように語っている。

「自分がかかえている悩み、苦しみがなくなったわけじゃない。忘れたわけでもない。だけどそれらにとらわれることがなくなった。いなおりでも悟りでもない。あるがままの自分をそつとおいておく。……多くの学び、気づきを有難う」

キャンプの中ほどより彼女の目が笑うようになった。自分の悩みを入園者の人に打ちあけ、その苦悩にたち向かっていたという。「おばあちゃん、人って涙を多く流せば流すほど心が柔らかくなって優しくなるんだネ」といって、入園者のオバーのひざに泣き伏していたと園の人がいつていた。

### その後の彼女の歩み

一九八六年、私は東京を離れ、現在の仕事、人生旅路における旅人の宿「あぶらむ

の里」づくりのため、飛騨高山の技能専門校（旧職業訓練所）に来ていた。

そんなある日、彼女より電話が入り、結婚することになったので式に出席してほしいとのことであった。結婚を決意するまでは相当悩み、迷ったと話していたが、すべてのことを踏まえたくて「それでも」ということだったので決心したといっていた。祝辞をたのまれていた私、彼女自身背負っている荷の重さを知っているもので、どんな饒<sup>はなむ</sup>げの言葉を贈ればよいのやら迷いながらのスピーチだった。具体的なことに触れるわけにもいかず、ただ一般論として、彼女は「人生のよき旅人」である、これから先二人の前にどのような困難な現実が待ちうけていようと、この花嫁ならきつとそれを乗り越えていくだけの旅する力をもっているという意味のスピーチをした。

それから五、六年、何の音沙汰もなかった。私自身も身辺急を告げはじめていたこともあり、また、便りのないことは元気でやっていることと安易に思っていた。

そんなある日、突然彼女から電話があった。何をどう彼女に話していたのか憶えない。また、電話を切った後どのような内容の手紙を書いたのかも憶えていない。ただ彼女とその家族のため必死に祈っていたことだけは確かだ。そしてほどなくして彼

女から次のような手紙がきた。

お手紙ありがとうございます。何度も繰り返し読み返して読んでいます。先生の声が聞きたい、話をしたいと思いい、電話の前までいくことは今までも何度かあったのですが、その度に、もうちょつと落ち着いてから、もう少し頑張ってから、と、ダイヤルを回すところまでいけませんでした。助けてと言いたいのには、SOSを発信することをよしとしない自分がいました。けれども先日の電話の際は、何のためらいもなかったような気がします。声をあげて泣いたのは何年ぶりだろうと電話を切ってからボンヤリ思っていました。鼻をかみながら、妙に安らいだ、サッパリした心持ちがしていました。主人の前ではもちろんのこと、両親や子供にも泣き顔を見せてはいけません、私がしっかりしなければと気が張ってきたからか、ひとりになって涙を流すことはあっても、声をあげて泣くということはありませんでした。いつの間にか、ひとりである時でさえ、思う存分泣ける時でさえ、声を出しては泣けないようになってしまっていたのです。

本当に久しぶりに声も鼻水も出して泣けて気持ちが良かった!! 私にはこれが必

要だったんですね。カタルシスとはこのことか、と思います。私の感情を解放してくださった先生に感謝しています。そして声をあげて泣ける相手をもっている私はしあわせだと感じています。今、ここまで書いて、ふと主人のことを考えました。彼も声を出して泣きたくても泣けないようになっていないのかと、強い父親、強い患者を精一杯やってみせている彼にも、私と同じカタルシスが必要なのではないかと思えます。楽になって欲しいです。

闘病生活というのはまったく戦争と同じだと思います。その渦中に身を置く者にとって一番つらいのは、それがいつ終わるのかわからないということです。昔、「教科書で暗記した「三十年戦争」や、新聞・雑誌でよく目にする「二年間の闘病生活後…」等の記事…それが三〇年だろうと、二年だろうと、また、二か月であっても、それらは皆、終わってしまったてからいえることで、結果でしかありません。その長短の結果をながめて、大変だったろうとか、短くてよかったなどと判断することはできないと思います。その真中にいる者にとっては、どれもいつ果てるともなく続いたたかいかであり、それを思うとき、しばしば絶望的な気分にな



つてしまうのです。

最初の宣告からもうすぐ四年になります。生まれてくる子は、父親のいない子になるかもしれないという不安。一年以内という宣告をうけたのが妊娠四か月の時だったので、正直いって、生まれた我が子を主人と二人でながめながら思ったのは、「しあわせ〜」より、「間にあつた!」。主人いわく、「息子の誕生祝いをするまでは……」「オレの顔を覚えるまでは……」「三つの祝いまでは……死ねない!」いつのまにか宣告をうけたという非日常は日常化し、息子も三歳半です。四度目である今回の入院がいつまでなのか、この先どうなるのかわかりませんが、逃げようという気持ちはキツパリ捨てて（逃げ出したい、自由になりたい、幸福になりたい……と悩みながらの結婚生活でしたが……）、とことんつきあってやろうじゃないの! という心境です。今、逃げてしまつたら、生涯、自由にも幸福にもなれないということにやつと気がつきましたから、主人のためでも、子供のためでもなく、自分のためです。

長々と書いてしまいました。いつか、「あぶらむの里」で先生にお会いできる日を楽しみにしております。

御家族の皆様にもよろしくお伝え下さい。  
お元気で

九月一七日

大郷先生

しかし、一九九二年二月二九日、彼女の夫は一人静かに旅立っていった。  
そして先の愛楽園での集いの文集にこのような文を寄せている。

「沖縄キャンプ」から一二年

五歳の息子が私に言う。

「おかあちゃん、神様ってイジワルだね」確信したふうには、私の顔を見据えて言  
い切る息子に、「おかあちゃん」は多少まごつきながらも聞いている。

「どうしてそう思うの」

「だって……」

納得できないこと、理不尽だと思うことを精一杯述べ立てている息子を見つめながら、「おかあちゃん」は思う。

「神様ってイジワルだ」……おかあちゃんだって、今まで何度、何十回そう思ったことか。

『愛楽園に集う会』の連絡をいただいて、しまいこんでいたファイルを取り出してみた。例の「ふりかえり」を綴じたぶ厚いファイル。

私が沖繩キャンプに参加したのは八一年……もうあれから一二年になる。「ふりかえり」をめくり、名前を目にすると、メンバーや愛楽園の人々の顔が次々と浮かんでくる。みんなどうしているだろうか。この十年はみんなにとって、どんな歳月だったんだろう。

参加動機も、十日間の滞在で得たものも各人様々だったろうが、私にとっての沖繩キャンプは次のことばとの出会いであり、それを体現している人々との出会いだった。

『あなたがたは互いに重荷（バロス）を負いあいなさい……。人はそれぞれ、自分の重荷（ポルテオン）を負うべきである』

自分の現実を直視し、自分でそれを背負って生きてゆく……こんな生き方があるのか、とショックを受けると同時に、困難な難しい生き方であるにもかかわらず私は強く惹かれた。「ふりかえり」の最後に、気づきとして私が書いたのは、

『自分が抱えてる悩み、苦しみがなくなったわけじゃない。忘れたわけでもない。だけどそれらにとらわれることがなくなつた。……居直りでも悟りでもない。あるがままの自分をそつとおいておく。……』

逃げずに向き合い、しっかり背負っていくことで、逆に解放される……漠然とではあったが、この時私を感じたこのことが、その後の人生の心よりどころになつた。

「神様ってイジワルだ」……結婚して一年にもならないのに、私は夫の病名と同じ時に、「一年以内」を医師から告げられた。その時妊娠四か月だった。悲しみは悔しさに、そして怒りに変わる。今、

「おかあちゃん、神様ってイジワルだね。どうして○○ちゃんのおとうちゃんは死なないの。どうしてボクのおとうちゃんは死んじゃつたのよ」

小さな身体いっぱい悔しさと怒りを表わして私を見据える息子は、当時の私そ

のものだ。

夫はよく頑張ってくれた。五年間の結婚生活はイコール闘病生活で、その重さに私は時々、すべてを放り出してしまいたいと思うことがあったが、それでもどうにか逃げ出さずに夫の最期をみとることができたのは、彼自身がポルテオーンと向き合い生きる人だったからだと思う。今の私には最初に宣告を受けた時のような怒りはない。夫の死を静かに受け入れることができる。

いつかこんな日が来ることを承知で、覚悟して子供を生んだが、生まれた子供の方は納得するはずもなく、

「おかあちゃん、神様ってイジワルだね」

の連発だ。息子は父親の死をどう受け入れていくのか、彼自身のポルテオーンをどう引き受けていくのだろうか。

沖繩キャンプから一二年……その間愛楽園にも沖繩にも一度も行くことがなかったが、常に身近な存在であり、私の心のよりどころだった。今年、再び愛楽園を訪れるチャンスを得て、とても嬉しく、今から待ち遠しい。

「逃げずに向き合い、しっかりと背負っていくことで、逆に解放される……漠然とではあったが、この時私を感じたこのことが、その後の人生の心のよりどころとなった」と記している。そしてそのような気づきと人生への姿勢を育んだのは、「あなたがたは互いに重荷（バロス）を負い合いなさい……。人はそれぞれ自分の重荷（ポルティーン）を負うべきである」という、この言葉を体現している人々との出会いであったという。

もし「癩文学」と呼ばれるものがあるとするれば、その代表者の一人に北条民雄があげられる。彼の作品『いのちの初夜』は当時の人々に大きな影響を与えた。彼はその中で、癩になり絶望し自殺を計った尾田に、先輩入園者左柄木をして次のように語る。

あなたはまだ癩に屈伏してられないでしょう。まだ大変お軽いのですし、実際に言、つ、て、癩に屈伏するのは容易じゃありませんからね。けれど、一度は屈伏して、し、つ、か、り、と、癩者の眼を持たなければならぬと思います。そうでなかったら、新

しい勝負は始まりませんからね。とに角、癪者に成り切ることが何よりも大切だ  
と思います。(傍点筆者)

定本『北条民雄全集』下巻の「精神のへど」に次のような一文がある。

「北条民雄のいのちの初夜を読んだ。これらの作者がもし私であつたら、書かす  
に胸中にたたみ込んでおいたであろう。最悪の場合の心理は誰にでもあるものだ  
が、それをそのまま飛びついて書くということは、科学にならず感傷になる」。  
これは横光利一氏の言葉である。だが、横光氏よ、最悪の場合の心理のみが死ぬ  
まで続いている人間が存在するということを考えたことがありますか？ いのち  
の初夜は私にとって最悪の心理ではなく、実に最良の場合の心理であつた。

癪の重荷ゆえに自らの生命を絶つていった多くの病者、彼の作品は単に病者のギリ  
ギリの生を描いたのではなく、自らが癪者であるという自己の現実を受容して生きる  
ことの大切さ、存在への勇気を描いていると私は受けとめる。



「私は自分の過去を見つめながら生きてきました。だから大丈夫なのです」と語った源光さんにしろ、この北条民雄にしろ、癩者としての積極的な生は自らの現実を現実として受けとめて生きるところにあることを語っていると私は思う。

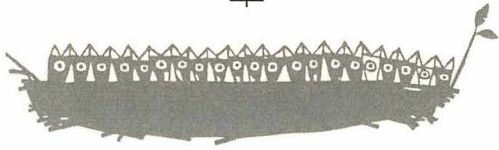
「あなたがたは互いに重荷（バロス）を負い合いなさい。……人はそれぞれ自分の重荷（ポルティオン）を負うべきである」。この言葉は新約聖書のパウロの書簡、ガラテヤ人への手紙第六章二節以下の言葉である。聖書の中では、私たち各々が負っていかなければならない人生における悲しみや苦しみ、苦悩などを「杯スチッキ」とか「重荷」という言葉で表現する。パウロはこの重荷を、「バロス」と「ポルティオン」という二つの言葉をもって、その意味を区別して語る。

前者の重荷「バロス」は、物理的に重い荷物や負債などのことであり、それは他者が取って替わって負うことの可能なものを指している。英語では load がこれにあたる。他方後者の重荷「ポルティオン」は、身重な婦人や船の積荷などのことであり、そのことから理解できるように「ポルティオン」としての重荷は他の何者にも取って替わってもらえない重荷、すなわち自分自身で背負っていかなければなら

らない重荷（現実）をいうのである。英語の *burden* がこれにあたる。

「人はそれぞれ自分の重荷（ポルティオーン）を負うべきである」。パウロという人は自分の現実を直視し自分でそれを背負って生きていきなさいと教える。何と厳しい生き方でしょう。癩病者でありたくないという思いと、癩であるという自己の現実を直視し、その現実を背負って生きる生き方に至るまでにどれほどの苦しみがあり、苦悩の涙が流されたことであろうか。しかし、癩園の人々の癩という病気を病んだ者としての自己の現実を真正面から受け止めて生きるその生の姿に触れ、私も含め多くの若者たちは自己の生への勇気を得ていったのではないだろうか。

第三章



あぶらむの旅立ち

一・あぶらむ構想

「本物」あるいは「達人」というのは、さりげなくて静かなものなのだなあ、ということに気づかされる。ハンセン病療養所沖繩愛楽園で出会った人々は、どの人もどの人も背負いきれないほどの重荷を負いながらも、けれどさりげなく静かに淡々と生きていた。彼らはこれまで一語も「私はこう生きてきた。あなたはどうか生きてますか」と問うたことはなかった。彼らのその淡々とした日々の姿を目にすると、こっちが勝手に「自分はどうか生きるのか」という問いを自らに発してしまふ。こちらに勝手に勝手をさせるのだから、達人というものはすごいものだと思つた。

男にとって四〇歳という年齢はキケンな年齢だと思ふ。肉体の曲がり角だけではなく、精神の、そして人生の曲がり角を伴うキケンな年齢である。

大学の礼拝堂付牧師時代の八年間、沖繩やフィリピン、ネパールの人々の胸を借り

て、学生たちとともにどう生きるのか、生きるとはどういうことなのかを問い合ってきた。しかし、どうも私の問いかけはメッキものだったらしく、四〇歳の時「お前は どう生きるのか」という問いが私を直撃してきた。それは、どちらを選ぶかの二者択一、逃げ場のないものだった。

「人生は奉仕なり」という言葉から出発した私の人生前半戦は、ホテル学校——社会福祉学科——愛楽園の人々との出会い——キリスト教神学校——牧師と変遷を重ねていった。一見お互い何のつながりもないようで、十分には説明できないものでもあったが、私の中ではつながっていた。やがて「人生は旅、私たちは旅人」というフレーズが口をつくようになり、人生旅路を旅する「旅人の宿」と、転んだら起きる人生のよき旅人づくりという「あぶらむ構想」がこれまで一見バラバラだったものを一つに束ねてくれるようになった。四〇歳を前にしてやっと何かが見えはじめてきた。

そんな時、私のドタバタした姿を見たくなかったのか、父が新しい名前を携えて一人静かに旅立っていった。お通夜の日、姉兄一人ずつ交替で夜伽した。たくさんの苦労ばかりだった父の人生、明日からはもうこの顔を見れないと思ったら、何か発作的

と一緒に寝たくなつた。父の横に並ぶ少しだけ布団の中に入れてもらった。疲れていたのでそのまま眠ってしまった。どれだけ眠つたのだろうか、びっくりした姉に起こされた。生前何もしてやれなかつたと、心の中ではウジウジしていた私だったが、この世の最後の一時、父と一緒に眠れたという思いが、私の気持ちを強くしていた。

私が神学校一年生の時、「お前がそんなものになるために苦労して学校へやってきたのではない」と、その激しい胸のうちを私にぶつけた父。自分の歩く道が理解されやすいような単純な直線とはならず、ただその時々の内面的必然性に強く動かされながら必死に歩いていた私。そのため私は自分の心の変遷をたびあるごとにこまめに手紙にしたためてきた。父にだけは理解してもらっていると一方的に思い込んでいた私だった。だからこそ父の胸のうちのありつたけの一言は私にとつては大きなショックだった。男泣きに泣いた。父もその一言がどれだけ息子を傷つけるか十分承知していたことと思う。それ以後私の人生の選択に対して、何一ついわなくなつた。

父を悲しませてまで牧師の道を選んだのだから、本当の牧師になろうと思つた。それが父への唯一の弔いと思つた。

愛楽園の人々の無言の後押し、旅人として立派に成長していく卒業生たちの後押し、そして父の死による後押し。しかし、人生のよき旅人づくりという漠然としたあぶらむ構想だけで現実的なものは何もなく、小学校六年生を頭に四人の子どもをかかえてどうしていくのか。東京での牧師の仕事から離れるということは野垂死と裏表だった。時期尚早、無謀、無責任、いろんな声が飛んできた。しかし外野の声はどうでもよい、自分はどうなのか、何を表現したいのか、そのために死に物狂いでやるのかどうか、答えはそれだけだが、そのわかっている答えにどうしても最後の一決断がつかなかった。

三か月ほど悶々としていたある日、それまで黙っていた女房が「あなた何をそんなに悩んでいるの。あなたの両方の親を見なさい。あなたはちょうどその中間の年齢、あなたもできます」と口を開いた。彼女のその一言で私は腹が決まり退路を絶つことができた。

「あなたの両方の親を見なさい」——私の父は四八歳の時、富山の空襲で全財産を失い、一人の家族をかかえて再出発した。そして女房の父親は三二歳で失明し、九人の家族をかかえながら戦前戦後の困難な時代を生き抜いてきた。「あなたは両の



手にそんな親をもっているんですヨ。だから大丈夫、あなたもできますヨ」。何と大きな後押しだっただろうか。女房のこの一言のために自分たちの結婚があったのだとしみじみと思った。

そのころをふり返つて今思うことに、我々はそれまで自分が生きてきた引力圏を脱出するのに、実に膨大なエネルギーを必要とするということである。現実生活、しがらみ、不安等さまざまなのが引力として我々をこれまでの場に引きつけて離さない。その引力圏脱出までがたいへんなのであり、いったん脱出してしまえば、それはそれなりになっていく。人間も宇宙空間に飛び立つロケットと同じだと思う。

### 精神の断食を求めて訓練校へ

さて、女房の一世一代の名セリフで腹が決まったものの、漠然とした「あぶらむ構想」そしてその実現に向けての方法論など何ももち合わせていない自分。決断と同時に「現実」という怪物が容赦なく襲いかかってきた。与えられていた宿舎の明け渡し、それに伴う家探し、何よりも無収入が恐い。そんな時、変な、理屈にならない理屈が

不安な自分を支えていた。それはネパールやインドで出会った光景である。

ネパールの首都カトマンズ、中世そのままの街並みアッサンを歩いてきた時のことである。黒山の人だかりの中から「デンデン、デンデン」と小さな太鼓の音が聞こえてきた。何かと、私もその人だかりに入ってみた。その時の光景は、私の心に一つのくさびを打ち込んだ。

両手両足とも付け根から切断された胴体だけの、それも盲目の大道芸人が、地べたにあおむけになり、その口に「デンデン太鼓」をくわえて、首を振りながら太鼓を打ち、肩と尻を使いながらいざつていた。足代わりとなつて肩と尻の皮膚がぶ厚くひび割れているのが、破れた衣服から見えた。私はその光景に激しく打たれた。

「人間、こうまでしても生きれるんだよ。いや、生きるということとは、こういうことなんだよ」と、その人は体を張って私に教えているように思えた。

そばで親方が、空き缶をもつて投げ銭を集めていた。私は彼の体を張った教えに感謝して、少々多めの銭を投げ入れた。すると親方が何か言った。多分、「このだんな、お前にたくさんの祝儀をはずんでくださったぜ」と言つたんだろう。その芸人は顔を

輝かせ、一段と激しく体を揺すり太鼓を打ち鳴らした。忘れられない光景である。

この時の「感動」という心の震えも私を支える力となったが、同時に「日本人として生まれたかぎりには食べられないということ、餓死することはない」ということであった。インドでも食べられないことの悲惨さをたくさん見てきた。しかし、日本人であるかぎり、「健康にして文化的な最低限度の生活を有する」ことが権利として保障されている。最低限度、家族が飢えて餓死することはないのだから、自分の夢実現に向けて挑戦しなければ、苦しむ人たちに対しても申し訳ないという、理屈にもならない理屈がどこかで自分を支えていた。

ちょうどそのころ読んでいた一冊の本が、私を不思議な決断へと導いていった。『断食のすすめ』という本である。それには、動物は皆、子孫を残すという行為をする時、まず食を断つことが記されていた。断食をすることによって生殖能力が最高に高まるのである。その身近な例が、鮭であろうか。釈尊もイエスもお教えを広めるといふ大事な使命の前、断食をもってなされていったという話でその本は終わっていた。

自分のささやかな決断ごとに釈尊やイエスの名が出てくると話は少しおかしくなるが、私がひかれたことは、ものをはじめるにあつたつての精神的断食の大切さであった。私にとつてのそれは、一時大切な家族と離れることだった。確かに、無収入の中で不安にかられ、チマチマとした家族の顔を見たくなかつたという理由がなかつたといえば嘘になるが、それよりもこれからを考える大切な時、一人になつてしっかりと考えることの大切さを選びたかつた。

そのころ私の中ではつきりしていたことは、自分も一人の旅人として自分が求める世界に向かつて旅立つこと。二つに「旅人の宿屋」をつくることだった。いつしか私の中に「教会宿屋論」なるものが芽生えていた。人生旅路を旅する中で、精神的肉体的に疲れた時の癒しの場、また現在地点がわからなくなつたり目指すべき方向を見失つたりと、そんな旅人の現在地確認の場が宿屋なのだと思えるようになった。そして旅人の心がなごむ宿屋という空間は、いろいろな面において「本物」で満たされてなければならぬ、まがいものやメッキものでは疲れた旅人の心は癒せないと直感していた。

人間としての自分のいいかげんさを棚にあげてこのようなことを書くのははなはだ

恥ずかしい限りなのだが、しかしそれは人生終わるまでの私の課題として置いて、少なくとも物理的空間（建物）だけは本当のものをもって旅人を迎えたかった。しかし、お金も何もない私、ならば可能な限り自分で手造りしようと思ひ、私は木工の技能訓練校に学ぶことにした。そして、この種の訓練校は東京にもあつたが、一年間だけ家族と離れるため、私は縁あつて飛騨高山の技能訓練校を選んだ。

「鑿<sup>のみ</sup>を研ぐ手に降る寒雨 飛騨の春」

一九八六年四月、私は家族を東京に残し、単身で飛騨へ来た。温暖化のせいか、今ではいつこうに飛騨の寒さは苦にならないが、あのころは寒かった。木工修業の第一歩は刃物研ぎ。屋外での刃物研ぎは春というのに寒く、どれだけ一生懸命やってもうまく研げない。それどころか研げば研ぐほどガタガタになつていった。一年の訓練期間でどこまでできるようになるのか、またその後の展開は等々、上手下手は別としてこの句は生涯忘れないだろう。ただただ不安だった。死んだ父がよく、「命とられたわけじゃなし」といつていた。いつしか私も「命とられたわけじゃなし」といつて、不安を払つていた。

技能訓練校には木工科のほか、建築科と自動車整備科があった。木工科は高卒以上だったが、他の二つは中学出たての子たちが多かった。一六歳〜六〇歳までの年齢幅、教官たちもたいへんだったと思うが、こちらも時として辛いものがあった。

私は決して模範となる訓練生ではなかった。扱いにくかったと思う。卒業資格を取るのが目的ではなかったので、一通りの訓練が終わった二月、退学した。

### あぶらむ構想

訓練校での一か月間、木工の腕は上達することはなかった。その後職人さんたちと一緒に仕事をするようになって、少しはものが作れるようになった。しかしその間の夜の独りぼっちが貴重だった。たまには訓練校の仲間と飲むこともあったが、ほとんどは一人でこれまでの歩みを見つめなおした。漠然としていた「あぶらむ構想」が次第に鮮明になっていった。訓練校の一年が終わるころ、次のような新しいあぶらむ構想ができあがっていた。

一九八七年、あぶらむの会を発足した時の「あぶらむ通信準備号」に私は次のよう



に書いている。

あぶらむ通信 準備号

飛驒便り——創刊にあたり——

寒里にやつと来たりし春なれど一雨降れば股引きをはく

何と冴えない短歌でしょう。中年丸出しです。新緑につつまれた飛驒地ですが、雨の日は肌寒く、厳しかった冬が想い出されます。でも自然の恵みを身体一杯に受け、家族一同元気に過ごしています。

申し遅れましたが、この「あぶらむ通信準備号」を手にされる皆様にはお元気で  
お過ごしのことと思います。永のご無沙汰お赦しくくださいませ。

昨年三月、「あぶらむの会」創設のため、日本聖公会司祭職を休職とし、飛驒高山の技能専門校にて木工の訓練をうけた私でした。

当初、「あぶらむの会」の本拠地を房総半島の一角にと、漠然と考えていたのですが、飛驒地での一年間の生活を通してみて、この地のほうが、土地取得や宿屋



建設等、いろいろな面において現実性が高いと判断し、この地に腰をすえて活動を開始することに決心しました。

そして本年三月末、家族が引越してきました。東京生まれの東京育ちの女房、子どもたち、永年住み慣れた地を後に見知らぬ土地に向けての旅立ちは、ちよつぱり不安に満ちていたようです。家財道具一式を積んだ二トン積トラックを先頭に新たな地に向けての出発は、私たちなりのアブラムの旅立ちでした。

五月一三日、私たち夫婦は一四回目の結婚記念日を迎えました。一四年前、いや昨年でさえ、今日こうしてこの飛驒の地で生活することを誰が予測することができたでしょうか。

しかし、このようになるべきことの萌芽性は、結婚の時からあったように思います。

結婚記念日のその日、私は一四年前の私たちの結婚案内状を、読み返してみました。私たちはこんなことを書いています。

「……その昔、イスラエルの父アブラハムは、『あなたは国を出て、親族に別れ、

父の家を離れ、私が示す地に行きなさい」という神の言葉を唯一の拠りどころとし、それに望みをおいて生き、私たちに信仰の力強い姿を示してくれました。ひ弱で未熟な私たち二人ではありませんが、互いに手を取りあつて生きる中、私たちが神のこの言葉によつて今日を生かされていることを日々確認し、神の証し人として、その一途に生きぬきたく願っています。……」

結婚式の案内状にこのようなことを書くなんて、今から思えば気はずかしい限りですが、私たちにとつて嬉しいことは、結婚して今日まで私たちなりに、この最初のことばにこだわりながら、二人の人生を追い求めてきたということであります。

近くの野で採ってきた山菜をつつきながら、「最近の我家は信仰資本主義だネ (Faith Capitalism)」と笑いながら一四回目の記念日を祝いました。

高校卒業後、ホテル学校——社会福祉学科——神学校——牧師と、これは私の歩んできた道ですが、各々がどのような必然性において連なっているのかはすぐに理解できません。私自身この連なりが自分のものとなるのに二〇年余の年月がか

かりました。

昨年一年間の技能訓練校での生活は、私にとって良き黙想の機会でした。その中で私が発見したことは、この二〇年余私がこだわりの中に必死に追い求めていたことは、「与えられた大切な人生、己が人生旅路を真に旅すること」だったのです。それは自分自身が人生の良き旅人となること、また旅の途上で出会った人々とともに支え導きあう中で、互いに「旅する力」を育みあうことでありました。

私に生きることの意味を教えてくれた沖繩のライ園の人々、筆舌に尽くせぬ人生の苦悩を生きる力に変えてきた彼らは、「人生は一片の安定を求めることではなく、いかなる状況の中にあっても常に淡々と生きることであり、『転んだら起き上がる』そんな道理を身につけて生き抜くこと」を身をもって語り教えてくれました。なんと立派な旅人でしょうか。そんな彼らの生きざまに触れた若者たちが、どれほど自分の人生にたち向かっていったことでしょうか。

フィリピンやネパールなど、アジアで出会った人々も皆よき旅人でした。「転ばぬ先の杖」とばかり、ただ々安定を求めるあまり己が精神の自由を巨大なものに売り渡し、旅としての人生に臆病になった私たちとは異なり、アジアの人々は

「転んだら起きる」という「旅する力」を身につけて力強く生きています。

出来事としての人生旅路のなかで、一度壁にぶちあたったら深く挫折してしまうような今日の精神状況、今日の日本の社会病理の一因は、そんな「旅する力」のなさにあるように思えてなりません。それゆえに、人生のよき旅人を育てることが急務に思えてなりません。

私たちは「あぶらむの会」の働きとして、次のようなことを計画しています。

\*旅人育てとしての FIELD EDUCATION PROGRAM——生きた場からの学びと

しての実践教育活動

・社会福祉施設に生きる人々との生活を通して

ハンセン病療養所、老人ホーム、身心障害者施設 他

・アジアの人々との生活を通して

フィリピン、ネパール 他

・自然との生活を通して——その土地の人、自然、文化、歴史との触れあいを通して、また、集う者相互の人格的交わりを通して——

飛驒各地、沖縄、ヨット・プログラム 他

\*宿屋づくり——人生旅路の中で傷つき、疲れた人々が、新たな力を得て各々の持ち場に出て行くべき場としての宿屋

・人生旅路で疲れた人々へのサービス

・登校拒否児童等との共同生活

・各種講習会、研修会の開催

・高校、大学の課外活動の場としての施設提供

\*同じ人生旅路の中で苦悩しているアジアの人々への支援

・フィリピン、マウンテンプロビンス、サガダ村の孤児院への支援

・フィールドプログラムを通しての相互交流、相互理解

\*我々の旅の舞台である地球環境問題との取組——生活環境の見直し、消費から創造へ

・食糧問題——有機農業、自然食品

・緑の問題

・創造の喜び——木工、染色、陶芸 他

\*製造と販売——自活にむけて

・薫煙品（ハム、ベーコン）、木工品、染織品 他

自分はこんなことがしたかったのだ!!

四〇歳になってやっと人生前半戦の自分を総括できたように思った。さァー、人生これから！ 私は心からそう思った。

新天地、飛驒の地へ

当初私は、活動の拠点を漠然と房総半島のどこかと考えていた。当時、ヨットを用いてのフィールド・プログラムもおこなっていたので、海と山のあるところが理想だ

った。ところがその時、東京湾横断道路の計画が発表されると、房総の山中でさえ坪当たり一〇万円をくだらなかつた。私は旅人の宿をかまえる敷地として最低三〇〇〇坪（二万平方メートル）の土地が欲しかった。他方、土地購入に必要な資金はまったくなし。当時わが家にあつたお金は、家族が細々とした暮らして二年間ほど生活できる蓄えだけだつた。では土地購入資金はどのように考えていたのか、早い話、何とかして集めることしか考えていなかった。何とかしてと云つてどのようにして——私は自分の葬式を出すことを考えていた。生前葬というやつである。そして生きてゐるうちに香典をいただくかと考えていた。実際には候補地が決まるや仲間たちによつて「後援会」が組織され、私の葬式を出すまでには至らなかつた。でももし自分の葬式を出したら、その時集まる香典を私は勝手に三〇〇〇万円と決めていた。だから三〇〇〇坪の土地が欲しいならば坪単価一万円ということになる。そして万が一土地取得ができたとしてもその上に建物を建てなければならぬ。私の香典は土地取得だけで終わってしまう。その後はどうしようか……。

訓練校の時、休みとなれば飛驒中あちこち訪ね歩いてゐた。その時、道路の歩広め



にかかった飛驒の古い民家がウンボ（パワーシヨベル）で潰されている光景をいく度か見た。太い黒光りした立派な梁がむしり潰されていた。見ていても無惨な光景だった。また、山奥の村には廃墟まではゆかなくても人の住んでいない空家がいくつもあつた。これらの家を移築再生すればと考えるようになった。事実、兄弟のようにしている四つ違いの甥が古い民家を移築して店舗としていた。

私はその美しい姿、何よりも人の心をなごませることを彼によって教えられていた。また、耐用年数三〇年という日本の住宅事情にも大きな疑問をもっていた。資源の問題を考へても一〇〇年は使用できるものでなければならぬ。古家の再生には今日的な意味があると思つていた。

当時飛驒では、少し山に入れば坪当たり一万円もだせば十分に土地は買えた。私は飛驒に可能性があると思ひ、飛驒の地に居を構へることに決めた。そしてそのことを女房に伝へたら、「あなたがそう決めたのなら」ということで、土地はどこに与えられるかわからないが、まず家族全員飛驒に集まろうということになった。その時四人の子どもたちは、それぞれ中学一年生、小学校六年生、四年生二人だった。

私のこれまでの人生の中で、この飛驒の地に向けての家族の引っ越しほど希望に満ち満ちていた時はほかにはない。反対にいちばん惨めな気持ちだったのはその前年、大学から与えられていた宿舎から仮住まいに引っ越しする時だった。

地元飛驒運輸の二トンロングボディに積み込まれた家財道具。結婚して一四年、四畳半一間から出発した生活がいつのまにかトラック一杯の所帯道具。六人家族でそれが多いのか少ないのかはわからないが、わが家の家財道具を積んだトラックを先頭に、自分たち家族は新天地に向かっている。そこにはどんな運命が待ち受けているのかは知らないが、自分たちは「旅立った」というそれだけで私は無性に嬉しかった。それは私たちなりの「アブラムの旅立ち」だった。一九八七年三月末のことだった。

## 二．あぶらむの会設立と土地取得

神様、どうかあの土地を私にください！

飛驒高山に間借りした私たち家族、収入を得るためと木工技術向上のため、どこか小さな工房へ就職しようと思つたが、あと二年ほどはどうか食いつなげるとのことだったので、私はとりあえず「あぶらむの会」の看板を立ちあげ、土地を物色することにした。引つ越し荷物でゴつた返しているところへ、富山より姉が母の名代でようすを見にきた。結局母はその年にたおれ、翌年他界していったのだが、自分の死期を悟っていたようだった。いちばんの心配種の末っ子の私がそれなりに生活していることで安心していた矢先、家族をひきつれての民族大移動。これでは死ぬに死ねないという事で姉の派遣となつた。

飛驒から富山までは一時間半たらず。やがて神通川となる川ぞいに車を走らせればおしゃべりしている間に着いてしまう。その日、母の見舞いを兼ねて、姉を富山まで送ることにした。高山から一五分ほど、隣り町国府を走っていると「宇津江四十八滝」という案内板が出ていた。美しい滝があることを以前から聞いていた。急ぐほどのこともないので寄り道していくことになった。四月五日、滝は残雪が多く、入ることはできなかった。

四十八滝を離れること四〇〇メートルほど、突然左手になだらかな傾斜地が光り輝いていた。私を手招きしているようだった。私は車をとめ、中ほどまで歩いていった。それは南に面して裏手にナラ林をかかえた、何ともいえぬ心ませるような土地だった。田畑跡が荒れ放題になっていたので、これだけの土地だから誰かが何かの目的ですでに買収済みだろうと勝手に決めてしまった私だった。しかし、あまりにも素晴らしい土地なので、しばしの間その周辺を散策した。見れば見るほど素晴らしい土地だった。

形なし、名だけのあぶらむの会、最初の仕事は土地探し。私は五万分の一の地図を買い、等高線のゆるやかな南斜面を地図上に探し求め、順次現地視察することにして

いた。出勤初日、出かけようとしていたら、大家の味岡さんがきて「国府町瓜巢うりすのリンゴ園跡、いいところだつてヨ」とアドバイスしてくれた。その日はそこから訪ねてみることにした。

車一台やつと通れる狭い橋を渡ると三方を小高い丘に囲まれたすりばち状の傾斜地で、中央に清らかな小川が流れていた。一目惚れだった。そのまま役場へ直行、対応に苦慮した窓口嬢が「企画課」へ案内してくれた。当時は動きやすいようにと大型オートバイで走り回っていた。ヘルメットをかぶった中年暴走族のような格好をしていたので門前払いされないまでも警戒されてもしかたがなかったが、課長の倉坪和明さんは私の「あぶらむ構想」を真剣に聞いてくださり、その計画をぜひ国府町で、町が責任をもって土地を斡旋してくれるとの話になった。土地探し初日から、これでよいのだろうか。私は狐につままれているようだった。倉坪さんと話しながらモモをつねったら、しつかりと痛かった。

四月中旬、候補地が出揃った、との連絡が役場より入った。女房と二人、胸はずませながら出かけたが、どれも今一つ伝わってくるものがなかった。しかしこの時まで、母の見舞いに行く途中に出会った宇津江四十八滝側のあの土地が国府町所有との

情報を入手していた（残念ながらどうしてそのことを知り得たのか、今は記憶がない）。私は恐るおそる、倉坪さんにその土地の可能性を打診した。彼は困ったような顔をして、町の将来計画に組み込まれている土地であることを説明してくれた。町が私のような新参者にわざわざ探しまわって見つけてくれた候補ではあったが、私としても一世一代の大博打、納得のいく土地で自分のすべてを賭けたかった。町のご好意に感謝しつつ、他の町村にあたってみる旨を告げ、失礼しようとした。

すると、「大郷さん、あの土地ならばあなたは国府に骨を埋めますか」と倉坪さんがいった。私は間髪入れず、「ハイ、あの土地ならば私はここに骨を埋めます」と答えた。「今、ここで私の一存では何も申し上げられませんが、町にもち帰って、しかるべきところで相談のうえ、後日返事させてもらいます」と倉坪さんがいつてくれた。

忘れもしない四月二四日、私はできあがった家具に漆を塗っていた。その時電話が鳴り、受話器を取った女房が緊張した面持ちで、「役場からヨ」といった。あまりにも突然のことと内容の重大さに、私の心臓は爆発しそうになった。電話口までの





わずかな距離が遠くて遠くてしかたなかった。その間、私は祈った、「神様、どうかあの土地を私にください！」。

緊張と興奮とでうわずった声の私に対して、倉坪さんは冷静な声であぶらむに譲渡してもよいという町の決定を伝えてくれた。私は自分の耳を疑ったが、その後はもう夢遊病者のようだった。土地が見つかるまで三〜五年は覚悟していたのに、あぶらむの会を設立して一か月もたたないうちに候補地が見つかるなんて「幸運」という言葉で表現できる域を越えていた。

話が決まると町の動きは素早かった。どれだけの面積が必要なのか、現地で示せということになった。坪単価も何ものはっきりしていないの





ここならば国府に骨を埋めてもいい——やがて「あぶらむの里」となった町有地。

で返事のしようがなかったのだが、私もきわめてアバウトな性格なもので、後先のことなど何も考えず、「これぐらいの広さがあればいいなアー」というところまで歩いていった。ちようどそこに雪でへし折られた赤松の木が一本あったので、道路からその木までを買収の対象とした。

測量の結果、総面積一万八〇〇四・九平方メートル（五四五六坪）、金額にして二一六八万円ということだった（敷地面積はその度に異なってくるのでよくわからない。最近の地籍調査では二万一四五五平方メートルへ六五〇一坪、固定資産税の対象面積は一万八五六三平方メートルへ五六二五坪）。山は人間の体重のように増減するらしい。土地も生きて呼

吸しているのかなあ!? 別に地境の杭をいじっているわけではないので、増える分には問題ないだろうと思ひ、特別に調べることもしていない。きわめてアバウトですね。

### あぶらむの里建設募金の開始

旅人の宿や木工所、畑などが点在する予定の「あぶらむの里」の敷地は、国府町のほか二名の地主さんがいた。町が買収交渉等すべてのことをやってくれたので本当にありがたい限りだった。そしてその買収交渉も終わったころ、川上廣之國府町長より、土地代金の支払いについての話が出た。

「大郷さん、土地代金の支払いはどうしていただけますか」

土地を買うからにはあたりまえのことなのだが、そのころの私は候補地が決まったことだけで気持ちには天にのぼってしまったって、代金支払いのことなど眼中になかった。町長さんの一語で現実に引き戻された私、

「ハイ、土地代金はこれから募金で集めます」

といったものだから町長さんはびっくり仰天、

「大郷さん事業資金があるのではないのですか」

「ハイ、一銭もありません。家族が細々と食いつなぐわずかなお金以外一銭もありません」

と正直にいったものだから町長さんは「ハァー」とあきれてしまって次の言葉もないという感じだった。

翌日朝一番に役場に呼び出された。

「あなたは立教大学で働いていたとのこと、一度学長さんにご挨拶させていただけないだろうか」

ということだった。

早い話、私の身元調査である。そのことを大学時代の先輩甲藤さんに話したら、「お前のその顔だ、どこかのペテン師か何かの間違われてもしかたない。町長さんをご案内しなさい、お迎えしましょう」ということになった。さっそく国府町長歓迎実行委員会がつくられた。「遠路遙々きてくださるのだ、歓迎は国際色豊かにいさましよう」ということになり、懇意にしていた外国人スタッフなど主だった人総出で出迎えてくれた。すっかり安堵された町長さん、「これで安心して町に帰り報告できます」

と本音。しかし第一関門は突破したものの、だからといってお金が集まるという保証はどこにもない。このころから舞い上がっていた私の気持ちもしだいに現実に引き戻され、後援会結成とともに猛烈ダツシユの日々がはじまった。

一九八七年一月三日の第一回目七〇〇万円の支払を前にした十一月、「あぶらむの里建設募金趣意書」ができあがり、あぶらむの会の活動の輪郭がはつきりするとともに募金が始まった。

### あぶらむの里建設にあたって

本年四月、実践教育活動「あぶらむの会」は、人生の良き旅人育てを目的として、ここ飛騨の地に小さな産声をあげました。

この二〇年余、沖縄のライ園を出発に、次代を背負う若者と共に、フィリピン、ネパールの地を旅し、生きた現実の中から、多くの学びを得てきました。

病氣、貧困、飢えなど過酷なまでの現実の中で必死に生きる人々。しかし、出会ったどの人も自分の現実と正しく向きあい、苦悩の中にもその重荷を背負いなが

ら、出来事としての人生「転んだら起きる」という単純な道理を身につけて、淡々と力強く生きていました。そんな彼らの生きる姿に触れた若者の多くは、自己の人生に果敢に挑戦していく力を身につけ、大きく育っていきました。

また、我国の消費文化の陰で、緑を失い、美しい山河を破壊された発展途上の国々の現実や、太平洋戦争での深い心の傷跡などを沢山見せられてきました。

故林竹二先生は、教育は「パイディア」Ⅱ「魂の世話」——やがて自分で自分の魂を世話していく、そんな力を養い育てることが教育の根本義であると語っておられますが、先生のこの言葉に私は大きな学びを憶えます。

今日の物質的繁栄の中にあつて、経済的安定を求めるあまり、予測不能な出来事としての人生に立ち向う力が衰え臆病になってしまった日本、ささいな人生の負荷に深く挫折し、精神のバランスをくずしたり、自らの生命を絶つていった若者を幾人も見てきました。

その与えられた人生で多くの困難の中にあつても力強く生き抜く人々との生活を通して、「転んだら起きる」、「やがて自分で自分の魂を世話していく」、そんな人生旅路を旅する力を育て合っていくことが、私たちに与えられた役割と思ひ、実

実践教育活動「あぶらむの会」の発足となりました。

このような考えの中で、私たちは次のような活動を計画し、実行することに致しました。

### 生きた場からの学びとしての実践教育活動 (Field Education Program)

・ライ園や身心障害者施設など、社会福祉施設に生きる人々との生活体験を通して

・フィリピン、ネパールなど、アジアの草の根の人々との生活体験を通して

・飛騨、沖縄など、人、自然、文化、歴史との触れあいを通して

旅人の宿屋づくり——人生旅路の中で傷つき、疲れた人々が、新たな力を得て  
各々の持ち場に出て行く。そのような場として、また他の活用方法として

・内面的問題をかかえ苦悩する人々との短期共同生活

・各種研修会、講習会の開催

・各学校の課外活動への施設提供

同じ時代、私たちと同じ旅の途上にあって苦悩しているアジアの人々への支援



・フィリピン山岳州サガダ村の孤児院への支援  
・草の根レベルの研修生の受け入れ、そして出前講習会  
・ワールドプログラムを通しての相互交流、相互理解  
私たちの旅の舞台である地球の環境問題との取り組み——生活環境の見直し、消費から創造へ

- ・食糧問題——有機農業、自然食品づくり
- ・緑の問題——木を守り育てる仕事
- ・創造の喜び——木工、染色、陶工
- ・製造と販売——自活にむけて

くん煙品（ハム、ベーコン、ソーセージ）、木工品、染色品、農産物 他

ホテル学校——社会福祉学科——神学校——牧師、これは私の歩んできた道ですが、これら全てが人生の良き旅人を育てる仕事を私に与えるために、神様が用意して下さった道程であったことに今やっと気づきました。

これからは、飛騨国府に与えられた一・七ヘクタール（五三〇〇坪）の土地を



「あぶらむの里」とし、宿屋や工房を作り、畑や家畜を飼いながら、総合的旅人育ての仕事に邁進いたします。

私たち「あぶらむの会」の働きは、多くの方々のご理解、ご協力なくしては実現不可能です。どうか皆様方の絶大なご支援を賜りますよう、伏してお願ひ申し上げます。

なお、「あぶらむの会」は近い将来、公益社団法人として出発すべく現在準備を進めております。

一九八七年一月

実践教育活動「あぶらむの会」代表 大郷 博

夢を見るといふこと

「あんたアー、夢ばかり見とって、しょんべんたれられんなアー——お前ヨ、夢ばかり見ていて寝小便をたれるなヨ。」

母が逝って一五年近くたつが、どういふわけか自分の心に残っている母の言葉はこ

れだけである。夢と寝小便とはおもしろい取り合わせで、事実私には腹立たしく、にがい想い出がある。忘れもしない、私の最後の寝小便は小学校四年生の時だった。伯母の家に遊びに行き便所に入った。放尿しようというその時「待て待て、いつもこの手で寝小便するのだ。こんな夢を見て失敗してしまうのだ。これはひよつとしてまた夢を見ているのではないか」。私のそんな疑いに、いや大丈夫、これは夢ではない、おしっこしてもいいんだヨというもう一人の自分。安心してやったら後の祭り、しつかりと寝小便となっていた。夢の中でのダブルチェックも所詮は夢にしかすぎなかった。

「大きくなってまだ寝小便か」と、おかげで私はしつかりと折檻されてしまった。あの時の口惜しさは生涯忘れることはないだろう。おかげでその時以来、その種の失敗はなくなった（といたいところだが、深酒に関連した失敗が……、いくつになっても私には、この種の失敗がつきまとっているようだ）。しかし、夢を見ての寝小便はなくなったものの、夢を見るという性癖だけはしつかりと残ってしまった。

しかし、一年間余の間に二千数百万円のお金を集めるということは容易なことではなかった。当時はバブル経済の絶頂期、新聞紙上では脱税何十億、個人への銀行融資

何千億と、数十、数千億円単位の数字が踊るため、数千万円などゴミにしか見えないような錯覚を憶える危険な時代だった。しかし、これはたいへんな金額である。「人生のよき旅人育て」という夢をもった男が、目が醒めたら寝小便していた。中年男の寝小便だけはゴメンとばかり、大学時代の仲間や卒業生、ホームグラウンド愛楽園の皆さんやそれまでお世話になった方々など、実にたくさんの人々が必死になってあぶらむの会を支えてくださった。

地主の一人である国府町への最終支払の日、七〇〇万円余のお金を銀行は小切手で用意していた。私はそれを現金で用意するよう頼んだ。この目でその金額の重さを確かめたかった。カウンターに小高く積まれた札束、「お前の夢は俺たちみんなの夢。この時代のただ中であって、人生のよき旅人づくりに励め」という、協力してくださった人々の声が聞こえるような気がして、胸がいっぱいになった。

大学時代、全国大学宗教担当者研修会で、東京町田にある桜美林大学を訪ねた時の、創設者清水安三氏の言葉は、私に強い衝撃を与えた。

「戦争に負け、裸一貫で引き上げてきた私、これまでの歩みを悔い、平和日本再生の教育を心に誓い、神様、私にこの土地を与えてくださいと、この大学敷地の周囲を

毎日祈りながら歩きまわりました。あなたがた宗教者はまほうし幻を見たことがありますか！ 信仰者は幻を見なければだめです！」。

九〇歳を越えた氏の言葉に力が満ち溢れていた。信じ、求めるがゆえに幻を見る、これこそが信じて生きる者の力の源泉であることを知らされた。

数日前、姪の出産祝いにいって久しぶりに赤ちゃんの顔を見た。私たちの誰しもがもっていた夢いっぱいにくれあがった顔と澄んだ目。赤ちゃんには夢があるからこそ生命力があるのだと私は思っている。夢がなくなるとともに信じられなくなっていく私たち。信じられない人にとって何かを信じて生きている人は、「夢見人」のように映ることだろう。内心では、「夢を見て寝小便たれないように」と、密かにつぶやいているかもしれない。しかし、信じることでできなくなった人には寝小便に映るかもしれないが、信じて生きる者の夢はそうではないことを語っているのが、私が信じる『聖書』の世界だと思っている。それどころか、信じ、求めるがゆえに見る夢こそ、生への深いエネルギーであると私は思っている。

### 三、「あぶらむ」の名の由来

よく多くの人に会の名前の由来を尋ねられる。「アブラム」と書かず「あぶらむ」とするからなおのことである。会発足の当初、笑い話のようなことがよくあった。ある日銀行から電話があり、銀行嬢曰く、「モシモシ、あぶらむしの会ですか」、意地悪な私はわかつてはいても、「ちがいますヨ」、「エッ、どうも失礼しました」。すぐにまた、「モシモシ、あぶらむしの会ですか」とかかってくる。「あのね、後ろにしの字がついている」、「アッ、どうも失礼しました」。またこんなこともあった。ある日見知らぬ人が訪ねてきて名刺を出した。「奥飛驒カッパの会」とあった。カッパとあぶらむとどんな関係があるのかと考えていたらその人がいうには、「私は河童の研究、あなたは油虫の研究をしていらっしゃるようで、お近づきになればと思つて」。今でも間違いのナンバーワンはあぶらむしである。

ご承知のようにアブラムはユダヤ教、イスラム教、キリスト教の先祖ともいえるアブラハムの旅立ち前の名前である。

あぶらむの会発足時、当会の後援会長を引き受けてくださった故八代宗師は「あぶらむ通信」創刊号に次のような文を寄せてくださった。

あぶらむの会発足にあたって

あぶらむの会后援会代表世話人 八代 崇

「あぶらむの会」が発足しました。「あぶらむ」と聞いても何のことかさっぱり分からない人もいると思いますので、わたしの考えていることを申し上げてみましょう。

アブラムという人は、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒のすべてから諸国民の始祖とみなされている人ですが、それは旧約聖書・創世記一七章一八節にある

「わたしはあなたと契約を結ぶ。

あなたは多くの国民の父となるであろう。

あなたの名は、もはやアブラムとは言われず、  
あなたの名はアブラハムと呼ばれるであろう。

わたしはあなたを多くの国民の

父とするからである。」

という記述に由来していると考えられます。創世記によると、このアブラムという人は神の命令によって、甥のロトとともに神の示した約束の地を目指して旅立ち、途中でロトは「すみずみまでよく潤っていた」ヨルダンの低地を選び、アブラムはカナンの地に住むようになったといわれています。のちにこの出来事を新約聖書のヘブル書の著者は

「信仰によつて、アブラハムは、受け継ぐべき地に出ていけとの召しをこう  
むつた時、それに従い、行く先を知らないで出ていった。」(一一―八)

と記しました。アブラハムは、ただ神の約束を信じて旅に出た、そして神はその約束を守られた、それが聖書を記した人々やイスラム教徒の今日に至る確信なのです。

理論と実践の相克ということがよく言われます。立派な理論であつても実践に至



らない、反対に、実践はあるが、しっかりした理論的裏付がないため、一時的に線香花火のように燃えても、長続きしない、といったことを指しているのでしょうか。

九月の初めに盛岡で日本聖公会主教会が開かれ、わたしも出席してきました。会期中の一日、わたしたちは岩手少年刑務所を訪問しました。そこに収容されている少年（といっても二〇〜二七歳の人々でしたが）の多くは、覚醒剤取締法違反で有罪となった人達ですが、最近の若者なので、みんな身体は大きく、おっかない感じを与えました。わたしたちは、看守の後側から彼らにいろいろ質問したのですが、その時感じたことは、看守の肩ごしに語りかけ、覚醒剤が氾濫している現代日本社会を抽象的に批判することは簡単だけれど、少年たちがなぜ覚醒剤を打たねばならなかったのかを彼らの身になって一緒に考えてやることは、理論を振り回すよりはるかに難しいことだということでした。少年たちが刑期を終わって訪ねてきたら、あわてて居留守をつかうのではないだろうか、と。

人は人権について語り、平和について叫び、恵まれないアジア・アフリカの人々との協働を声高らかに叫びます。しかし、実際には何もしない人が多いのです。

あぶらむの会は、これまで活動を通して、だれよりもよく理論と実践の相克を克服し得た大郷司祭が、川上廣之町長を始めとする国府町の人々の暖かい理解と支援を得て始めようとする実践教育活動の会です。人間はすべてアブラム同様旅人であるという確信から、共に旅する人々にどのように奉仕できるかを考え、かつ実践する会です。とかく、理論に走りやすいタイプの人は、そんなことをやって、と批判しがちです。実際、一億円を上回る資金をどうして造るのか、そういった危惧の念もでるでしょう。しかし、大郷司祭を動かしているものはアブラムの信仰だと、わたしは思います。先に引用したヘブル書の著者は、信仰を説明して、

「信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである」(一一一一)

と記しています。「行く先を知らないで」飛出したアブラムのように、大郷司祭はその確信していることを神は必ず実現してくれると信じているのだと思います。わたしたち一人ひとりが旅人です。その旅をどのように続けようとしているのかを、わたしたちは問われています。ロトのように目で見て「すみずみまでよく潤

っていた」ヨルダンの低地を選ぼうとするのか、それとも、アブラムのようにただ神の約束を信じようとするのか。

八代先生の文にあるように、私は「旅人」の原形を「アブラム」という人の中に見たように思う。そしてハンセン病を病んだ人々との出会いを通して、与えられた人生の中で自らが「旅人」となっていくことの大切さを教えられた。生まれればかりの「あぶらむ通信」創刊号で私はこんなことを書いている。

### 飛驒便り 新春のお慶びを申し上げます。

この「あぶらむ通信——創刊号」を手になさる皆様には、お慶びのうちに新年をお迎えのことと存じます。新しいこの一年も皆様一人々々の上に、神の豊かな祝福と平安がありますように心よりお祈り申し上げます。

私たちもこの飛驒の地で、感謝のうちに「あぶらむ元年」を迎えました。あぶらむの会頑張れと、多くの励ましが記された賀状に感謝しつつ、こうして元旦の夜、本年の初仕事としてペンを走らせている私です。そういう私の顔は漆にかぶれ、

バルタン星人かお岩様のようにはれあがっています。何か私たちの今後を象徴しているようですが、漆の美しさを得るにはこのかぶれは避けて通ることが出来ません。この見るも無惨な顔は産みの苦しみの象徴と、勝手に解釈している私です。元旦の朝の気温はマイナス九度でこの冬一番の寒さでした。一冬の記録をと、日々の最高低気温を記していますが、マイナス八〜九度というありきたりの気温ではものたりなくなり、いつマイナス一八度という昨年の記録を破るのかと、びつくりするような寒さを期待しているから不思議です。厳しい寒さに打ちひしがれて小さくなるのではなく、寒さに対しても遊び心をいつまでも持ちたいと願っています。

去年は土地購入決定とともに、八代先生を代表世話人に、「あぶらむの会後援会」を発足させていただきました。心温かにできあつてきた趣意書を手にした時、もう嬉しくて嬉しくて、これですべてができあがつたような錯覚におちいり、女房と二人で祝杯をあげました。「あぶらむの会」にお寄せ下さる皆様のお気持ちに心より感謝申し上げます。

そして暮もおし迫った二八日、第一回目の土地代金を支払い、やっと三分の一の

土地取得が完了いたしました。全く夢のようです。三年程で候補地が見つつかれば上出来と思っていたのに、もうここまで。あまりのテンポの速さに私自身戸惑っている状態です。全てが神様の計画の内なのでしようか、不思議さと感謝で一杯です。

一二月三〇日、朝日新聞の社説「難破船上の踊りいつまで」を興味深く読みました。国としても、一人ひとりの個人としても、私たちは変わらなければならぬ時代がとつくに来ているのに、人々はあるあまるような物とお金の上にあぐらをかき、日本でしか通用しない価値観や思考様式に安住して我が世の春を謳歌している、そんな日本の現状を難破船にたとえて鋭い警告を發していました。

私が私であることを保証してくれているもの、そのような存在基盤を根底から奪われた体験を皆様はお持ちでしょうか。年輩者の方には戦争がその一つだったと思います。そして、私の人生の教師である沖縄の癩園の人々も……。

私にもささやかな体験があります。それは神学校一年生の時で、そのころ年に三週間、社会福祉施設での実習がありました。私たちはある精神病院で看護士とし

て実習にあたりましたが、私だけはおつと患者の側に立つての体験ということで、患者として体験入院しました（院長、事務長以外、私の身分は秘密でした）。実習の始まる日、当分は不自由な生活と、仲間と近くの食堂でカツ丼を食べ、ビールを飲んだ私、その数時間後には鉄格子の中で粗食に耐えなければなりませんでした。今日では人権が強調されていますが、当時はまだまだ大変な時代でした。きわめて不十分な食事、いつも空腹で見る夢は食べることに青空の下で遊ぶことばかり。階級制度ができていて、力ある者が弱い者の食事を奪ってしまうことなど日常茶飯事、いつも泣きを見るのは成人の知的障害者ばかりでした。

飢えるということは不思議なもので、大豆の佃煮など、始めは漠然と「豆の佃煮」と日記に記していたのが、最後には「豆佃煮九粒」とその数まで記しているのです。そして前日より一粒でも多いと得をしたような気持になった私でした。

それまでの私は、聖書の中の教えをそれなりに実践できると思っていました。「飢えている人がいればそれに食わせ、渴わいている人がいればそれに飲ませなさい」、私は不十分ではあるがそれなりに出来る、またそのようにしなければならぬと思っていました。しかし、実際に飢えた時、私は他人のものを奪うこと



はしませんでしたが、わずかな食物を奪われたみじめな者に分けてあげることは出来ませんでした。そんな自分の姿を目にした時、それまで私がつけていた価値観や倫理観などがガラガラと大きな音をたてて崩れ去っていったのです。何故ならば、私がそれまでもついていた諸価値観はいくつかの保証の上に成り立っていたものであって、全てが借りものだったからなのです。それに気づいた時のショックは相当なものでした。以来私は、不十分でもいい、思いと言葉と行いが一致した言葉を自分に持ちたいと願ってきました。

しかし、よく考えてみれば、私たちの人生で私たちが拠って立っている前提がある日突然に奪い去られてしまうことがあります。病気、事故、離別等、様々な要素によって私たちは常にゆさぶられています。自分が自分であることを保証してくれているもの、私が拠って立つ前提が奪い取られた時、そこにどのような自分が残るのか、人間の価値は、余分なものをはぎ取った後の裸の姿にあるのではないのでしょうか。

今日の日本はあまりにも、物質的豊かさという前提によりかかりすぎているように思います。それが崩れ去った時、そこにどのような日本が残るのでしょうか。



人生の良き旅人は、それらの前提が奪われても奪われても尚、自分自身であることを求めてやまない人であるように思います。

年のはじめ、私たちの誰しもが新しい日記や手帖を手にします。この一年の日付以外は白紙です。この白紙の上に一日一日、確実に私たちの現在、未来、そして過去が記されていくのです。新しく迎えたこの年、私の生活の中で何が、どのように記されていくのかと思うと小さな身震いを覚えます。私たちの生活が平穩無事であることが奇蹟のように思えてなりません。しかし、新たなこの一年、たとえどのような出来事が起ころうとも、全てを受けとめて生きて行きたく念じています。

終りになりましたが、土地取得、後援会発足と共に、この「あぶらむ通信」も準備号の役割を終え、創刊号へと移らせていただくことに致しました。これからはこの通信を通して、あぶらむの会の現状をお伝えすると共に、私たちの周囲の様々な問題を共に考えあつて行きたく願っています。

新しい年、皆様お一人お一人のご多幸を、この飛驒の地よりお祈り申し上げます。

あぶらむの会代表  
大郷  
博

#### 四．あぶらむの宿建設

##### たくさんの不思議

あぶらむの里候補地発見から丸二年、一九八九年二月一七日、国府町への最終支払いをもって土地取得は完了した。土地代金の支払いが完了するまでは開発が禁じられていたため、その間六〇〇〇坪の土地というキャンバスにどのような絵を描くのか、いろいろと構想を練った。宿はここに、道はこのように、スタッフハウスはログにしたい等々、何しろ夢想するのはただだから、勝手にあれこれと夢がふくらんでいった。今から思えば、このころがいちばん楽しかった。

しかし、夢という眠りはすぐに、「現実」という目覚まし時計によって起こされてしまう。あぶらむの里の敷地は、もともとは田畑と山林だったため、それなりの整地

作業を必要とした。とくに田畑跡に建物や道路をつけるとなると、土の入れ替えなどけっこうな作業となる。土木業者の見積もりを見ただけで絶望的、土地取得だけで全エネルギーを費やしたあぶらむにとって、それは手に負えるような額ではなかった。私は自分でやることに決めた。金銭的な理由が第一だったが、それとともに与えられたこの土地と対話しながら穏やかにこの自然と調和するかたちで、人間の手を加えたかったからである。現時点で先々までのことをやるよりも、五年、一〇年と月日を重ねる中で私のこの土地や自然に対する見方も変わっていくはずである。その都度、必要な作業をしていこう、そのためには自分でやるのがいちばんだと思った。

私は中古のユニボ（パワーショベル）を買うことにした。しかし、もうそのころには逆立ちしてもお金はなかった（今でこそ笑い話になってしまったが、近所の金物店で一キログラム単位で売っているわずか二〇〇円の釘を買う余裕がなかった。一つのサイズの釘三〇〇グラムくださいといったら、「うちはそんな商売していない」といわれた。それで私は仕方なく各サイズとりまぜて一キログラムにして買って来たこともあった）。

どうしたものかと思案している時、突然に木俣茂世神父が訪ねてきた。大学生時代

からずっと、精神的に私を支えてくださった人である。

この木俣神父という人も人生のよき旅人、達人であった。学生時代のある日、『人間の条件』の徹夜上映を観た私が興奮気味にその感想を話した時、木俣神父は実際はあの程度のものではなかったと、はじめてその体験を私に話してくれた。

親の仕事の関係で旧満州で少年時代を過ごした神父、一六歳で志願兵として戦場に狩り出され、雨あられのような銃弾の下をかくぐり、最前線に弾薬を運んだという。終戦とともにシベリアへ抑留、収容所で死亡した日本兵の遺体埋めが仕事だったという。

「大郷君、冬のシベリアの土を掘るとはどういうことか、多分想像つかないだろうね」と語っていた。収容所の火事と脱走、見つければ殺されるのはわかかっていても、収容所でみすみす死んでいくよりも脱走にかけようと思ったという。南満に行けばどうにかなると思ひ、昼は草むらに隠れ、夜は線路づたいに二三日間飲まず食わずで走りつづけたという。「大郷君、人間生きようと思えばどんなことがあっても生きられるんだヨ」といつて私を励ましてくれたことを忘れない。そんな木俣神父、多くの迷惑をかけた中国に人生の最後を捧げたいと、堪能な中国語を活かし、河西省南昌河

西医学院で日本語の教師として働いていたが、あぶらむを訪ねてこられて四年後の一九九二年、志半ばで病に倒れ、中国の土に帰していった。「大陸で育った私は学徒動員中、日本軍による中国人への虐待を目の当たりにしました。償いの思いを深めて、祈りの生活で証をしつつ、奉仕してまいります」。この便りが最後のものとなった。穏やかな人だが、意志の強い人だった。

突然の来訪の理由を尋ねたら、大郷君の顔がちらつき出したからと、笑いながら聞いていた。帰る時、今のあぶらむは何もが必要なものばかりだろうと思うが、その中でも何がいちばん必要かとたずねてくれた。元来いいかげんな私、「ウンボ」と答えたらいくらするものかとのこと、「中古で二〇〇万円は」と簡単に答えた私に「天から降ってくればいいね、私もお祈りしておくから」といつて帰っていかれた。

それから十日ほどたったある日、寄付してくれる人が見つかったからすぐに買いなさいとのことだった。あまりもの金額の大きさに戸惑い、辞退しようとしたら「あやしいお金ではないから。いつか私の手助けをしたいと聞いていた弟、私を助けると思っただぶらむを助けてほしいといったらOKになったの。弟も病気もちなのでいつどうなるかわからない身だから、今のうちに人の役に立ちたいと聞いている。人助けす

ると思つてすぐにもらいなさい」。最後は命令調になっていたこの申し出に、私はありがたくいただくことにした。こうしてあぶらむの里建設にユンボという強力な助っ人がやってくることになった。

「ユンボが里にやつて来た」、だがしかし、ここでも理想と実現のギャップがまたまた噴出してきた。私のユンボ操作は指一本でピアノを弾くようなもの、使いものにならないのである。ユンボは八つの動きを瞬時に組み合わせる操作する。ファミコンをいじっている時代に生まれていたら、少しは上達は早かつたと思うが、説明書を見ながらの単一動作でしかできないので、土をしゃくすることもできなかった。しかもユンボは里にやつてきてしまっている。私は一週間、朝から晩まで一日中練習しつづけた。その間土木工事現場に出かけていっては、プロの操作を観察していた。半日もじつと見ているので、作業員たちは不思議がっていた。このような暁の特訓が実つたのか、私は牧師ならぬ「土木師」になつていった。

そんなある日のこと、小脇にアルバムをかかえた見知らぬ人が訪ねてきた。「ひよつとしてあなたは室田さん（私の義兄）の親戚筋の人じゃないですか」、これが最初



の言葉だった。洞邦宏さんとの運命的な出会いだった。

昭和三〇年代、飛驒の人たちは自動車の免許を取るには岐阜か富山まで出かけて行かなければならなかった。岐阜までは一五〇キロメートル、富山はその半分ほどの距離。しかし、富山で取得するには一時住所を移さなければならなかった。いろいろな伝手をたよって義兄のところへやってきた洞さん、面倒見のよかった義兄は住所だけではなく、店で若衆と一緒に働きながら通うことを提案した。免許を取り終わった後も春がくるまで働いたという。洞さんにとっては青春時代のいちばんの想い出と、アルバムを見せながら話してくれた。そこには若かりしころの義兄がいた。しかし、五六歳、まだこれからという時に逝ってしまった。私の目的を聞いた洞さん、義兄への恩返しと思つてあぶらむを助けてくれると約束してくれた。見知らぬ地での不思議な出会い、もうこの世にいない人までが私を助けてくれると素直に思った。この洞さんの仕事は建物の基礎工事、そして村祭の時は地元熊野神社の神主さんに早変わり。私との間には宗教戦争もなく、以後あぶらむのすべての建物の基礎は洞さんの無償行為によつてつくられていった。この人の存在がなかったら今日のアブらむのハード面はできていなかったと思う。

## 古家探し

当時あぶらむにはほとんど収入はなかった。四反ほどの田を借りて米をつくり、その他注文の木工品やハム、ベーコンなどの燻煙品、そしてジャムなどをつくり、かうじて生計を支えていた。ある時など、夜遅くまでジャムの瓶詰めをしていたら、突然おまわりさんが入ってきた。爆弾でもつくっているのではないかと思ったのかもしれない。

あぶらむ本来の活動のため、またここで働く者たちの生活確保のため、一日でも早く宿を建設しようということになった。私の古家探しがはじまった。

飛驒の地には古家はたくさんあるが、これはと思う家にはなかなか出会えない。どれだけ見てまわっただろうか。家にも顔があり、性格もある。人間と一緒にだと思った。

ある時、隣村河合村に大きな空き家があるというので出かけていった。間口一二間、奥行き七間の総二階建ての、実に大きな家だった（約一六八坪、五五五平方メートル）。玄関から客間にかけては檜けやきの太い柱にこれまた赤黒い払き色の出た太い梁。これみ

よといわんばかりの造りである。しかし、一步客間を離れ、家人の住むところへ行く  
と安普請のちぐはぐな家だった。家は施主や大工の人格の表れであることを学んだ。  
後日談だがその家はその年の豪雪でつぶれてしまった。家は全体でもっているもの、  
大切な隅々がああ安普請では無理はないと思った。また、先日訪ねてきた大工の話が  
おもしろかった。相手の大向うを唸らせようと必要以上に太いものを使うと、どこか  
違和感があり、必ず飽きがくるといつていた。私も同感であった。

またある時、櫓づくりの立派な家があるというので見に行った。玄關戸を開け一歩  
土間を踏んだ時、背筋がピンとした。柱、桁、床、総櫓づくりの家だった。用いる材  
料によってこんなにも家の雰囲気異なるものなのかということ、その時はじめて  
知った。神社、仏閣に櫓を用いるのは、単に耐久性の問題だけではなく、人の心に喝  
を入れる目的もあるのだと思った。だとすれば、私が求める旅人の宿には背筋をピン  
とさせるような空間は必要ない。ホッとできるような空間には櫓は似合わないと思っ  
た。その点、松などは人の心に優しく柔らかい。そこに宿る人の心をなごませるよう  
な家がほしいと思った。

灯台もと暗しとはよくいったもの、それまで樺材使用の家ばかりを求めて富山県境方面ばかりを探していた。樺というこだわりを捨てたら、旅人の宿にふさわしい家が地元国府にあった。落屋を加えると間口一〇間、奥行き六間二階建ての堂々とした家である（建坪一二〇坪、三九六平方メートル）。とくにどうこうといった家ではないが、客間、家人用の室の区別なく、隅々まで丁寧につくられているところが気に入った。相手の大向うを唸らせるような造りよりも数段上等であると思った。

このような空き家というのは値段があつてないようなもので、その家のその時の状況によつて大きく変わってくる。

たとえば道路の幅員拡張などで明け渡しの際限が決まっているような家で、貰い手のない家などは先方から持参金付でもらつてくれという話もある。先祖代々のものを自分の代で取り壊すということは、田舎ではたいへんなことなのである。

他方、こちらが欲しいといえばどんな値が上がっていくものもある。飛騨では昔から、よい家は売買の対象になつた。あぶらむの宿となつた家は私で四代の主に仕える家となつた。その家に生まれ育つた人にとっては、その家の存続だけが大きな願いとなるが、たまたま買った土地についていた家ということであれば一つの商



あぶらむの宿になった元家。

品となる。それぞれの家にそれぞれの歴史があるから、古家はおもしろい。

あぶらむの宿となった古家購入の時も、洞さんの力によった。持ち主の縁者をかためて、ねばり強く交渉してくれた。話がまとまったのは深夜一時。車のガラスが凍りついてしまうほどの寒い寒い日だった。

「天の下のすべてのものには時がある」という旧約聖書の言葉ではないが、すべてのものには時があつて、こちらが立てた計画通りというわけにはいかない。同時進行してみたり、後先が逆になって不都合が生じたり、けれどもこちらの思いを越えてすべてのことが時を得て、ジグ



ソーパズルのように納まっていくのである。あぶらむの宿も基本となる建設資金のことは手もつけられず、宿建設に向けての具体的できごとばかりが先行していった。ものができあがっていくということは、そういうことなのだろうと今は思っている。

私のやり方は単純素朴、現在支払い可能な分と、近々資金調達の目途めどが立つ範囲内の工事というきわめて原始的なやり方である。第一期工事として家の基礎をつくり、解体してきた家の骨組みだけを建て屋根を葺く。人間でいえば骸骨のままである。その後はお金のできた分だけという、実に気の長い原始的な方法で考えていた。

しかし、これだけ大きな家、プロの力なしに建てることは無理、あぶらむの実状を理解して協力してくれる棟梁がいるだろうか。そんな時、洞さんが隣町古川町の棟梁片町恒司さんを連れてきてくれた。決して口数の多い人ではなかったが、最大限の協力を約束してくれた。

古家の解体移築の第一歩は家の基礎工事。解体した材料を長期間放置すると、百年ほどたつて枯れた材料といってもねじれたり狂ったりする。解体した後、日を置かずに再建築するのがいちばんである。

洞さんと二人、とにかく基礎をつくらうということになった。材料代だけで一〇〇万円はかかるとのこと、一、二か月あればどうにかなるだろうと思ひ、基礎工事に着工した。

増築部分を入れて建坪一四三坪（四七二平方メートル）の家といえげっこうな大きさになる。基礎の床掘りは私の仕事、作業しやすいようにと床掘り部分を石灰で線を引く。一瞬にして基礎の全容が浮かび上がってきた。ちよつとした感動の一時だった。

「大郷さん、鎮魂祭はどうするかね」と棟梁の片町さん。「神主の洞さんと牧師の私が協力してつくる基礎だから、これ以上堅固なものはないでしょう」といって、家の四隅に酒をかけ、工事の無事を祈った。

「大郷さん、手間代はかからないのだから。材料代を儉約してみても大差はないのだから。家は基礎でもつもの、後世の人に誇れるようなものをつくるんだぞ」と、洞さんの意気込みには熱いものがあった。そんな二人の熱い思いが伝わっていったのか、材料費の支払いに頭を悩ませていた私のところへ、カンパといって一〇〇万円の寄付があった。ウソのようなタイミングの良さ、私はありがたく用いさせていただくこと



にした。ここでもいろいろな不思議がおこった。

### あぶらむ債発行

宿の基礎工事開始とともに、私の考えていた原始的な骸骨方式ではなく、せっかく理解ある棟梁に恵まれたのだから一気にことを進めてはという意見が後援会を中心に出てきた。問題の所在は資金の調達方法である。私としては再度の募金だけは避けたかった。多くの人に多大なご協力をお願いしたばかり、それにまたお願いするとなれば香典の二重取りで詐欺師になってしまう。そうしたら卒業生の一人が「先生、キリスト教には復活があるから、もう一回だけならいいんじゃないですか」と笑談をいった。一同笑いながらも再募金はやめようということになり、相談の結果「あぶらむ債」の発行ということになった。一口一〇万円、借用期限五年、無利子で元金のみ返済という内容である。

担保など裏付けも何もない怪しげな債権など買ってくれる人がこの世にいるだろうかという不安もあったが、フタを開けてみれば半年間で二六〇〇万円分のあぶらむ債

を買っていただけた。後援会事務局長を引き受けてくれた西田邦昭さんはじめ、世話人の方々の尽力のおかげだった。こうした東京を中心とした仲間たちの熱気が地元協力者の熱気呼び、あぶらむの宿建設は順調に進んでいった。

しかし、好事魔多しとはよくいったもので、ヨットもそうだが順風時がいちばん要注意なのである。

七月二八日、棟上げ式の祝いの翌日、私は屋根から落ち病院へ運び込まれた。その日は直射日光の照りつける暑い日だった。前日の祝酒で二日酔い気味の私は、大工さんたちに混ざって屋根の垂木を打っていた。正午の合図でこれが最後の一打ちといちばん外側の垂木を打っている時に事故がおこった。身体を乗り出し外側の垂木を打った瞬間、私の体は吸い込まれるようにして落下していった。

地面にたたきつけられるまでのわずか一秒たらずの間に、私は白日夢をみた。それは暗黒の宇宙空間に大きな渦がまいていて、あおむけになった私の体はその渦の底に引き込まれていくのである。不思議なことにその光景を高見にいるもう一人の自分が見ているのである。「ああ、渦の底に吸い込まれてゆく。あの底が死の世界なのだなァー」と、もう一人の自分が客観的に見ているのである。渦の底に吸い込まれたと思

った瞬間、私の体は激しく地面にたたきつけられた。次の瞬間意識が遠近法を描くようにだんだんと先細りになっていった。「ああ、あの点まで行くと死ぬのだ」と思ったら、私は自分の意識を呼びもどすべく大きく声をあげた。するとそれまで猛スピードで点に向かって走っていた何かがストップし、今度は逆走をはじめ、何かが画面いっぱいに広がってはみ出た時、私ははじめて正気に戻った。意識が戻ると同時に呼吸ができない苦しみに襲われ、しばらくの間は地獄の苦しみだった。

その日の前日、電線の地下埋設のため穴を掘った。その時出た頭大の石をそのままにしておいたが、私の体はその石の上に落ちたのだった。結局肋骨三本の骨折でことなきを得たのだが、あと数センチずれていたら背骨損傷、石がなかったら頭か腰を強打していたことだろう。不幸中の幸いというか、肋骨がへし折れることによつてショックを吸収してくれ、ふんわりと軟着地させてくれたのであった。

病院にかつぎこまれて二日間、首から下が硬直して動かなかった。全身麻痺まひの不安が頭をよぎる。試しに足の指を動かしてみようと思うのだが、もし動かなかつたらと思うと恐くて恐くて、なかなか試みる事ができなかった。意を決して動かしてみたら動いた、確かに動いた。あんなに安堵したことはなかった。肺の損傷もなく、治療方

法は安静に寝ているだけということだったので、私は六日目に病院を逃げ出した。工事現場で戸板に布団を敷き、棟梁とあれこれ打ち合わせした。ここでもまた一つの不思議が私を守ってくれた。

こうしていろんな不思議が集まって「旅人の宿」が完成した。「あぶらむ通信」に寄せられた記事で、完成までの喜びをみなさんにお届けしたい。

### 家族として迎えられたあぶらむでの生活

筒井 啓子

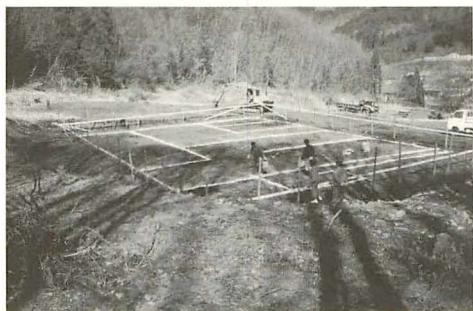
あぶらむの里には、昨日の新しい宿屋の上棟式の賑わいがまだ残っている様であった。隅の方で談笑していた人達に気遅れして佇んでいると、一人離れて私の方へ歩いてこられたのが大郷先生であった。「おめでとうございます。ずい分立派ですね」「いやあ、皆さんのお陰です」先生はいかにも嬉しそうであった。

この春、初めてここを訪れたときには、まだ基礎も出来ていなかった建物が、いま夏の日を浴びて立っている。私も嬉しかった。

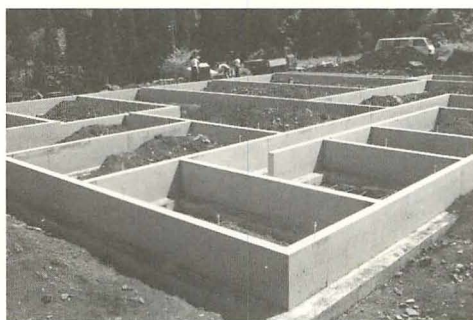
柳組による民家の解体工事。解体前に材料の一つ一つに、再組み立てのための番号をふる。



床掘部分に石灰で線を引く。基礎の全容が見えてきた。



見事な基礎ができあがった。とにかく頑丈な基礎だ。私たちはこれを「三百年基礎」と呼ぶことにした。



### 第三章 あぶらむの旅立ち



あぶらむの里での移築作業。だいぶ形が見えてきた。左側に見える基礎部分には新たに新築部分をつくる。



完成した「あぶらむの宿」の前で。



私が「いのちの電話」のボランティアをしていた時、先生は私達の勉強会のリーダーであった。当時、立教大学のチャプレンの職に在った先生が大学を辞めて飛騨高山へ行かれ、「あぶらむの宿」の建設に情熱を傾けておられることは知っていたが、あまりに遠くてお訪ねする折もないままになっていた。思い立って飛騨を訪ね何年ぶりかでお目にかかった時、日に焼けた頬に髭を生やし、作業衣に地下足袋姿の先生の変身ぶりに、目を瞠る思いであった。その時は急用で慌ただしく帰ってしまったが、今度は仔細あつて少しゆっくりさせて頂くつもりできている。

さて、次の日から私の「あぶらむの宿」での生活が始まった。私は先生の家泊めて頂いたが、宇津江の先生の家と山の宿屋とは三キロも離れているので、泊まり客があると材料を運んで賄うのである。加えて新しい宿屋も建築中とあつて、二足ならぬ三足の草鞋を履いての生活は容易ではなかった。その上、解体した民家の梁や柱などを使った残りの古材を燃やしたり、スーパーの一隅を借りて帽子を売っての資金作り、女子大生二〇人ほどのボランティアを迎える準備（これは殿方が楽しみにしていたようで、しばしば話題になった）それに、じゃが芋の収



穫や稲の消毒のような農作業も季を外せない。普通の家庭のほぼ三軒分はあろうかと思われる労働のシワ寄せは、どうしてもその家の主婦の肩にかかってくる。育さんはそれを明るくエネルギーギッシュにこなしてはおられたが、かなり無理をしているのではないかと気がかりであった。

建築現場へ茶菓子を運んだり、買い物に行ったり、時には豆の種を蒔いたりと殆ど一日中育さんと行動を共にしながら、人といふことのあまり好きではない私が、精神的に疲れないのが不思議であった。高山にいる間、少しの違和感もなくありのままの自分で過せたことを私はありがたいと思っている。

違和感と言えば、この三月から転勤で神戸に住んでいる長男が出張で名古屋まで来た時、用があつて逢いに行つたが、久しぶりの都会の雑踏や、ホテルのレストランの華やかな雰囲気の中で、なぜか自分を異邦人のように感じ、溶け込めなかつた。

翌日、宿へ帰るため高山本線に乗ると、ふるさとへ向かうような安らぎを覚えたのである。宿ではいつもの賑やかな食卓と笑顔が私の帰りを待っていてくれた。

炎天下、新しい宿屋は日一日と家らしくなつていった。屋根を葺き、トタンを張

って行く。その工程を目にするのは楽しかった。家の回りに石が配置されると一段と格調が高くなる。先生はその作業に精を出しておられたが、気にいらないとあの重い石を何度でも積み直す。凝り性というのか、その気持ちはよく判るのだが、それにしても目を三角にして祐太君を叱咤激励し汗まみれでウンボを操作する先生を見てみると、「ご苦労様デス」と言いたくなかった。

朝夕の気温がやや低くなつた或る朝、玄関の方が騒がしい。何事かと思つたら、蝮を持つて来たのだ。庭先で捉まえたとかで、山で仕事をする者はよく見ておかにゃいかんのご親切に持つて来たという。さらに「蝮は旨いぞお」と煽られて、じゃあ今晚料理するかと、ビニール袋のまま冷蔵庫へ入れたのには驚いた。私はその日、麦茶が服<sup>の</sup>みたくても冷蔵庫を開けられず、仕方なく水を飲んでいた。夕方、帰つてきた先生は朝の勢いはどこへやら、オイ、裕太やれよ、と言う。彼はニヤリと無言。さつさと自分の部屋へ行つてしまった。結局、蝮はもう一晚冷蔵庫に安置され、翌朝育さんが捨てに行った。橋の上から投げられる蝮をチラと見たがもう死んでいて、蝮騒動は一件落着した。

山の自然には蝮もいれば蛭もいる。飛騨へ行つたお陰で私は生まれて初めて蛭狩

りをした。蛍は方向指示灯を点滅させると仲間と勘違いして集まってくるのだと教えられて、気の毒な気がしたが、なるほど、林の中や近くの木で点々と光り初め、それが吸い寄せられるようにこちらへ流れてくる。思いもかけぬ幻想的な光りの飛行であった。スカートの中で光っているものもいて、エッチな奴だと笑われている。誰かのポケットに一つポツと光っている蛍が何ともいじらしい。七月末にまた行った時には、点滅する数が少なくて、山の夏は早くも盛りを過ぎたのであろうかと寂しかった。

蛍狩りの帰り、あぶらむの里の下の道にお化けが出た。体格のいい、朗らかなタチのお化けといえ、お判りであろうか……そう、育さんのお化けなのである。夜になっても車はかなりひんぱんに上がってくる。多分、四十八滝方面へ行くのである。その車のライトに向かって、彼女はいきなり白いエプロンをガバツと顔にかけ、「お化けエ……」と叫んだのだ。大きな長靴を履いたこのお化けを何と思ったか、車は無事通過して行った。彼女はライトが近付くたびに「お化けエ……」をくり返す。初めはゲラゲラ笑っていた私達も、遂に辟易して、いつとはなしに反対側へ逃げるように移動してしまった。一人残されたお化けがおかしく、

そして可愛かった。

「あぶらむの宿」の暖かさに甘えて、思わぬ長逗留をさせて頂いた私も、そろそろ本来の主婦業に戻らなくてはと思っていた矢先、突然の事故で先生が入院された。

建築現場の梁から落ち、下に石があって、肋骨を折ったのである。すぐに救急車で高山の病院へ運ばれ、絶対安静と言われた時には、これから先どうなるのかと思ったが、熱も出ず、水も溜まらなかったのは不幸中の幸いであった。

先生の病状も落着き、私も明日は帰るといふ日、育さんと高山の町を歩いた。よく晴れて日差しはきびしかったが、風は爽やかであった。八幡宮の傍の和風喫茶店へ入り、炉端でくつろいだ時、心がのびのびと解放されて何とも言えず愉快だった。

それは私のようにネクラの人間には、滅多に味わえぬたぐいの「たのしさ」であり、その時の心のありようを私はとても大切なものに思っている。それは同時に「あぶらむの宿」を大切に思うことでもある。宿という土壌あつての稔りだと思ふからである。

先生は「宿へ来た時はうちの家族です」とおっしゃってくださいますが、私もまた宿の存在を「心の実家」だと思っている。

今年には山の紅葉を見に行かれなかった。来年は是非行ってみたいものである。

一九九〇年十一月二日

### 竣工式レポート

### 「飛驒のめでた」で祝われた宴

鵜川貴子

十一月二四日に行われた、あぶらむの宿の竣工式に行って参りました。

外側から見たあぶらむの宿は、その堂々たる大きさ、白壁と黒い木のコントラストの美しさ、まわりの山や林と溶けあう様子など、どこをとっても素晴らしいものでした。

長い飛驒の歴史によって培われてきたこの建物以外にあぶらむの宿としてふさわしいものはあるまいとさえ思われました。

すっかりいい気持ちになって玄関から一歩中にはいると、土間というにはあまりに広い土間から、さらに広いお座敷から、廊下から、何から、作業途中のいろいろなものが置かれていました。うーん、間に合うのだろうか、という心配をしている暇もなく、そこにいる全員が働いているのです。三日前にトイレが、二日前に水道が、そして、前日の午後になってようやくお湯が使えるようになりました。

そしてボイラーのほか、階段、洗面所、トイレ、お風呂などが当日二四日の午前中に完成したのです。ギリギリとはいえ結局間に合わせるあぶらむにはいつもながら感嘆しますが、今回は大工さんや職人さんたちの力によるものだけに有難く、あぶらむを支える輪の広がりを感じました。中でも階段の取付と檜のお風呂は圧巻で、別の場所で組み立てられた階段を運び込んだ時、「白木ってこんなにきれいなんだ」と再認識するほど色も形も生まれたてのみずみずしさがあって、まるでオブジェのようでした。いざ取り付けという時は、出来上がっていく宿の姿をひとつひとつ確かめていくような気持ちで、大工さんの仕事を見せていただきました。今、何かができ上がる過程をこうやって丁寧に見ることのできる機会がないなあと思いつながら――。檜のお風呂の素晴らしさについては、是非皆さんにゆ



つくり浸かって味わっていただきたいと思います。

準備のもう一つの柱であるお料理の方は、育さんを中心に、味岡和子さん、野村のお母さん、洞さん、白石さんなどいつもあぶらむがお世話になっている奥様方の大奮闘と、岐阜からわざわざ腕を振るいに来て下さった本職の料理人、服部さんの六面八臂の活躍で、素晴らしい手作りの品々が並びました。オードブル、焼き豚、おさしみ、お赤飯、姫竹の子の煮物などなど、まさに、温かみあふれるご馳走の数々でした。

さて、ようやく準備も整い駐車場係と下足番が走り回る中、式に来て下さったのは、まずこの宿を建てるにあたってそれぞれの仕事を引受けて下さった、飛驒の大工さん、左官さん、職人さん方。いつもながら絶えず応援して下さいる川上国府町長はじめ国府や古川、高山の皆さん。そしてそのご家族。東京方面からは、あぶらむの会後援会代表の八代主教、事務局長の西田さん、甲藤翁率いる松戸教会の皆さん、飛驒一五〇キロを走った森川さん、立教大学の学生、およびそのOBたちでありました。総勢一〇〇余名の大会衆が、余裕で座った宿の広さをご想像下さい。老若男女、何の垣根もなく、ただあぶらむを支える者としてそこにいる



娑は、七福神と天使見習いたちの大宴会のようでした。

竣工式は洞さんの進行ですすめられ、まずはあぶらむの会代表の大郷先生のご挨拶。先生がお話になっているその間、台所では育さんが正座してじっと聞き入っていました。本当に、ここまで来ましたね、育さん。

そのあと八代主教より、「あぶらむ」の名前の由来をからめたお話がありました。それから、地元の皆さんを代表して川上町長からお祝いの言葉をいただきました。国府の皆さんにこの地をあぶらむに譲っていただいてから約四年。長かったとは思えません。いえ、正直言えば思った以上に早くこんな立派な宿が完成しました。それも、多くの人の理解と、理解した気持の現われがあったからです。この宿も、片町建築さん、柳組さん、洞邦宏さん、片町板金さん、長谷左官さん、シミ装飾さん、下形設備さん、渡辺電気さん、山口建具工芸さん方が、商売を越えた心意気で、素晴らしい技術を破格の費用で請負って下さったおかげです。式では、皆さんの気持にあぶらむなりのやり方でお応えしようと、写真のような記念板を宿に掲げました。この板には八代主教が聖水をふりかけて下さいました。

食前の祈りの後、いよいよ大宴会の始まりとして鏡開きが行われました。小槌を



建設に関わっていただいた方々に感謝を表した記念板

握るは、川上町長、大郷先生、八代  
主教、そしてあぶらむの会后援会事  
務局長で、日夜募金とあぶらむ債の  
領収書を手放さない西田さんの四人  
です。宇津江区長さんの音頭で乾杯  
した後は、ご馳走とお酒が入り乱れ、  
正統派の大饗宴への突入です。おな  
じみ相撲甚句あり、どどいつあり、  
興奮のあまりの停電あり。でも、こ  
れまでのどの宴会より素晴らしかつ  
たのは、宴の一番始めに唄われた祝  
い歌「飛驒のめでた」と呼ばれてい  
る歌です。最初に調子を取る独唱が  
あり、その後全員の大合唱になるの  
ですが、穏やかで明るい旋律、七〇

人も声が一つにそろい、土地の心を豊かに伝えてくれました。全員が背筋を伸ばして歌う姿に、東京勢は聞き惚れるばかりでした。聞けば、「飛驒のめでた」はその町によつて少しずつ異なり、こんなに近くとも今回歌つたのと高山市のはまた違ふそうです。それでもみんなその町々のバージョンを覚えていて歌えるのです。皆さんからいただいた山のようなお酒やお祝いと合わせて、この「飛驒のめでた」は心に残る贈り物になりました。そして、あぶらむからのお返しとして、切り絵作家の菅沼さんにデザインしていただいたあぶらむTシャツを皆さんにお持ち帰りいただきました。

大坪さんの音頭による三三七拍子の中締めの後も延々宴は続き、あぶらむの夜は更けていきました。あまりの熱気にあてられて、ちよつと涼みに外に出ると、星の明りで道が見えるほどの満天の空。東京のように弱々しい星ではありません。ここでは、星も、木も、川も、生命力旺盛です。それでいて誰もお互いを損なつたりしません。振り返れば宿は明々とまわりの闇を照らしながらも、林の中にしつとりと溶け込み、星の光も消さず、川の音も消さず、ただ暖かい人間の家としてそこにありました。ここでなら、傷ついたり疲れたりした人々が癒され、この

国府の地を第二、第三のふるさととしてまた旅立っていける、と自然に思えるものがありました。にぎやかな宴会の続く宿はたくさんの期待と可能性に満ちながらも、ゆつたりとたたずんでいました。

こうして旅人の宿「あぶらむの宿」が完成した。行く先知らずして東京を出てから四年目、一九九〇年一月二四日のことだった。

#### 愛楽園からの訪問団

「大郷さん、愛楽園の皆さんを代表してやって来ましたよ」と団長の糸数宝善さんがいった。一九九二年六月、愛楽園の有志によるあぶらむ訪問団の第一陣だった。できあがりつつあるこのあぶらむの里をいちばんに見てほしかったのは愛楽園の人たちだった。そんな私の気持ちを汲んでか、高齢と不自由さにもかかわらず、介護者を含め一八名の入園者が訪ねてくれた。

地元の人々や、この飛驒地に住む沖縄出身の人、そして愛楽園で世話になった卒業

生など五十数名が歓迎会に出席し、交歓のひとつ時をもった。百余年たった飛驒の古い民家に鳴り響いた三線の音と琉舞は、この世のものとは思えないほど美しかった。日本の長いハンセン病の歴史の中でも、このような光景はそんなにはないと思う。

とくに庄巻だったのは、愛楽園の皆さんによる、地元の老人ホーム「和光園」の慰問だった。あぶらむの宿を建ててくれた片町棟梁の奥さんが老人ホームで働いておられた関係で、ぜひ交流会をということになった。愛楽園の人たちにとって、これまで慰問されることはあっても、他人を慰問することなどありえなかった（許されなかったといったほうが正しいだろう）。本当に訪ねていいのだろうか、彼らは半信半疑だった。病気で両手両足を失った玉城豊吉さんが、「一日一日、皆さんから見れば、なアーんだと思われるようななさやかな目標をもってここまで生きてきました」といって「天さぐの花」を歌った。両足義足ながらも、大地にしっかりと立っているといった堂々とした彼の歌を聞いていたら、泣けてしかたなかった。ハンセン病を取りまく時代の変わり目をしっかりと感じたひと時だった。

## 五. 諸魂庵建設

現在、あぶらむの里には五つの建物が建っている。その外に炭焼き小屋や石釜パン小屋、車庫などが数棟建っている。小屋を除き大きな建物は、倉庫以外全て解体移築したものでありである。

話は前後するが宿建設の前に二棟の建物を移築した。一九八八年土地取得の最中、『食と緑の博覧会』が高山でも開かれた。数か月で終わった催し物、その年の暮れに使用された建物が競売にかけられた。腰痛の悪化で寝たきり状態だったが痛み止めの注射を打ち、サラシで固定して会場に向いた。競売はセリ方式ではなく、一斉入札で入札価格の高い人から落札していくという方式だった。巨大な建物などは引き取り手がなく、九九九九円というお遊び価格で落札されていた。しかし、六間×四間（二四坪八〇平方メートル）四間×三間（一二坪四〇平方メートル）などの建物は手



頃なため希望者が殺到した。そのころはあぶらむとしてもいちばん財政状況の厳しい時だった。お金はない、けれど建物は欲しい。高山の訓練校時代の建築科の平瀬先生の協力を得て、検討に検討を重ね、入札価格を坪当り一万一〇〇〇円とした。

二四坪の建物は四棟あった。いちばん高値で入札した人から渡されていく。一番札の入札価格は九二万円だった。私はその時点であきらめてしまった。私の入札価格は二六万四〇〇〇円だからである。三番札の人は四〇万円台だった。すっかりあきらめていた私は一瞬われとわが耳を疑った。

「四番札、あぶらむの会、一六万四〇〇〇円」といつているではないか！ 会場にはオオーというどよめきが起こった。同じ建物なのに九二万の人もいれば私のような価格の者もいる、いちばんびつくりしたのは私だった。

一二坪の建物は三棟、一番札は五〇万円台だった。私はすでに一棟入手してしまっていたのでまったく関心がなかった。「三番札、あぶらむの会、一三万二〇〇〇円」、会場はまたどよめいた。こまってしまったのは私のほう、お金もないのに二棟もいらぬ。一棟キャンセルしようと思った。だが待てよ、最高価格で落としたのならいざ知らず、どれもびつくりするような最低価格、これはきつと神様からのクリスマスプ



プレゼントと思い、お金もないのに二棟買うことにした。

今では一棟が木工所に、他の一棟はスタッフ・ハウスとなっている。どちらもしっかりとした作りで、自作でのあぶらむの里づくりには欠かすことのできない、大切な役割を担っている。これもまた不思議の一つだった。

このように振り返ってみれば、実にたくさんの不思議によってあぶらむの里はつくられてきた。いつしか私の心の中に、これは今この世にいる人たちだけの助けによるものではなく、この世での働きを終えて逝った人たちまでが、私たちを守り、導いてくれているのだという思いが深く根ざすようになっていった。その人たちを記念すべき館をつくろうと思った。宿は寝泊まりする生活の場、そしてもう一棟、静かに自己の内面と向かい合う黙想の場のような館が求められていた。私はその館を「諸魂庵」と名づけ、建設の機会をうかがっていた。

そんな時、前述した木俣神父が中国で逝去された。多くの方から寄せられたご厚志の一部が、あぶらむの会へ寄付された。また、四つ年下の甥の妻が四二歳で急逝した。ある日ぶらりと私を訪ねてきて、帰り際におみやげを忘れたのでといい残し紙袋を手

渡して帰っていった。甘栗かなにかかなアと思って開けてみたら札束だった。「諸魂庵」設設に向けての私の腹は決まった。

ところがあぶらむ大蔵大臣の女房は猛反対。あぶらむ債償還のための積立さえままならぬというのに、多額な建築費をどうするかと。ごもつともな話、けれどこの世を去った人があぶらむのために残していったお金、それを一〇倍にも二〇倍にもふくらませていくのが生きている私たちの役目ではないかと私は女房を説得した。こうしてまた、不確かさの中へ船出することとなった。

運とかタイミングとかいうものは恐いほど不思議なものだ。こちらの腹が決まるのを待っていたかのように、飛驒の名刹千光寺住職大下大圓さんがもらい手を探しているという古家情報をもってきてくれた。私はさっそく見に行った。平屋の背丈の低い家だった。物置として使われていたその家にはトラクターはじめ農機具や収穫されたジャガイモなどが雑然と置かれていた。家に入るなりハシゴを借りて天井裏をのぞいた。丸太の組み合わせが見たかったからである。古家を譲り受けるかどうか見きわめる時のポイントは、前述したように使用されている材の樹種や質、丸太の組み合わせとそのバランス、それらを総合してのその建物のもつ性格だと私は思っている。直感

的にこの建物はおもしろいものになると思った。

黙想の家「諸魂庵」となる家は、隣村丹生川村新張地区の岡田勲氏の旧宅である。一八〇年ほどたっているということを聞いて少々気遅れした。あぶらむが譲り受けないうと取り壊しになるということでぜひもらってもらいたいのことであった。私は譲りたたくことにした。婚約の記しとしてお酒五升を持参した。

建設に当たり、私の役割として、故人およびご遺族の気持ちを一〇倍にふくらまさないければならないという思いが強くなった。そのためには諸魂庵建設にあたっては自分らが親方として、可能な限り自分自身で建設しようと思った。また宿建設を通してたくさんの職人さんたちと懇意になり、そのプロ意識の強い職人さんたちが素人親方に協力してくれたこと、心よりありがたく嬉しく思っている。「諸魂庵建設は可能な限り自分で」、その第一歩は古家の解体と移築先での基礎づくりである。増築部分を加えて一〇間×八間（八〇坪、二六四平方メートル）の大きな家、基礎づくりは洞さんの指導であぶらむにいる者全員で取り組んだ。解体移築作業は宿同様、古川町の柳組にお願いした。専務で一級建築士の忍昭弘さんに建築上の相談から図面まで、何

から何までたくさんの協力をいただいた。また、庭師の川崎東介さんには、諸魂庵周辺の石積みや岩風呂づくりなど、すべてこれも無償で協力いただいた。

古家の解体には専門的知識が多々必要とされるが、古家を骨だけ（骸骨状態）までにするには、ある程度の知識があればできる。それにとっても体の汚れる作業であるので、そこは自分でやることにしている。壁をむしり、床をはぐり、屋根をはがせばよいわけだが、建物に傷をつけないように慎重な作業が要求される。また永年の間に積もった埃も一緒に舞い上がるのでたいへんな作業である。

解体作業中意外な発見があった。大黒柱から棟上げ式の際、檜の板に建築年月日や施主の名前等を記し、すすで変色しないよう板を二枚合わせにして柱に打ち付けるのである。棟札には「宝永元年申ノ年八月吉日」と墨黒々と書かれていた。宝永元年、一七〇四年である。もうすぐ三〇〇年祭を迎えようとしている。

基礎・解体移築、屋根板金、壁、電気工事をそれぞれの職人さんたちに直接お願いし、他の作業は土日の休みに来てくれる一人の大工とともに、一年半の歳月をかけて完成させた。作業の間中、沖縄での出来事はじめ、いろいろなことが思い起こされてきた。実に多くの人生の先輩たちによって自分が育てられてきたことを、強く強く実



諸魂庵(上)と諸魂庵の内部。



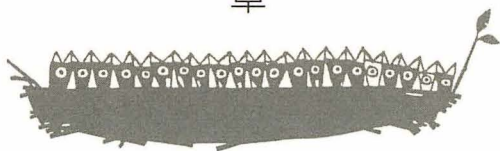


感させられた、貴重な日々だった。

一九九五年六月二四日、黙想の家「諸魂庵」が落成した。これまで私たちを支え、導いてくださった今は亡き人々へのせめてもの気持ちと思い、一人ひとりの名前を櫛の板に記したタブレットを捧げることにした。

「あぶらむの会、その理念と実現のため、多大なご支援、ご加禱を下さり、今はこの世の働きを終え、天にて憩う人々を記念し、その魂の平安を祈る。青木恵哉、徳田祐弼、大城平永、上間源光、佐次田カメ、木俣茂世……」、一人ひとりの名前を読みあげていたら、これまでのいろんなことが思い出されてきて、声がつまってしまった。

第四章



家族



## 一・結婚

こんな田舎生活をしたい、脱サラして木工をやりたい、私のところへそんな希望をもった人がよく訪ねてくる。一度限りの人生だから、心からそう思っているのならぜひやりなさいと私は煽る。すると踏み出せない理由があれこれと並び、最後は「現実生活があるから」というところに落ち着く。それを聞いていると、何か私には現実生活がないか、現実を無視して突っ走っているかに思われてくる。家族に負担をかけてきたことは認めるが、私にだって現実生活というものはある。夢への挑戦というのは現実生活とのせめぎあいでしょう。自分の中でその両者がせめぎあいつつも、あえて夢にむけて踏み出すかどうかが挑戦であり、可能性であると思う。

旅人の新たな出発点であってほしいと祈るあぶらむの里づくりという私なりの闘いの最中には、家族のことを考えることなどあまりなかった。しかし、こうして一段落

した今、静かに振り返ってみるに、家族には多大の負担を強いたように思う。下二人の子どもたちは小学校を五回も転校した。六年間で六つの学校を経験するなんて、私自身年取ったのか、今になって少々かわいそうなことをしたと思っている。しかし、戦いの最中にはそんなことなど思いもしなかった。こんな私と行動をともしにくれた家族を誇りに思っている。一緒に戦ってくれた戦士なのだから。

私たちの結婚も、あぶらむの里づくりのように行く先知らずのような結婚だった。

沖繩のハンセン病療養所で出会った「人生のよき旅人たち」の生きることへの誠実な姿を見せられていた私、多くの苦難の中にある彼らをして、そこまで雄々しく自己の生を生き抜く姿を目の当たりにして、彼らのその生を支える源泉としてのキリスト教信仰に触れ、私は牧師の道へと心のハンドルを切りはじめていた。

そして二六歳の時、神学校へ入学、その年の秋、急性胸炎で入院することになった。こともあろうにその入院中、「お見合ひしませんか」というとんでもない話が舞い込んできた。私はものごと断るといことができない性分なので、いわれるままに入院中の病院でお見合ひした。結婚して二〇数年、銀婚式も過ぎたというのに、わが女房いまだに、「あなたは私にプロポーズしていない、ズルイヨネ」という。

「お前は最高のプロポーズをもらったくせに……!」と反論する私。

私は男というものは女の人に買ってもらう存在だと思っている。「買う、買われる」なんて物騒な言葉かもしれないが、男は自分の生き方を含めて自分という人間を人生とともにしようとする人に買ってもらう。男は自分という人間を精一杯その人の前に店開きするだけ、買う買わないを決めるのは女の人と思っている。とくに私の場合、起伏の激しい人生が予想された。だからなおのこと、「こんな私でよかつたら」という気持ちがそんな思いにさせていたのかもしれない。その姿勢が「ずるい」といわれればしかたがないが、困難な道程みちのりが予想されるにもかかわらず、こんな私とともに歩もうという人は自分のすべてをかけて守らなければと思った。故郷富山からの旅立ちにはじまって沖繩を含めた今日までの歩みと道中で考えたことと、これから予想される道程を手短に話した。そんな私でよかつたら一緒にどうですかといった。

退院後二回目に会った時、彼女は一緒に歩いてくれるといった。そして半年後、神学生という修行の身でありながらという周囲の声もあったが結婚した。

結婚したてのいちばんの想い出は、女房の給料日だった。そのころは彼女が働き、私は学業のかたわら家事を担当した。給料日は駅へ迎えに行き、近くの赤ちょうちん

で一杯やるのが二人の唯一の楽しみだった。貸間を営んでいた女房の実家の四畳半一間、ケンカした時など階下の実家に帰ることなく、お互い顔も見たくないのでたがいがいいに寝ている、そんな私の足の側ですすり泣いていた。身にこたえる泣かれ方だった。こんなかたちで私たちの行く先知れずの結婚生活がスタートした。

## 二．子どもの誕生と成長

小学校へ入学したての次男坊がプリプリ怒ったような顔をして帰ってきた。理由を聞くと、「先生のほうがわかってないんだヨ。なのにボクがわかってないという顔をするんだから」。ことの次第はこうだった。

「先生は、あなたたち二人は双生児なの？ と聞いたから、僕はちがいますといったの。すると先生は、じゃ親戚なの？ と聞いたから、僕はちがいますといったの。そうしたら先生は変な顔をして、じゃー何なのといって、僕の顔を変な目で見たの。僕が何もわかってないっていう顔をして。僕たち二人は双生児でもないし、親戚でもないよね。兄妹だよね」

この二人が高校生になった時、また似たような問題がおこった。さすがその時は彼も大人になっていたのか、余裕をもつての顛末報告だった。「今日の保健体育の先生、

失礼だよね、あれはないヨ。母体の保護という話の中で、そういえば一年生に大郷という兄妹がいるが、ああいうことは母体によくないんだと、本人の僕がいる前でいんだよ。失礼しちゃうね」

わが家は男女二人ずつの四人の子もち、どういう理由か男女男女と順序よくつづいている。一番目から三番目までは一年半間隔の年子。この三人の年子（英語ではチェーン・ベビーとでもいうのだろうか）でパニックになっていたのに、何とその後一か月の間隔をおいて四番目の次女が誕生した。次男四月七日生まれ、次女翌年三月一六日生まれ、その事実を知った時、もう目の前は真っ暗だった。かくして下の二人はめでたく同級生となったのである。

四人の子どもたちが大きくなった今では、「お前が（次女）この世への誕生をあまりにも急ぐからこういうことになったんだぞ」と私。「お父さん、お母さん元気だったんだね」と次女。何ともはちゃめちやな親子会話です。

家族の宝物に一枚の写真と女房がつくった「叱られて」と題した粘土づくりの人形がある。子どもたちが小さかったころのわが家のできごとをよく表わしていて、私は

今も大切にしている。叱る時も真剣、遊ぶ時も真剣だった。前述したように東京を出てこの地にたどり着くまで五回もの転校を強いた。あぶらむの里建設中は、私と一緒に働いた。受験をかかえながらも、「受験勉強などは学校で済ませ、家に帰ったら親から学べ」といってはばからなかった私。塾などに行くこともなく家に帰っては家の手伝い、そんな四人の子どもたちもあぶらむの里づくりを立派に支えてくれた。

わが家の子どもたちは私に似てか、子どもの自我状態が強い。良きにつけ悪しきにつけ、子ども時代の面影を色濃くもちながら大人になっている。

長男は子どものころ、「神田のソクラテス」と呼ばれていた。機敏でいつも眉間にシワをよせ小難しい顔をしてちょこまかと歩きまわっていた。しかしご多聞にもれず長ずるにつれただの人となっていた。

彼にまつわるエピソードがおもしろい。四歳のころ母親とケンカして家出、その際カサと座布団と懐中電灯をもって出ていった。彼にとっては家出の際の三種の神器だったらしい。ひとしきり外で遊び気分が晴れたころ、何ごともなかったかのように帰ってきて、女房に、家出という彼にとってのちょっとした冒険をこと細かに報告していたという。また小学生のころ道に捨ててあったピンク本を見つけ、「誰だ、こんな





「家族の宝物」となっている写真（上）と、女房がつくった  
「叱られて」と題する人形。

ところにこんなものを捨てて、よくないだろう」と大声を出してサッカーボールのように足で蹴とばしながら、その際めくれあがるページをチラチラと見ていたという。その場面を想像するだけでもおもしろい。すべての面で知能犯だった。

長男が漫才という「つつこみ」ならば長女は「ボケ」役である。この二人が静かだといつもたいへんなことがおこっていた。台所でサラダ油を塗りたくっていたり、小麦粉を全身にまぶしていたり、被害者はいつも長女のほうだった。

長女の天然ボケは立派なもので、そのキーワードは「一度やってみたかった」である。次男の出産の時知人宅にあずけた。迎えに行ったら、家中のコンセントにガムテープがはられていた。どれだけ注意してもコンセントにフォークを突っ込むという。聞いてみたら「やってみたかったの」。わが家の男子用小便器には子どもたちのためウイスキーの木箱がおかれていた。それに乗って彼女も挑戦、理由は「一度やってみたかったの」。次男が腕を複雑骨折、宙ぶりにされた腕には、重石がつけられ、徐々に引きのばされていた。その痛みでメイメイ泣いていた次男が突然火がついたように悲鳴をあげた。見ると長女が重石のロープをチンチン電車の合図のようにツンツン引いていた。「やってみたかったの」にあきれてしまつて怒る気もなし。

沖縄では火災報知器のボタンを押して村中大騒ぎ。しかし、この時ばかりは「一度、やってみたかったの」は通用せず、女房は怒りの往復ビンタ。

またある日、女房が買い物から帰ってきたら、玄関の戸に貼り紙。「お母さんどろぼうが入るといけないのでカギをかけて行きます。カギは牛乳箱の中に入れておきます」。ハイハイ「苦労さん」といった感じでした。いつになっても無邪気、今の世では傷つくことも多いらしい。

エピソードの多い上二人に比べ下二人は、あのようになるまいという幼児決断があったのかどちらかというと生真面目である。

私の住んでいる地区はテレビ電波障害地域なので、映像は有線で配られる。有線放送に加入する費用もおしまれるような時代だったので、わが家ではテレビは見ることはなかった。そのかわり夕食後の団欒だんらんは遅くまでつづいた。経済的にも少し息をついたころ、たまにはナイターも見たいし、有線放送加入を提案した。すると次男に一喝された。

「お父さん、いつまでこうした家族団欒ができると思うの。あと二年もすればお兄ちゃんは家を出て行き、あとはバラバラになるだけだヨ。テレビなんか見ている時間

はないヨ」。

これには私も済みませんと頭を下げるしかなかった。

そんな彼の数少ないエピソードは「ビデオ事件」であった。当時、テレビのかわりに土曜日の夜家族全員でビデオを見た。『サウンド・オブ・ミュージック』や『屋根の上のバイオリン弾き』など、私の青春時代のをテープがすり切れるほど何べんも見た。おかげで英語のセリフを丸暗記したといっていた。

そんなある日次男がビデオテープを借りてきた。『実録 沖繩本土決戦』とあった。私が大学で働いていた時、半年ほどの休暇がもらえたので、自分がものを考えるようになった沖繩愛楽園の世界を子どもたちにも伝えたいと思って、一学期間だけ療養所のある屋我地島へ引っ越した。休日には入園者のオジーさん、オバーさんたちを訪ねたり、沖繩戦の戦跡地などを訪ね歩いた。そんな経験からか、彼は『実録 沖繩本土決戦』を借りてきた。私も「沖繩戦」の記録をビデオで長時間見るのははじめて、全員真剣な面もちで画面に見入った。ところが意外や意外、映し出された画面は東映のヤクザ映画、一同大爆笑。次男坊は自分がバカにされたと思ってプリプリ、「僕は真面目な気持ちで借りてきたのに。まぎらわしい名前をつけないでよネ！」と怒りはお

さまらなかつた。彼が真面目に怒れば怒るほど笑いは大きくなつた。誰に似てそんな生真面目な子なのでしょう。

次男と一か月違いで同級生の次女、三日坊主のところだけはしっかりと私に似てしまった。小学校二年生の時の「朝がお観察絵日記」がおもしろい。

五月二十七日、あさみたらあさがおのめがでてきた。うれしかった。(絵には葉も茎の部分も色がついている)

五月二十八日、あんまりかわんない。(葉の部分赤いボールペンで縁取りがしてある)

五月二十九日、ぼうが赤いくなつた。(エンピツだけの雑な絵)

五月三十日、ちよつと大きくなつたみたい。(さらに雑な絵)

五月三十一日、けがはえたみたい。(二筆描きのような絵)。

それ以降は新品のままの絵日記。結婚したいといったら相手の男性に見せて、これでもいいのかと迫ってやろうと思つてゐる。

## 校則問題

こんな子どもたちの中にも真剣なやりとりがあった。下二人が中学一年生、長女中学三年生、長男高校一年生の時だった。

そのころ中学校では男子は丸刈り、女子もオカッパ髪が校則で決められていた。上の二人は校則に従い、切っていた。しかし、下の二人はそんな校則の根拠を示せと私にいう。つくったのは学校だから学校へ行って聞いてこいといつぱねた私。納得でき返答がもらえなかったのか、彼ら二人は長髪のまま入学式にのぞんだからたいへん。その内容は、校則は校則だから、そして親のほうでも説得してほしいということだった。私はお断りした。

私たちの宿に子どもから高齢の方まで、実に幅広い年代の人がいらっしやる。多くの年齢層の人を見ていて、いつからか、子どもから大人への変わり目とは何だろうと考えるようになった。それは年齢で区切ることだけは間違っていると思う。



大学時代の卒業生たちが子どもを連れて訪ねてくれる。私にとっては孫のようなものなので、彼らを相手に遊ぶのが宿主なる私の仕事。そんな彼らを見てみるとよく走り回る。あぶらむの宿はそれなりの広さもあるのか、四〇畳ほどの室の中をぐるぐると走り回る。あきずに走り回る。そんな光景を見て気づいたことの一つに、「子どもというのは走り回るもの」ということである。走ることをやめたらそれはもう子どもではなく、大人の入口に立ちはじめた存在である。

そしてもう一つは、子どもというのは「なぜ」を問うものである。勘弁してほしいと思うほど子どもは「どうして、なぜ」を問う。そして子どものそのなせに返答するのが「大人」である。子どもたちのこの「なぜ」が彼らの関心を深め、知恵や知識を深めていくのだから、大人はそのなせに答える義務、責任があると思っている。

私の上二人の子どもたちは、それなりの思いはあったのだろうが校則に従った。しかし下の二人は校則の根拠「なぜ」を問うている。それは「教育」の問題として受け止めてやってほしい。煮るなり焼くなり、どうぞご自由に子どもたちと議論してくださいと私はいった。



長髪のまま学校へ通う二人は「自分たちのことは自分たちで決め、決めたことはしっかり守ろう」と生徒会委員に立候補し、校則改正運動にのり出した。周囲からの風当たりは相当強かつたらしいが、兄弟四人の真剣なやりあいがそんな最中に起こつた。

「お前たち二人が校則違反しているから私までもがいろいろいわれるんだ」

と、食後の団欒の時、突然長女がいい出した。顔には辛い気持ちにじんんでいた。一同黙つたままだった。その時長男が口を開いた。

「お前が今いったことはどんなことなのかわかつているのか」

長女は泣きながら、

「わかつてゐるヨ。だけどこの二人のためにいろいろいわれて、私までイジメられるんだ」

「俺は二人は偉いと思う。俺だつて中学に入る時、髪は切りたくなかつた。でも、校則に反対する勇気がなかつた。くやしかつたけれど従うしかなかつた。でも堂々と反対する二人は偉いと思う」

と長男。四人であれこれとやりあつてゐた。私たち二人は黙つて彼らのやりとりを見守るだけだった。もう子どもではないのだなァーと思つたら嬉しい気持ちとともに

寂しさもこみあげてきた。

そんな子どもたちも進学等で家を出て行った。かわいそうと思ったが部屋に余裕がなかったので、子ども部屋を別の用途に用いることにした。子どもたちのいなくなつた部屋を後片付けしていたら偶然にも「校則についてどう思うのか」という感想文が出てきた。入学してすぐに書かされた作文だった。二人で相談しあつて書いたのだから、中学一年生でこんなこと書けるのかと私は驚いた。

### 校則の考え方について

大郷 耕輔

何故髪の毛をさらなきやだめなのか。

学校の教育目標に「考える生徒」というのがあります。これは物事を自分で考え、その事の本質を見極められる人だと思えます。そして考えた結果が多くの人と違つてもそれらをつらぬき通す人だと思えます。こういう事を言葉にすると「自主的」「独立」「自由的」、こういう事が出来る人を「独立人」や「自由人」と言う

人だと思いません。

ぼくは頭髪の規則について考えるとどうしても守れなくなってしまいます。まず一つは、なぜ切らなきゃだめなのか、なぜ皆と同じにするのか。そういう所がおかしいと思いません。他にも自分の髪なんだから自由にしたいと思いません。自由な髪型とは、自分で考えた結果の物だと思いません。そして自分で自分を管理できる人は自由な髪型でいいと思いません。それなのに守れない人がいるからといって規則に入れるのは、生徒を管理するという楽なやり方だと思いません。先生達の中には今の僕達では信用できないという気持ちがあるかと思いません。だからといって校則で僕達を管理すると言うやり方では、いつまでも僕達の成長はないと思いません。それだからこそ、自分で自分の生活管理の出来る「考える生徒」が必要になると思います。

生徒の中に校則さえ守っていれば安全だと思っている人がいるし、校則を守っている人はいい人だと思っている人がいます。でも心の中は規則を守っていれば高まるのでしょうか。表面的に守っていても心の中ではかたにしているのでしょうか。校則か考えずに表面的に守っていた心には何なりません。

それより、この校則はどんな意味の物か考えそれがおかしいと思える方が心の勉強になると思います。

他にも規則を守っていれば安心で安全だと思っている人が多くいると思います。どういう風に安心で安全かと言うと、みんなと一緒になので、目立たないから先輩とかに何か言われない、みんなもやっているのだから安心だと思っている人が多いです。でもそれは本質を考えずに自分の安全だけ考えて行動している様に思えます。小学校の時、ジャージから私服に変わった時、ジャージでなきゃだめだと言っていた人達も自由になれば私服を着てくる人がいました。これは、学校の考えが変わったから自分も変えんと安心できないという事だと思えます。自由なんだからジャージでもいいのに私服をきなきゃだめだと思っているようでしたし、ジーパンが流行しだすとみんな買っただけで来ました。みんなが持っているんだから私も持つていないとこわいというのだらうと思えます。まだこれくらいだからいいけど、戦争の時の考えと根本的に似ていると思えます。上の人に従わないと自分は安全じゃないから従うという、相手の国の事を考えたりとか戦争の本質を考えずにみんなと一緒にの行動をとるのと似ています。次に、似てるような事だ

けど、なぜみんなを同一にしなければならぬかという事です。ただでさえ皆と一緒にじゃないと安心できない人がいるのに、みんなと一緒にする校則があると、それをただ守るだけになってしまうと思います。それに、同一にするという事は他の意見を排除する考え方だと思います。他の意見や考えをすてさせる事になります。だから、「自由」という考えと「同一」という考えはまるつきり反対の考えだと思っています。

そして「戦争」という、校則の事と根がすごく似ている事があると思います。上の人が決めた事に反対すると自分が大変な目にあってしまうので賛成してしまつたんだと思うけど、自分の国がどうなるか、相手の国がどうなるかを考えずに賛成してしまうのはその事の本質を考えていないからだと思います。本当に考えてそれが皆と反対の結果になつても、その考えをくずさない人こそが自由な人だし、独立できた人だと思っています。そしてこういう人がたくさんいれば、上の考えが間違つていても、こわくて賛成するんじゃないなくて、間違つてると主張し、戦争を防ぐ第一歩になると思うし、社会や学校をよくする物になつていくと思います。

「校則・きまり」について

大郷 友

校則には大事なものもあると思います。みんなで学校生活をおくっているのだから、一つにしなくてはならないものもあると思います。一人一人が我ままを言っていたら勉強などいろいろな事が進みません。人が集まるときまりができるんだと思います。そういうきまりがないと、学校生活がおもしろくないと思います。だけど頭髮をのばしたり、切ったりするのは自由だと思います。頭髮はわたしの体の一部です。わたしの物です。なぜ、わたしの頭髮を人に決められなくてはならないのでしょうか。自分の体の一部なのだから、自分で決める必要があると思います。

みんなは「きまりだから。」と言っていていやいや守っているけれど、きまりだから守るのではなく本質の所をよく考えなくてはならないのではないのでしょうか。

校則はいやと言う人はいるけれど主張はしません。文句などを言われるからきまりを守っておいた方が良いんじゃないかと思って、きまりを守っているのではな



いかと思います。上の方の人から言われた事は守っておかないと面倒なので守るのではとてもおかしな事になると思います。その例が戦争だと思います。上の方の人に「この村の人を全員殺せ。」と言われても人を殺したくない人は自分が殺されても人は殺さないとします。こういう人ばかりだったら戦争は大きくならなかったと思います。みんながきまりにさからわない方が良いと思っていたらすぐに大きな戦争がおこると思います。戦争と校則の頭髪の問題の根拠は同じだと思います。

なぜ頭髪を短くしなければならぬのでしょうか、疑問です。道德の時間にもこういう質問がありました。わたし達が頭髪を短くしなくてはならない根拠を教えてください。そして先生方はこのきまりの根拠を考えた事がありますか。わたしは考えてもわかりませんでした。みんなの授業を邪魔している訳ではありません。なぜいけないのかと考えた結果、生徒達を管理しているのではないかと思えました。頭髪のきまりがなければいろいろな髪型の人が出てくると思います。それはあたりまえの事だと思えます。それは一人一人、似合う髪型がちがうからです。学校に合わない髪型をしてくる人もいるかもしれません。だけどその人なりに考



えがあると思います。その考えを一つにしてしまうという事はいけない事だと思っています。国府中学校の教育目標は「自分で考えられる生徒」というものではありませんか。だけど考えなくても済んでしまいます。校則にそって行けば誰からも文句も言われませんし、面倒な事はありません。その人は表面的にはきまりを守っているけれども心は成長しないと思います。

なぜ、高校生になると急に頭髪をのぼすのでしょうか。のぼしたかったという考えがあったのなら中学生の時どうしてのぼさなかったのでしょうか。わたしの組で頭髪をのぼしたいという人が何人かいます。「どうしてのぼさなかったの。」と聞くと「校則やでのぼすところわい。」と言います。わたしは、自分が正しいと思つた事なのでやってみれば良いのに、と思いました。そしてその事に対して最後まで責任を取れば良いと思います。

小学生の時もこういう事がありました。小学校の卒業式の服装の事で何回も話し合いました。話し合いの最初の時ある人が「一人でも学生服を着てきます。」と言っていたのですが、みんなが私服が良いと言ったら、ころっと変わって当日は私服を着ていました。だけど私服が好きで着た人は、半分より少し多いぐらいで

した。その他の人は「私服が良い」という意見が多かったのでいやだったけれど、私服を着た、という感じでした。人の意見につられて賛成した人がいるなんて悲しい事だと思えます。多い方につくのは、ずるい事だと思えます。そして楽な事だと思えます。みんな一緒だから安心という考えはおかしいと思えます。大事な事はその物の根拠を知る事だと思えます。

私は嬉しかった。なぜなら、自分で決めたことは自分で責任をもてという、日ごろいい聞かせてきたことを実生活の中で表現したということもあるが、それよりも嬉しかったことは、沖繩での体験が彼らの中にしっかりと根付いていたように感じたからである。

沖繩でのある日、読谷村よみたんぞんのチビチリガマへ行った。戦争の最中たくさん村人がこの洞窟の中で殺されたり、自決したりした。その時、次男はどうしてそんな戦争に反対できなかったのかを私に問うた。反対したくても反対できなかった時代であったことを話してやった。すると、「おかしいことはおかしいということが戦争をふせぐことになるんだね」といった。その時は彼のその一言を何げなく聞いていた私だったが、

その言葉が彼らの中に根づき、彼らが直面した現実の中で行動としてはつきりと意志表示をしたことを知って私は嬉しかった。

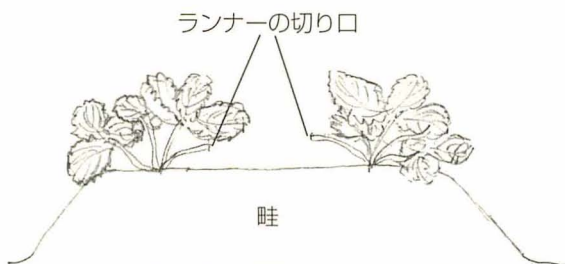
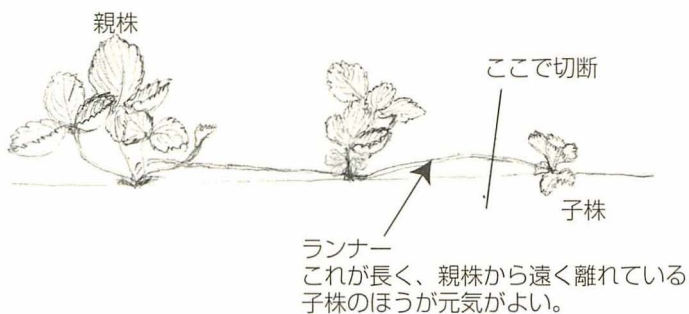
その後学校側も一緒に考え、彼らが二年生の三月一日、校則改正になり髪型は自由になった。

### 親離れ、子離れ

そんな子どもたちも進学等で四人とも次々に家を出ていった。頭ではわかっているも子どもたちがいなくなった現実には寂しいものがあった。そんな切ない気持ちの時、イチゴの定植作業があった。

ボランティアであぶらむの農業部長をしてくれた農業普及員の加藤正さんの指導でおこなわれた。

イチゴは実をつけその役割の終わった親株からランナー（動物でいうへその緒のようなもの）がのび、その先端に次代を担う子株がついている。このランナーを切断して元気のよい子株を苗として定植するのである。



イチゴは栄養が来た反対側に実をつける。  
 栄養はランナーを伝って親株から来ていた。  
 だから、ランナーの切り口を内側に向けて植え、  
 実が外側につくようにする。

「オーイ、ランナーが長ーくのびている奴を選ぶんだぞう。親株の側にしがみつくようにしている奴はよくない。親株から遠く離れている奴ほど元気な子株なのだ」

私はドキリとした。

次に採取した子株の定植である。一畦うねに二列にして植えていった。私たちは間隔を保ちながら後は適当に植えていったら、加藤さんはこういった。

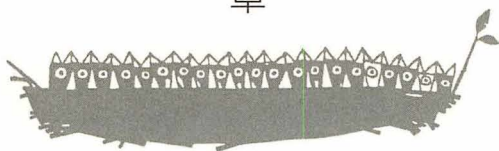
「イチゴの実が外側にできるように植えなさいヨ。内側にできると風通し悪くて実にはよくない。何々、イチゴの実がどこにできるか、それをどのようにして見分けるかって。それはネ、ホラ、このランナーの切り口、これは動物でいえばへその緒のようなもので親株から栄養をもらっている。イチゴは決ず栄養が来た反対方向に実をつける。親に背を向けて実をつけるのがイチゴなのだヨ。だからランナーの切り口を決ずお互い内側に向けて植えなさいヨ」

「イチゴは親に背を向けて実をつける」——こんな小さなイチゴの株でさえ親離れ、子離れという自然の摂理を知っているのだ。お前は人間ではないかと、自分にいいきかせている自分がいた。

小さなイチゴに教えられ、私もやっと子離れができたようである。



第五章



魂の世話



## 一・山にやって来たヨット

### 海という砂漠を体験すること

一九九六年十一月、あぶらむの里にヨットがやって来た。マストを倒したまま一年間あまり、「あぶらむ」と名付けられた外洋クルーザー・ヨットが海とはほど遠い山の中に、静かに舫ちやわれていた。山に来てヨットなどほど遠い存在となった私、処分しようと思ったが、私を一人の旅人として育ててくれた恩ある存在だったので、彼女の名前の付いたあぶらむの里で保存してやることにした。

牧師の分際でヨットなどと、周囲からお叱りをうけることは十分に覚悟のうえで購入した船。女房の退職金、結婚時に親からもらった生活資金、そして借金と、家中のお金をかき集めて購入した。



山にやって来たヨット「あぶらむ号」

宗教というものはその発生した風土と密接な関係があると思っている。キリスト教の風土は砂漠、砂漠という環境の中から聖書の世界を考え、感じてみたかった。しかし、日本には砂漠はなく、ふと考えたら海がそれにあたることに気づき、海という砂漠の世界から自分が拠って立つ聖書の世界を見つめてみようと思いつ、ヨットをはじめることにした。

手始めに他人の船に乗せてもらってからにすればよかったのだが、船酔いなどですぐ頓挫してしまう自分の性格を知っていたため、まず船を買ってしまうという形で退路を断った。一級小型船舶免許は取ったものの、座学で得た船長免許と

実際の操船はまったく別物であった。海に出るといふことは、そこで起こるすべてのことに対して自分で決断し、自分で責任を取るといふことである。習っていません、知らなかった等々、一切の言い訳の許されない世界である。私は海に出ることが恐かった。特に強風時のことを思うだけで恐くて恐くて、港の周辺をウロチョロするだけだった。「あぶらむさん、この辺をウロウロするだけなら、そんな大きな船は必要ないヨ」といって他の船から冷やかされる始末だった。

ヨットは知力、気力、体力、胆力のすべてが問われる世界である。そのどれもが未熟だった私は海に出ることが恐かった。

一つの集団を預かる長として、常に最悪の状況を想定して、それに備えるということとは責任者としてあたりまえのことなのだが、他方それは臆病と紙一重の心理状態でもある。最悪の状況を考えた時不安が先立つと最低の心理状況となる。

ある時、伊豆大島の波浮の港へ入った。ある程度風の強い日で、いく分、恐い思いもしながらどうにかたどり着いた。しかし、帰る段になると恐くてどうしても船を出すことができなかった。そんな時は入ってくるすべての情報がネガティブ（否定的）にしか受け取れなかった。確かその時の天気予報は、「太平洋沿岸では風強く」とい

う内容だったが、たったそれだけで気持ちが悪くなってしまっている自分はビビってしまった。太平洋沿岸といっても広いのである。実際その時船を出したが、不安が先立っていた私にとっては、風も波も強風時の状態に思え、港へ引き返してしまった。結局、船を港に預け、東海汽船で帰った。みじめで情けない船長さんだった。

常に最悪の状況を想定し、それに備えるということと、不安、臆病ということとは別物である。私の場合は知力、気力、体力、胆力の未熟さからくる不安、臆病だった。これを克服しなければ、ことははじまらない。しかし、これはヨットの世界だけのことではなく、自分の人生にも連なることと私は思った。

海には道はない、標識もない。東京湾の一部など船舶の出入りの激しいところは別として、一般的にはどこでも自由に走れる。自分が船を走らせるところ、そこが道である。車道のように渋滞も何もない。とにかく自由に走れる。しかし、自由ほど大きな自己責任が課せられている世界はないことも海は教えてくれる。私の不安の原因の一つは責任能力の欠如にあったといえる。何ごとにも腹が据わっていなかった。

不安要因の今一つは、ゴルフにたとえれば私の「ホール・イン・ワン主義」にあった。自分が海図の上で計測した通り、目的とする港の真ん前に出ないと不安でしかた

なかった。しかし、相手は風や波、潮流などで常に変化している海、自分の計算通りにいくとは限らない。とくに航海距離が長くなればなるほど自分の計算と実際とのズレが大きくなっていく。そこには常にこまかい位置修正が求められる。

陸上の道路と違って海上から目的地の港を視認することはなかなか難しい。ましてやはじめに入港する港となればなおさらのことである。『船舶用簡易港湾案内』という本をたよりに、目的とする港に入って行くのだが、その港の近くに来ていのかどうかさえわからない自分にとって、新しい港に向かうということは大きな不安材料だった。

そんな心理状態の時、私は司馬遼太郎の『菜の花の沖』を読んで一つの大きな気づきと勇気を与えられた。

江戸時代ごろまでの船乗りたちは、海図らしきものもなく、方向を示すコンパスもなく大きな航海をした。彼らの航海の仕方は、私流に言えば点から面そして次の点を絞り込むということである。それはどういうことかといえば、たとえば伊豆の下田港に入るとすれば、出港する港（点）からまず伊豆半島という大きな面に船をあてる。そして次にその半島をたどりながら下田港という目的とする点に船をもっていくので

ある。最初目指すところが伊豆半島という大きな面であれば迷うこともなく、不安も少ない。それに較べて私のそれは、点から点というピン・ポイント方式のやり方だった。いい換えれば「ホール・イン・ワン——一発完全主義」だった。これでは不安は増すことはあれ、なくなることはない。

当時、千葉の木更津を母港としていた私、太平洋岸にあつては東に行けば大海原に出て行くことになるが、西に舵を切れれば日本列島のどこかにぶつかるのである。そこから入る港を探せばいい。そう思っただけでそれまでの不安はだいぶ薄らいでいった。この「点から面」への思考の変化は、その後いろいろな面において自分の世界を広くしていった。

船の航海範囲を広げる上で、私にもう一つの課題が残っていた。それは夜間の操船だった。昼間でも不安だった私、夜間などもつての外だった。夜間航行ができないというだけで、航海範囲はおのずと限定されてしまう。この課題を克服しない限り、いつまでも港周辺でのチョロチョロ航行から卒業できず、ヨット仲間からの冷やかしも終わらない。

そんな時、独学でヨット操船をおぼえていた私を何かと助けてくれていた鈴木博士



さんが「ナイト・クルージング」（夜間航行）を恐れていた私に一つのアドバイスを与えてくれた。

「大郷さん、深夜三時ごろに船を出してみなさい。誰でも夜の海は恐いですヨ。とくに東京湾はね。しかし、一時間だけその恐さに耐えなさい。四時も過ぎれば夜が明けてきますから。そして、一時間の我慢ができたら、出航時間を少しずつ早めていきなさい」

いわれてみればしごくあたり前のことなのだが、何ごとにおいても一発完全主義のようところがあつた私、彼のこの一言がまた私の世界を広く、変化のあるものにしていってくれた。

### 鳥羽港への航海

一九八五年夏、これまでの集大成として三重県の鳥羽港までの航海を計画した。一日目、深夜〇時に木更津を出港し、朝方伊豆大島波浮の港へ入港、一泊して最後の準備。二日目、七時に波浮港出港、一二時ごろ伊豆半島石廊崎をかわし、一八時、御前



崎を通過、夜間航行に入った。

弓のような形をしている遠州灘、どの船も最短距離を走るものだから、航行するところは同じ場所となる。どうして広い海で衝突事故など起きるのだろうかと思議でならなかったが、理由は簡単なことだった。海に浮かべれば二六フィートのヨットなど木の葉のようなもの、波間に入れば相手船からは見えもしないだろう。見張りにはクルー全員、全神経を集中した。

私の計算では深夜〇時ごろに浜松の灯台の灯りを視認できるはずだった。しかし深夜二時を過ぎても何も見えない。御前崎と伊良湖岬を結ぶ線上のどこかにいるのだろうが、その線上のどこにいいのか、まったくわからなくなった。

以前の自分だったらパニックに近い状態になっていただろうが、そのころは少しは成長していたのか、ある程度不安に耐えられるようになっていた。

海に出ていちばん恐いことの一つに、「ロスト・ポジジョン」(Lost position) Ⅱ 現在地喪失」がある(GPSが発達した今日では、もう死語かもしれないが)。海図上A点からB点へ向かうとしよう。しかし前述したように船は不動の陸道を行くのと違い、風や波、潮流によって常に影響を受け、海図上の事前予定位置とは異なっていく。そ

のため、常に自分の現在位置を測定し、目的とする地点に向けての針路を修正する必要がある。なのに自分の現在位置が確認できないとなると、ことは重大である。とくにそのようなことが起こるのは時化しけの時、「現在地喪失」は容易にパニックとなる。それゆえに、昔の船乗りたちは航海をする時、自分の現在地を教え、示してくれる岬や山を「カムイ（神）」と呼んだと司馬遼太郎はいつている。自分の現在位置を確認する相手は動いたりするような相対的なものであつてはならない。不動なもの、絶対的なものでなくてはならない。岬にしろ山にしろ、不動なるもの絶対なるものを「カムイ（神）」とした。海の民も砂漠の民も同じであることを身体で知った。

午前三時、右手前方の暗闇の中に、かすかに一つ光るものが見えた。必死に探し求めていた浜松の灯台の光だった。海図の上でやっと二つの方位点が変わった！ 現在の位置が確認できたのである。はるか彼方に見える灯台の光は、私たちの足元のすみずみまで照らすような光ではなく、見えるか見えないかのようなかすかな光だったが、しっかりと確かに私たちの現在位置を教え、示してくれた。「私は世の光である」ということは、このようなささやかな小さな光であることを実感した。

しかし、それからがお笑いだった。鳥羽港の位置確認には三島由紀夫の『潮騒』しおさいの

舞台となった神島の近くにある菅島すがの確認が必要だった。夜が明けるとそこらじゅう島だらけ、どれが菅島か、はじめての者にとっては確認のしようがなかった。そこで私ははずかしながらそこで漁をしていた漁船に近づき、「すみませーん。菅島はどこですか」と大声でたずねた。海の上で他人ひとに道をたずねたのである。するとその漁師さん、「それだヨ」といつて真ん前の島を指さした。菅島の真横に来ていたのである。「どうだ、俺のナビゲーションの技術は」といつて胸をはってみたが、クルーたちは海の上で道を聞くなんて前代未聞といつて笑い転げていた。こうしてはじめての遠乗り航海は無事に鳥羽港へ入港となったのである。

私があえてこのようなことを書いたのは、ヨットとの出会いが私をして、未知なるものに向かつて旅する力を養い育ててくれたからである。

人生はしばしば航海にたとえられる。私も船をかじった者の一人として、確かにそうだと思う。未知なる世界に向けての旅立ち、その不安を克服する何かをヨットは私に教えてくれたと思う。何よりも未知なるものに向かう気力、胆力を養い育ててくれたと思う。

私を育ててくれたそんな大切な彼女を処分することはできなかつた。「あぶらむの里」という彼女の故郷に置いてやろうと思つた。かくしてヨットが山にやって来たのである。しかしヨットは山には似合わない、海がいちばん似合う。

「大郷さん、あぶらむ号を海に浮かべてやりましょう」という友人の寺田龍郎さんの協力で、あぶらむ号は私の生まれ育つた神通川の流れ込む富山湾で余生を送ることとなつた。

二. 立ちはだかるということ

あぶらむの宿にはいろんな人がいろんなかたちで滞在される。週末を利用しての個人や家族、グループ旅行。地元の看護学校の研修や高校の野外総合学習、そしてコース・グループの合宿や教会キャンプ、またガンなどの病気の末期でこの世での最後の旅として数日間私たちと過ごされる方など、ここを利用される人の目的はさまざまである。

そしてまたここには、一、二週間から一年間ほど、家族同様に生活する長期滞在者と呼ばれる人たちがいる。はっきりと数を数えたことはないが、四〇〇五〇名はくだらないと思う（ボランティアとして一定期間私たちを助けてくれる人は除いて）。ヤクザの下部組織から逃げ出してきた少年、暴走族でバリバリやっていた元気な少年、ファミコン以外には目が輝かないという少年、社会適応できず家に閉じこもりがちで

親に暴力をはたらく青年、拒食過食の摂食障害に悩む人など、抱えている問題はさまざまである。

私はこれまで、そんな彼らに何か共通するものがないか、自分なりに注意を払ってきた。しかし、特別な共通点を見出すことはできなかった。私たちの方針として、長期共同生活希望の打診があれば、必ず親子で一度ここを訪ねてもらうことにしている。いわば「お見合い」するのである。二、三日間、私たちのありのままの生活を見てもらい、そして必ず帰ってもらう。たとえ沖縄や北海道からであろうと、一度帰ってもらう。ここでの生活を自分自身で決めてほしいからである。なかにはせっかく遠路はるばる来たのだからと、親が強引に子どもさんを置いていこうとするようなこともある。しかしそこからは良いものは生まれないことを話し、帰ってもらう。私たちにも生活があり、その生活の中に家族の一員として迎えるわけだから、最低限度自分の決断をもってここに来てほしいからである。

ここでの生活の前にはまず親子で来ていただき、二、三日生活をともにするというやり方の中で、共通点として一つ見えてきたものがある。

それは、その子にとってここ一番という大切な時に、親が何もいわないということ



である。そしてこれに関連してもう一ついえることは、子どもが小さい時はけっこう厳しく、時には体罰も加えるが、子どもとの体力が逆転しだすと何もいわなくなってしまうという男親の存在である。

私が大学で牧師として働いていた時、その働きを指し示すキーワードとなったギリシャ語の「パイディア」——魂の世話——という言葉をもう少し詳しくみてみたい。

一般的に「教育」と訳される「パイディア」は、他に薰陶、躡、訓練などとともに懲戒、こらしめの意味がある。一つの言葉の成り立ちをみると、その国の人々のものの考え方がわかるので興味深い。教育としての「パイディア」は、打つ、叩く、なぐる、蹴飛ばす、斬りつけるといった意味をもつ「パイオー」を母語としている。

また関連語に、子ども、少年と訳される「パイス」があり、その「パイス」が動詞として用いられると「鞭打つ」という意味になる。古代ギリシャの人々にとって教育とは、子どもを鞭で打ち叩いてでも、親や大人の考えに従わせようとする事だったのだろうか。このように書けば体罰肯定論者がわが意を得たりとなるが、それは私の本意ではない。魂の世話としての「パイディア」が、暴力的意味合いをもつ「パイオ



「」から派生しているということは、私にとって実に興味深い。

私はパイディア（教育）の母語、叩く、なぐるという意味をもっているこの「パイオー」を、「立ちはだかり」、「立ちはだかる」という言葉をもつて表現することになっている。教育とは、ここ一番という時の相手への「立ちはだかり」なのである。換言すれば、ここ一番の選択を誤れば、あるいはルーズにすれば、その人の人生、人格に根底から歪みが生ずるという時に、全身全霊をもつて物申すことである。それはいのちがけの行為である。

一九七九〜八六年、私はフィリピンの山岳州サガダ村を中心に、もう一つのワールド・プログラムをもっていた。その周辺の村の男衆は朝から酒やタバコ、おしゃべりにふけており、あまり仕事をしている姿は見うけられなかった。きつい労働は女性の手に負っていた。最初のころ、そんな光景に違和感をおぼえた私だった。しかしある時、私は一つのこと気づいた。山岳州はイゴロット族が中心となってできあがっているが、第二次大戦前までは、同じイゴロット族でありながら村が異なるだけで争いごととなった。戦ではお互い相手の首を切った。

村では祭りや祝い事、遠来の客をもてなす時、「ガンサ」というドラのようなもの

を叩き、踊り明かすのである。そして、そのガンサがたくさんある村ほど、力のある村なのである。

私たちが村へおじゃますると必ずこのガンサを叩き歓迎の宴となった。ある時、村の長老格の人がおもしろがって、「ファーザー大郷、お前はこのグループのボスであるからこれをおちなさい」と一つのガンサを私にもたせた。何とそのガンサの持ち手には人間のアゴ骨が用いられていた。首狩り時代、敵の首をはねた時、その記念にアゴ骨を用いてガンサを一つ作ったという。したがって、たくさんのガンサを有している村は、戦闘いくさの強い村、実力ある村なのである。

今から五〇年ほど前まではヘッド・ハンターだった彼ら、いやそんなに遠くまでさかのぼらなくても、私が彼らの村に通っていたころは隣接しているカリンガ族などまだそのような行為をしていた。彼ら村人の遺伝子の中には、まだしっかりと戦闘事が組み込まれているのである。男の役割とはここ一番、戦闘という時に、敵から家族や村を守ること。いざ有事という時に命がけで戦うことである。それ以外はどうでもいい、ここ一番という時だけ命がけでその役割を果たせば、あとは朝から酒を飲んでいようとどうでもいいのである。私は彼らのそんな姿を見ていて、男の役割というもの

を教えられたように思った。

私は少し極端な例をもち出したかもしれないが、しかし、男の役割というのは時代を超えて共通しているものがあると思う。それはここ一番という時、自己の全存在をかけてしっかりと相手の前に「立ちはだかる」ことである。とくに子どもの場合には親子なり大人なりのしっかりとした立ちほだかりを経験することによって、人としてやらなければならないこと、やってはいけないことを一つ一つ学習していくのではないだろうか。

### 真剣な魂の投げかけ

ある夏、私が結婚式の司式をした一人のOBが訪ねてきた。子どもの気持ち荒れていて、学校にも行かず、何よりも喫煙が激しく困っているという。一夏、あぶらむの里で生活させてもらえないだろうかということだった。二人の結婚式の司式者として式を司ったということであれば、私にも少なからず責任の一端があるので、いまだ

会ったことのない彼の息子を預かることにした。夫婦で息子をここまで送ってきたが、子どものほうはなぜこんなところで生活しなければならぬのかという感じだった。私は事前に本人に一度ここへ来てもらい、本人の意志でここでの生活を決めるといういつものルールを守らなかつたことを悔やんだが、もう後には引けなかつた。

高校二年生で私が見上げるような身長、いきがって自分を大きく大きく見せようとしているのか、親に対して「オイ、てめエー、うるせー」などともない暴言をはきまくっていたが、両親とも黙っていた。私は両親と本人の前で、ここは無理ではない場所ではないので、自分の意に反しているのならば何もここで生活する必要がないことを告げ、本人の意志を確認した。彼はただらとした生活を立て直したのでここでの生活を希望するといったので、彼を受け入れることにした。

翌朝五時ごろ外に出てみると、親子してスパスパとうまそうにタバコの煙をふかしていた。実に不思議な光景だった。子どもの喫煙が激しく困るといつておきながら、「何だそれは」と思った。「子どもがうるさいもので」と男親は頭を掻いていた。家族の中が見えた一瞬だった。

他人様の子どもを預かるということは真剣な業である。三食面倒を見ておればよい

といったたぐいのものではない。お互いの人格と人格のぶつかりあいの場がここでの生活であり、他人様の子どもを預かることだと思つてゐる。私は彼と約束をすることにした。ここにいる間はいかなる場所であろうとも絶対に喫煙はしないということを、彼を受け入れる条件としたのである。彼はそれを守ると約束した。

夏は薪づくりのシーズン。あぶらむの里のあるこの飛驒地区は冬が厳しく、そして長い。積雪が多く、気温はマイナス一五度まで下がることもある。そんな長く厳しい冬を暖め、楽しい気持ちにさせてくれるのが薪ストーブである。薪の全身をつつむよくななんともいえぬ柔らかい暖かさは、冬の間私たちの気持ちをしっかりと支えてくれる。だから私たちの薪づくりに注ぐ情熱とエネルギーは、経験したことのない人には多分わからないと思う。

彼も一緒に薪づくりに汗を流した。一・六メートルに切ったナラの丸太を林の中から運搬車まで担ぎ出す、重労働である。丸太を身体から離すと重くなるので、ピツタリと身体にくつつけるようにと、重い丸太を運ぶコツを伝授するが、身体は大きくなって筋肉がついていないのか、彼はすぐにへ口へ口になりギブアップしてしまった。そんな彼、食事が終わると皆と団欒だんらんすることもなく、すぐに席を立ってどこかへ消えて

いった。食後の一服だろうとは思っていたが、黙っていた。

そんなある日の午後、ハプニングが起こった。午後の作業開始は一時半、私はペーローダー（タイヤショベルカー）のエンジンをかけて彼を待っていた。このペーローダー、冬は除雪、夏場は丸太などの運搬車として大活躍、ここでの生活に欠かすことのできない大切なものである。とくに冬場はマイナス一〇度前後の屋外で仕事をするので、しつかりとしたキャビンがついている。運転者のほかに二人ほど入れるような小さなキャビン、彼が入ってきたとたん狭い室内にタバコの臭いが充満した。

「オイ、タバコは吸わないと約束したぞ」

「やってないヨ」

「お前、約束したということはどういうことかわかっているのか」

「吸ってねえよ俺は……。うるせえなア、タバコぐらいで。いちいちガタガタいうなア!! 俺たちの中では誰でもやってんだヨ、タバコなんか。テメーみたいな奴にガタガタいわれたくねえーヨ!」

今流の言葉でいえば、彼は「キレた」のである。次の瞬間私は彼の頬にピンタをはった。そして高さ一メートルあまりの運転台から彼を地面へ突き落とした。そして私



も飛び降り、もう一発ビンタをくらわした。

「お前なんかにテメーよばわりされる筋合いはない！」

私は一人の大人として、そんな彼の言動を許すことができなかつた。その後、手こそ出さなかつたがものすごい剣幕でまくしたてた私、彼は大きな図体を小さくして怯えたようにしていた。

そんな彼が帰る日、両親が迎えに来た。外の日だまりの中、テーブルを囲み四人が話し合った。私は両親に対してすべてのことをありのままに話した。あの時、もつと別のやり方があつたとは思ふ。しかし、私の身体があのようなかたちで反応してしまつた。私にはどうしても許せなかつたこと、もしあの時私が黙れば、彼はそれで世間に通用するのだと学習してしまふだろう。「立ちはだかる」、その立ちはだかり方に問題があるといわれればその指摘を私は甘受するが、その一瞬私の身体はそう反応してしまつたのだ。それはあのような立ちはだかりしか、あの時私にはできなかつたといふことである。

話し合いの中、彼は私に対しては乱暴な言葉を使うことはなかつたが、テレか見栄か、両親に対してはいまだ乱暴な言葉使いをしていた。私はいく度か父親の顔を見た。



親子関係において一つの正念場のように思えた。もう私の出る幕ではない。親子間でやるべき時なのだ。一言「もっと真剣に向かえ」とか何か、その子の前に父親としてしっかりと立ちはだかる何かを期待していた。しかし、父親のほうはヘラヘラとした言葉を重ね、子どもと正面から向き合おうとはしなかった。

とその時だった。それまで涙をため何かをこらえるようにして黙っていた母親が、突然全身全霊をもつて子どもにぶつかっていった。

「もう我慢できない！ 私はやだ、くやしい！ これまでの苦労の結果がこれだったかと思うと、私はくやしい。昭和〇年、七月〇日〇時〇分、私はあなたを産んだ。授かった生命を私は自分のすべてをもつて守り育ててきた。確かにいたらなかったことも多々あったと思うが、私は私なりに私のすべてをもつてお前を育ててきた。その結果がこのような姿かと思うと、私はくやしい！」

そして母親はこれまでのありつたけの思いを子どもにぶつけた。親のこれほどまでに真剣な姿を見るのははじめてだったのか、彼は青ざめた顔で身動き一つせず、黙って聞いていた。私は涙が流れてしかたがなかった。見事なまでの「立ちはだかり」だった。

その後その子とは会うこともないが、年賀状に「子どもも元気になっています」とあのを見るたびに安堵し、同時にあの時の母親の体当たりの光景を思い出す。このような親がいる限り、子供はきっと自分の足でしっかりと歩んでいけると私は信じている。そして「立ちはだかり」とは真剣な魂の投げかけであることを教えられた。

## 父の思い出

私の父親は「カミナリ父親<sup>オヤジ</sup>」だった。まずビンタが飛んできて、次にバカヤローというゴロゴロがついてくる。身体の大きな人だったのでビンタの威力もケタ外れだった。曲がったことの大嫌いな人、私の人生で最初に私の前に立ちはだかってくれた人である。人の道にはずれるようなことをしようものなら、もう赤鬼のように私の前に仁王立ちとなった。そんな父親との間に笑い話のようなこともあった。

小学校四年生の時だったと思うが、音楽の時間、「今日は自分の好きな歌を歌いなさい」と先生がいった。当時は皆内気、誰も歌おうとはしなかった。いい出した先生も困ったような顔をしていたので、私は先生を助けようと手をあげた。「ハイ、では

大郷君」。私は元気よく歌った。「あなたのリードで島田もゆれる チークダンスのなやましき 乱れる裾ははずかし嬉し……」。誰でも知っている歌と思っていたら、皆ポカンとしていた。先生は知っていたのかびっくりしていた。気分よく家に帰ってきたら、玄関口に赤鬼と化したオヤジ。ビンタの次に「今日は学校で何をやってきたか!」。何をやってきたかといわれても思いあたるものは何もなく、あえて探せば音楽の時間に元気よく歌ったぐらい。なんで怒られるのかさっぱりわからなかった。

川魚料理を生業としていたわが家、市長や知事、大会社の社長さんたちがよく来ていた。そんな社会的に地位ある大人が、手拍子よろしく大声で歌っている歌だから、きつといい歌なのだろうと思っていた。小学生の私には「チーク・ダンスのなやましき」や「乱れる裾ははずかし嬉し」という女性心理など、何のことか知る由もなかった。学校からの連絡で父も困ったのだろうが、とりあえず「バカヤロー」というしかなかったのだろう。以来「芸者ワルツ」はすっかり私の愛唱歌となってしまった。

そんな父、私が高校生になった日からビンタどころか一言も小言などいうことはなかった。気持ち悪いくらいだった。父がいわないかわりに母親があれこれと小言をいっただ。そんな母を父が叱った。

「博はいつまでも子供ではない。いちいちうるさくいうな！」  
本当に驚きだった。

結婚し長男が生まれた時、父にそれとなく聞いてみた。曰く、

「子育ての勝負は、子どもが一五〜一六歳まで（それまでどれだけ親としての生き方や価値観などを子どもに伝え得たかということであろう）。それ以降、あーだ、こーだというのは自分の至らなさを世間に向かって公言するようなものだ。そうだろうが」

はい、まったくその通りです。一児の親となっていた私、父のその言葉が心に沁み  
た。

また、こんなこともあった。忘れもしない大学受験浪人中の一月一日、模擬試験を終え重い足取りで帰路についた。新宿駅は晴れ着姿の若者で溢れていた。どの顔にも笑いが満ち、希望に夢ふくらんでいるようだった。その日は自分も成人式、本来ならば私の顔にも彼らと同様喜びが溢れているはずなのに、どのように人生を生きていけばよいかわからず、大学合格などあり得ないような惨めな状態だった。そのあまりものコントラストに、私は泣きながら両親に手紙を書いたことを今もはっきりと憶え

ている。

そんな私に父は、

「あなたの手紙の通り、若いころの明日はどんな人でも真暗であると思います。：磨けば磨くほど光ります。若い時は二度とないから命をかけて励むこと、後はスムーズに進みます。親たちも兄姉もあなたが大人になることを見守っているから、何ら心おきなく勉強さえすればよいと思います」

私は父のこの言葉に励まされ支えられて、あの暗かった不安定な青春時代を乗り切ったように思う。ここ一番という時、このようなかたちで私をしっかりと支えてくれた。

立ちはだかりを受け止める力

「立ちはだかり」は何も私の父親のような言動、対応だけではないと思う。愛樂園の人たちの生きる姿も、私には大きな「立ちはだかり」だった。彼らは問うことも、激しく糺すこともしなかったが、病を負いながらも淡々と生きるその姿をもって、私

を激しく打ち、立ちはだかってくれた。それはいつしか、私の人生旅路の「一里塚」となっていた。

遠州灘の沖で、夜間自分の現在地が確認できなくなった時、遙か彼方で小さく光ってくれた浜松の灯台のように、私が旅としての人生に迷った時、私の現在地を確認し、進むべき方向を無言のうちに指し示してくれる私の人生旅路の一里塚だった。人生旅路の中でこのような道標をもち得ることほど心強いことはないと思う。迷えば、またそこに戻ればいいのだから。

この人生旅路の道標となる「立ちはだかり」は「人」だけではない。時代や環境、そして運命とよばれるものなど、さまざまなものが私たちの前に立ちはだかって、私たちの道標となっていく。だから私たちは、さまざまなかたちで私たち一人一人に訪れてくるそれらの立ちはだかりに背を向けるのではなく、私を教え導くものとして、しっかりと真正面で受け止めていきたいと思う。沖縄の戦跡地とそこでの会話、ここ一番という時に息子に体当たりしていた母親、戦争という時代のめぐりあわせに直面した人、病を負い運命に翻弄されていた人、さまざまなかたちの「立ちはだかり」

があり、その立ちはだかりをしっかりと受け止めながら生きてきた人々がいる。各々の人生におけるこの「立ちはだかり」をどのように受け止めるのか、人生の大きな分かれ目になるように思う。

そして私は一人の親として、そして大人として、また教師と呼ばれる者として、ここ一番という時、相手の前にしっかりと立ちはだかり、人格と人格をぶつけあってきたかと思っている。



### 三・旅人の宿

サム・リフレッシュメント

訊ねられて返答に困ることの一つに私の職業がある。あれこれと説明するわけにも  
いかないので、私は「宿屋の主人」ということにしている。すると人は決まって、  
「ああ、民宿ですか」という。そうですね、「旅人の宿」というのもキザなので私はモ  
ゴモゴと口ごもってしまう。

疲れた身体を少し休め、新たな力を得て再び己が人生旅路に出て行く。大上段にふ  
りかぶった大きな力ではなく、ささやかな、ちよつとした力でもいい——そんな力、  
気づきを提供できる旅人の宿をと、私は願っている。

先年、イギリスを旅していて一つ気づかされたことがあった。私はあぶらむの会の

経済を支える一つとして、教会家具を創っている。私は聖公会（英国国教会）の牧師だったので、一度イギリスの教会家具を直接自分の目で見てみたいと思っていた。特別あてもなく、列車で旅しながら気に入った町で降り、適当に教会を訪ね歩いていった。列車に車内販売があるのはいずこも同じだった。しかし、「富山名産鱒寿司はいかがですか。飛騨名物朴寿司弁当はいかがですか」——こんな日本の売り子に対して、イギリスの売り子は「サム・リフレッシュメント」(Some refreshments) という言葉一つだった。たまには「おせんにキャラメル、チョコレート、飲み物はいかがですか」といわないかと耳を大きくしていたが、どこへ行ってもそしてどの売り子も「サム・リフレッシュメント」だけだった。「軽食」、「ちよつと元氣回復」といった意味、それは一杯のコーヒーであり、ビスケットのかけらかもしれない。フルコースの食事でないことだけは確かであった。しかし、そのささやかなものが旅の疲れを取り払ってくれ、新しい力を注いで次の旅に押し出してくれるのである。なぜかこの言葉は私にとって新鮮に聞こえた。私が目指している宿も、この「サム・リフレッシュメント」だと思った（ちなみに駅構内の「売店」は「リフレッシュメント」(refreshment)と書かれていた。旅に対する彼らの哲学を見たように思った）。

旅人の宿としてのあぶらむでは、一体どのようなプログラムが用意されているのかと訊ねられる。これも私にとつては困った質問で、プログラムなど一切何もない。あるとすればせいぜい夕食を一緒に食べながらおしゃべりするだけである。そのおしゃべりも聴き役に徹する時もあれば、訊ねられるままに私のことを話す時もある。しかし、それよりもその日そこに居合わせたお客さん（旅人）同士が気持ちよく自由に話し合えるように心を配る。なぜなら旅人同士のほうが、私以上に旅路の情報を豊かに交わし合い、お互い励まし合えることをいく度も見てきたからである。

### 旅情豊かな旅人たち

私の知人で、「さくら道国際ネーチャー・ラン二五〇キロメートル」（名古屋―金沢）を三六時間以内で二度も完走したSさんがいる。乳ガンの手術を受けた彼女が二五〇キロメートルの距離を走り抜くその姿は、彼女を知る多くの人に大きな大きな勇気と感動を与えてくれた。

その彼女があぶらむの宿を訪ねてきてくれた時、たまたま一緒になったご婦人がい

た。めっぼうお酒が強く、飲めば陽気になるSさん、沈みがちなそのご婦人と対極をなしていた。どんな話のきっかけかは知らないが、二人はいつのまにか乳ガン談義を交わしていた。そのご婦人も同じ病気を患っていた。病気による喪失感そして不安。前向きに生きようと思ってもそうなれないことの苦しみを訴えるそのご婦人をしつかりと受け止めているSさん。死の淵からはいあがってきた彼女だからこそできることだった。病気などしたこともない私は、ただ黙して二人の会話を聞いているだけ。そのご婦人、こんな勇氣づけはなかったと明るい顔で語っていた。旅人の宿には旅人同士の出会いで、こんなハプニングも起こるのです。それが旅人の宿の宿屋たるところだと思っっている。

その昔、「この地球の上に、天の川のような美しい花の星座をつくりたい。花を見る心が一つになって、人々が仲よく暮らせるように」——そんな思いと願いをもって佐藤良二という人が、自らが乗務していた名金線バス（名古屋—金沢間）の沿線に二〇〇〇本あまりの桜の木を植え、志半ばで病に倒れた。彼のその志を受け、桜の植栽と二五〇キロメートルを走るウルトラ・マラソンが催されている。太平洋から日本海まで不眠不休で走り抜くSさんの姿を想像しながら、彼女が自己とどう向かい合っ

きたのか、「人生のよき旅人」の彼女の姿をお伝えしたい。

生きること、走ること——乳ガンから再起して——

死ぬことだけを考えて生きた五年間

一三年前、乳ガンを自覚した時、正直言って「安堵」な気持ちでした。その二年前に離婚し、「愛情」の意味を疑い、そのはかなさに絶望し、ただ生きていただけの私は、そこで人生にピリオドを打てると思ったのです。経済的にも行き詰まっていた。逃げて早く楽になりました。逃げ出したかったです。でも、子供たちはどうなるの？ 私一人を頼っている子供たち。誰が子供たちを育ててゆくのか？」一方で湧き上がるそんな心の叫びに、私は耳をふさぎました。乳ガン切除手術、入院という事態は、家計をますます追い詰めました。そして私は、手術してもなお生きてゆかねばならない自分を呪い、生きてゆくことの苛酷さをこの身体と心にしっかり受け止めました。歯を食いしばっても食いしばれないものをこの身体に受け止めました。

それから、当然のことながら乳ガンが「再発」することを前提に生きる日々が始まりました。しかし再発する前に、子供たちを自立した人間に育て上げなければならぬ……。一朝一夕に「一個の人間」が形成されるはずのないことを百も承知で、しかしそれでも子供たちを自立させるため、私は日々の生活の中で何も手を出さず、遠くから見ているだけの親を、病弱で何もできない親を演じたのです。同時に自分の身辺の整理にも心を配り、自然に、ごく自然に友人たちから遠ざかりました。自分が消えることになった時、悲しむ人を一人でも少なくなりましたからです。

そして転職。それからの私は、今まで入院していたことはもちろん、「乳ガン」という言葉も決して口にしませんでした。同情されたくなく、仕事上でも特別扱いはされなくなりましたからです。

身長一六〇センチの身体にバスト九〇センチ、ウエスト六五センチ、ヒップ九三センチというスタイルを堂々と誇示しました。裸にならない限り、九〇センチのバストの下が「パッド」だなんて決してわからないことだし、「パッド」を入れるのなら、小さい頃から憧れていた「大きいおっぱい」にしたかったです。奇

しくも、乳房を失ってから表面だけでも夢に近づいたわけです。

夕方、仕事を終えて家に帰ると、身に着けている衣服を一秒も早く脱ぎ捨てます。朝は何でもない傷跡が、午後からは我慢できない痛みとなって「いい女」を演じている私に襲いかかるのです。夏、男性がステテコ姿で「よくぞ男に生まれけり」なんて涼しげにしている気持ちが心から理解できません。

消えることだけ考えて生きてきた五年間。「不老会」や「アイバンク」に連絡をとり、登録しました。私が消えた後の子供たちの養育・教育費は、私の生命保険が効力を発揮するはずです。この五年間の間に、子供たちは高校生と中学生になりました。私が今消えても大丈夫と思えるほど、たくましく育っています。何もすることはありません。すべて計算通りに運ばれています。でも、ひとつだけ、計算外のことには気づきました。

——私、まだ生きている。もう何もすることがないのに、私、まだ生きている。

自分のために時間を使う

きれいさっぱりしてしまった自分の身辺。この状態を意識してつくってきたはず



なのに、あまりの完璧さに、自分ながら感心してしまいました。

一時は、自分なりに努力して得た洋裁や着付けの技術を、一人でもいいから他人に伝えて、自分の受けた恩を一つでも世の中に返してから消えたいと願っていました。が、それも時代遅れの技術であることをこの五年の間に教えられました。今の社会では、一人で着物を着られなくっても、また洋服一枚縫うことができなくっても、何ら不都合は生じないのです。お金がすべてを解決してくれるのです。だから、自分のために時間を使おう。自分のために残された時間を精一杯生きてみよう。そう決心しました。

一日三〇分のランニングタイムが一カ月後に一時間、一年後には一時間三〇分になりました。

一九八四年十一月。伊吹山ジョギング大会一〇キロの部。初めての大会参加というのに、私は、伊吹山の地形をまったく知らず、コースを見て驚きました。それまで平坦な堤防上の道路しか経験したことのない私の足です。自分の無知が情けなくなりました。山をかけ登っていったランナーたちを「人間じゃない、人間の足じゃない！」と心のなかで繰り返しながら、頂上のゴールに向かって滋賀と岐

阜の県境をただひたすら歩きました。

大会関係者の方々には迷惑をかけてしまいました。この時、非常に多くのことを教えられ、参加して本当によかったと思いました。大勢の人たちが「健康」に目を向け、楽しんで走っている。走っている人たちが個々の走友会をつくり、それらの人に向けて月刊誌が発行されている……。

大会への参加は徐々に増えましたが、自分のまわりに「友」を置くことにはまだ抵抗がありました。しばらくは自分の殻から抜け出すことができず、「淋しいラナー」が続いていました。

そのうち、大会に参加するたびに出会う女性たちに心を許すようになり、自然に会話に加わるようになりました。現在はかつてないほどの走友に囲まれ、また全国にいる走友たちは、それぞれに私の生活に潤いをもたらせてくれます。

欲を捨てて健康ランニングへ

「走り」の中に「欲」が見え始めたのと、走友ができ始めたのと同時ではなかったかと思っています。私の中の「負けず嫌い」が強く作用し始めたのです。

一九八九年四月、浜名湖一周五二キロのウルトラマラソンに参加、目標を四時間半にセットしました。三九キロのエイドステーションまで計算通りです。予定通りのゴールを疑いませんでした。が、四〇キロ過ぎて胸の傷口が動き始めたのです。

——乳ガンを忘れたのか！ この傷口を忘れていい気になるんじゃない！  
確かに、傷口がそう言ったように思えました。

残りの一二キロは、欲を出した醜さ、愚かさへの反省の二時間になりました。

その後、傷口の痛みは消えず、もう走れないと思いつつも毎日のランニング一〇キロは続けていたのです。しかし、やがて仕事にも支障が始めました。完全にノックアウト。無理をするのはやめよう、走ってはいけないんだ……。

鉛のかたまりが傷口にはりついたような、重く、苦しい、淋しい日々が続きました。走れない、走れない……！

そして、ついに最後のランニングと決めて、今まで走ってきた一番長いコースをゆっくりと走り始めました。公園を抜け、一八キロほど走った時です。

——うーん、まさか？ 大きく息が吸える！ 平常呼吸ができる！ 傷も痛くな

い！

飛びました。この身体が大きく浮きました。そうです、飛んだのです。鉛のかたまりが落ちたのです。家までの五キロが天国へ続いているように思えました。

ゆつくり、長く走り、走っている時を十分楽しもう。私の健康ランニングの始まりです。乳ガンの傷跡も私の一部。それがようやくわかりました。そして、ランニングを始めた時の自分、つまり初心に返ることができたのです。走り初めて四年、遠回りをしました。

苦い思いをしたあの浜名湖一周五二キロのウルトラマラソンも、健康ランニングに切り替えた一年後には、楽しみながら楽にゴールできました。サロマ湖一〇〇キロマラソンも、ゴールしたくない、もっと走りたいという気持ちで一時間走りを楽しみました。

参加した大会で印象に残っているものに、諏訪湖一周マラソン（二六・七キロ）があります。

一九八九年九月、第一回大会で、もの珍しさも手伝ってか、コースの沿道は人でいっぱいです。最初、まわりの人につられて走ってしまい、途中で息抜きをした

いと思ったのですが、沿道の声援が途切れることなく続くものですから、ゴールまでがんばってしまいました。結果は、年代別で三六位です。

ゴール後、地元企業の協賛で参加者に抽選でプレゼントがあるというので、くじ運、男運に見放されている私でも、かすかな期待を抱いて待っていました。いよいよ目玉商品のホノルルマラソン招待の抽選が始まりました。男性の方は、二度もくじを引き直し、三度目の正直で当選者が決まりました。では、女性はどんな人が幸運を引き当てたのだろうか、舞台がよく見える位置に移動した時です。ゲストの伊藤国光さんが引き当てたゼッケンは、なんと私のものでした。思わず飛び上がって喜んでしまいました。

生きるために生きる

諏訪湖マラソンの一週間後、長男の卒業式がありました。商船専門学校のため、卒業式は九月に行われるのです。前日、息子と二人で鳥羽港の見える山間のホテルに宿を取りました。入学式以来でした。あれから五年半の月日が流れたのです。——母さんのガンが再発したら、その時は学校あきらめて一人で生きる道を探し

てよ。母さんを恨まないでね。

早朝、ホテルの周囲を走っていると、息子が入学した時のことが思い出され、涙が止まりませんでした。

卒業式当日、この息子は、何もできなかった母親に大きなプレゼントをくれました。船舶最優秀賞（一年間の航海実習の結果、最優秀者に贈られる）を授与されたのです。涙腺がゆるみっぱなしの一日でした。

今、私、気づきました。スーツにハイヒールで一生懸命「いい女」を演じていた私はいつの間にかいなくなり、代わりにジーパンにランニングシューズで過ごしている自分に気づいたのです。仕事上でも、外見だけの「いい女」は必要なくなつたのです。スタイルもバスト九〇センチはもうやめました。胸パッドも時々置き忘れるようになりました。飾る必要のない、肩ひじ張って生きる必要のない生活を手に入れたのです。

大会参加のたびにいただくゼッケンも、昔とった杵づかとやらでウエアやズボンに仕上げました。ビニール製のゼッケンはスポーツバッグにと、捨てるものは何一つありません。

日本史の大好きな私は、日本全国どこへかけても、その時代と、その時生きていた人たちの息吹を感じる事ができます。幸いなことに、大会は至るところで開催されているので、子供たちが二人とも社会人になった今、日本史をもっと勉強して日本史とランニングの旅を合わせて、全国の大会に参加してみたいと思っています。大きな夢です。

人間、「何のために生きるのか」ではなく「生きる」ことがすべてであることも、最近ようやく感じとったことでした。

〔私の健康マラソン記〕ランナーズ・ブックより転載させていただきました

### 立ち止まること

あぶらむの宿を訪れる人に、もし私が忠告めいたことをいうとすれば、「しっかりと悩みなさい」と「しっかりと立ち止まりなさい」というこの二言だと思う。前者は青木先生の「痛み経て」の受け売りと、これまで出会った多くの「人生のよき旅人」たちからの教えであり、後者は私の実感である。



子どものころ私の父は、「いかなる時も一、二、三」と危険に陥った時、三つ数えるだけの余裕をもつようと、非常時における心構えをくどいほど口にした。「ああ、またはじまった」という気持ちで聞いていた私だったが、父のその言葉が私のどこかで根づいていたのか、その言葉のおかげで四、五回命拾いをした。ある時などネパールの山中で足をすべらせ激流に押し流された。落ちた瞬間、「ありゃ？」といって自分がその危機の中にいることを他人事のように突き放していた。そのたった一瞬間に冷静さを取り戻し、この状況の中でどうすべきかものすごいスピードで考えていた。他人事のように突き放す瞬間がなかったら私はパニックに陥り、命を落としていたと思う。

人生の危機の中でしっかりと立ち止まるということとは、すごく勇気のいることだと思ふ。それでさえ不安な自分、よろめきながらもそれなりに走りつづけることによつて安定が保たれるという心理はよくわかる。しかし、私からいえば、それなりに走りつづけるところに問題の所在が見えなくなる原因があるということである。ものはついでではないが、悩んだなら悩んだついでにしっかりと悩み、人生旅路で立ち止まらざるを得なかったのならしっかりと立ち止まったほうが、問題解決の、結果的には

早道だと思う。そして旅人が立ち止まるその場を提供していくのが「宿屋」だと思っている。

しかし、生産性を重視する日本の社会はこの「立ち止まり」という一見非生産的の行為を認めることができない。そしてその「立ち止まり」を積極的に支援している私たちの役割など、あまり理解してもらえない。

たとえば、私たちが表現している宿は、自動車のギアのニュートラル・ゾーン（中立）にたとえることができると思う。自分の人生、ローがいいのかトップがいいのか、これまではその位置で走ってきたがどこか不具合が生じてきた。

そして現在のポジションから次に移る時、ギアを必ず中立に入れる。そして新しい位置に向かうのである。この一時たたずむ場所が大切なのである。

しかし、私たちは立ち止まることを恐れる。そして駆動していないと社会は評価しない。そのために身を守る手段として、それなりの「走りつづけ現象」が起こっているように私には思われる。

実は私たちの悩みもこの辺にある。私たちの働きの一つに、旅の途上で道に迷ったり悩んだりした人との長期共同生活がある。不登校生、高校中退者、親との確執に悩む者、拒食・過食の摂食障害者、自殺未遂などさまざまである。私たちから見れば、その人は何らかの理由で旅の途上で立ち止まらざるを得なかった人なのである。

あぶらむの里というこの空間の中で、田畑を耕し、台所に立ち、山に入って木を切り、長い冬に備えて薪をつくり、夕食の後はテレビのかわりにたくさんおしゃべりをし、時には宿を訪ねた人たちと心を交わす。そんなありふれた一般的な光景の中に、旅の途上で立ち止まらざるを得なかった人たちが何かに気づき、何かを得て、また自分の人生旅路に旅立っていくのである。それはあまりにも一般的で普通であるために理解されることが時として困難である。われわれの社会で受け入れられるのは、たとえばそれが不登校者専門施設であったり、摂食障害者の治療専門施設とか、○○施設的発想のものでしかない。同じ問題をかかえた人だけを集めてということであれば、それは一種の隔離的なものであり、どこか不自然であるといわざるを得ない。

しかし、○○の施設の発想のほうがその働きがよく見えて理解されやすい。そしてそれはこの世的には一つのギアポジションに入っていてしっかりと駆動していること

になる。しかし、それで本当に問題が解決するのだろうか。

とくにいろいろな意味や分野において境目が混沌としてきている時代の中で、何らかの理由で立ち止まらざるを得なかった人に簡単にレットルを貼り、同じ傾向にある人のみを集めてというやり方、それでほんとうに人は新たな力を得ていくことができるのか、私には疑問である。もつと自然体であつてよいのではないだろうか。

「しっかりと立ち止まる」ことの大切さを、あぶらむの長期滞在者がいろんなかたちで教えてくれる。K君もその一人だった。つてを頼つてここへやって来た彼、最初見た時は目も眉もつり上がり、額にはソリが入り狼のような顔をしていた。私の年齢になればいやでも額に自然のソリが入るのに思いながらも、今はそうして突つ張ることしかできない彼から出発するしかなかった。このK君、顔のわりには気はやさしく、体力的にはやや非力だった。薪用の木を切つたりそれを割つたりする作業など、最初はすぐに音をあげていた。お互いに体をしごき、汗を流し、敷地を流れる沢水を飲みながら一服するその一時がたまらなくいい。固く閉ざされていたものが自然とほぐれるのか、ポツリポツリと心の奥にあるものが出てくる。二人にとってかけがえの

ない一時である。

そんな彼が「あぶらむ通信」に手記を寄せてくれた。青少年の揺れ動く心の理解とともに、しっかりと「立ち止まること」と、その立ち止まりを支える「普通の環境」の大切さを、彼は語ってくれているように私は思う。

### あぶらむの里体験談『一生一度の我人生』

K君（一八歳）

ぼくが、大郷先生と初めて出会ったのは、昨年のも二月でした。まだそのころは、地元でも有名な暴走愚連隊に入隊していました。そもそも、ぼくの人生をちがう道に行かせたのも暴走族のせいだと思っています。

ぼくが暴走族に入隊をしているころは、他の暴走族との喧嘩や、他の暴走族の人間をさらって、顔が無くなるぐらいになぐったり色々ありました。そんなある日、ぼくは私立高校へ転入しました。

初めは「ようしがんばるぞ!」と思い元気に登校して行きました。でも、一步学校を出るとやっぱり暴走族に入隊しているというので皆が一步さがってしまい、

近所の人も目の色が変わっているのがわかりました。

そして、私立高校の先生にも暴走族に入隊しているのがわかってしまい、きゆうに先生の目の色も変わったのがわかりました。それからというものの、先生はやたらほくにきびしく、なぜこんなに変わるのだろうとぼくは思いました。しだいにぼくもその態度にがまんができず、毎日のように先生と喧嘩をしていました。

ぼくは思いました。なぜ大人は、子供の悪い所があっただけで、それをどのように直して成長させてやらないのか？ どうして一緒にあって考えてやらないのか？ どうして、一緒に話し合わないのか？ そう思いました。

でもぼくは学校が好きでした。冬休みの日、ぼくは謹慎をうけてました。その間レポート二〇〇枚近く宿題として出されました。ぼくは、一生懸命がんばって全部のレポートをやりました。そして三学期の前半に両親とぼくが相談室に呼ばれ、学年主任と担任がいました。

そこではつきりとぼくは言われました。

「学校にこなくていい」

と。ぼくは頭の中が真っ白になりました。今までがんばったのに、レポート二〇〇



○枚やったのになぜだ。

そしてほくは、頭に血がのほり言いたい事を全部言つて帰りました。その後は、もうメチャクチャ、先生とやり合つたり、学校に行かなかつたりして、やりたい事をいっぱいやりました。

そして数日後、両親が校長先生の所へ行き話をしてみればそのような事は言つてない、そんな事があるわけがないと言われ、それを聞きほくは、ますます頭に血がのほりました。

そんな時に、あぶらむの里に行きました。でもやっぱり自分では、その事が頭の中にあり、帰つてから先輩達の卒業式に単車で校内中を爆走しました。

その後、学校も千葉県の学校に転入させられ、でもけつきよく同じで、その学校も続きませんでした。

そして六月ごろもう一回あぶらむの里に一二日間ぐらい、生活を立て直しに自分が心の中で行きたいと思ひ行きました。

そして、あぶらむの里で色々仕事をして、その仕事の中で自分の心の中に何かが変わつて行くのをかんじました。



そんなある日、あぶらむの里に色々な人々が来ていて、その中で自分の思っている事を聞いてもらいました。皆さんぼくの話をしんげんに聞いてくれて、何かぼくの心の中を全てうちあけてスッキリした気分になりました。そして次の日からなぜか、頭の中が軽くなった気分でした。ぼくは、大人への考えが少し変わり、ぼくも大人になったら自分の経験した事を話してあげたいです。

そして帰る日になって、突然ニュースが入ってきました。ぼくの小学校からの友達で、同じ暴走愚連隊に入隊していた友達が殺害されたと聞きました。新聞、テレビで全国に知らされぼくは何も言えませんでした。

ぼくは、一生一度しかない我人生をあぶらむの里で生まれ変わり、あぶらむの里から旅立ち、そして二度と同じ事をしないように心に決めました。

私たちの「あぶらむの宿」を訪ねてくるいろんな人たちと話をし、心を通わせているうちに自分の気持ちがあんだという。人生旅路で迷ったらしっかりと立ち止まる、そんな旅人を受け止めることのできる「旅人の宿」がもっともっと多くなることを願っている今日このごろである。

## 四・旅の伴侶

### 独り言の名人

あぶらむの会創設、その出発はこの世的にはまったく無一物からの出発だった。見知らぬ土地で当てもなく、資金など何もなかった。そんな中でただ一つあったのは、「自分は一人ぼっちではない」という説明しようのない不思議な気持ちと安堵感だった。

確かにいつもともにいてくれた家族や友人、知人の存在は大きかった。しかし、私が「誰かが共にいてくれる」と実感していた相手は、そのような目で見て、手で触れて実感できるような存在ではなかった。もっと漠としたものでありながら、強く実感できる存在だった。

愛楽園に通いつづけて三十数年間、その間いつも考えつづけていたことは、多くの苦難や苦悩にもかかわらず、彼らをしてここまで耐え、強く生かshめていく力の源泉は一体何なのだろうかということだった。残念ながらその問いへの答は今ももち合わせてはいない。しかし、彼らは「独り言の名人だった」という光景が、私に勇氣と氣づきを与えてくれている。

佐次田カメさん、一九七九年、八四歳で逝去された。私が大学生だったころこのオバーにとつてもかわいがられた。一九六八年、私をはじめ沖繩を訪ねたころは、食べるものは十分とはいえなかった。とくに夏場は葉ものなどほとんどなく、具のないみそ汁にカズラ（サツマイモの葉）が一枚そのままのかたちで浮かんでいた。春には豚のエサとなっていたのを思うと、私には少々シヨックだった。慣れぬ沖繩の暑さとひもじさの中で夏バテ状態だった私に、いつもあれこれとご馳走をつくってくれた。その当時は食べられることの喜びだけであまり深く考えることはできなかったが、今、振り返って思うに実にたくさんの散財をかけていた。

大学の礼拝堂で牧師として働いていた時、このオバーの逝去の報が入った。私はど

うしても見送りがたかったので葬儀に出ることにした。私に、どんな状況の中にあっても強く生き抜くことを教えてくれた人の一人だったからである。

佐次田カメさんは、戦前サイパン島へ移民として出かけていった。しかしそこで太平洋戦争の戦渦に巻き込まれた。幼い子どもを連れて狭い島中逃げまわったという逃げのびることのできないことを知った時、残された道は自決しかなかった。たくさんの島民が追いつめられてバンザイ岬から身を投げた。カメさんもその流れに押し流されながら岬の方へ移動中、米軍に保護され、一命を取り留めたという。そして沖繩に帰ってきてからの発病、発病と同時に即時離縁、以後ご主人は二度と会ってはくれなかったという。

カメさんの葬儀に近親者が数名参列していた。沖繩では火葬の際、茶毘だびの点火ボタンを押すのが親族の重要な役割なのだそうだが、愛楽園の人たちの懇願にもかかわらず、かたくなに固辞し、教会での葬送式が終わるなり、急ぐようにして帰っていった光景が今も強く私の中に焼き付いている。病気を病んだ人の深い深い悲しみが、最後のこの時にまで描かれていたからである。

そのカメさん、生前「私は独り言の名人ですよ」といつていた。

「私も女だから髪にクシを入れるため毎日鏡に向かいます。しかしその鏡に映る顔はこの顔です。私は毎日、この顔を見ながら今日まで生きてきました。なんでこんな病気になるったんかねエーと、時には怨みがましく、時には慰めてもらいたくて、そして時には自分を励ますために、独り言をいうんです。私は独り言の名人さ」

あれから三十数年経った今も、カメさんのこの言葉は私から離れない。

前章で紹介した山城タケさんも、独り言をいいながら自分を慰め励ましたといっていた。一八歳から二八歳までの一年間、人里離れた海岸で一人で生活した彼女。夜々、お月様に向かって話しかけ、一人涙したという。これまでお会いしてきた愛楽園の多くの人たちは、どの人もどの人も独り言をいいながらその苦難に耐え、生き抜いてきた。

そんな彼らの姿を見ていて、いつのまにか私の中にも独り言をいう自分がいた。とくに東京を離れ、あぶらむの会を創設していった一〇年間ほどは、「博、今日も一日よく頑張ったね」と自分で自分をほめたり、またすでにこの世にいない両親や青木先生はじめ愛楽園の人たちのことを思い浮かべながら「頑張ってみますから、見守っていてくださいね」と独り言をいいながら歩んできた。

「共にある存在」を伴侶として

聖書によれば、古代の人たちは「時間」というものに対して、二つの考えをもっていた。一つは「クロノス」という時間で、これは過去―現在―未来と水平次元で坦々と流れていくもので、今日われわれがもち合わせている時間の概念である。クロノメーターやクォーツという語も、このクロノスから派生している。

それに対してもう一つの時間を「カイロス」と呼び、クロノスの水平な時間の流れの中に垂直に突入してくる時間で、好機とか神の時とか、特別な時間を意味している。そしてこのカイロスという時間がクロノスという時間と交わる時、私たちの現実（クロノス）が質的に変化すると考えていた。クロノスという時間の中で生きている私たちの現実を、カイロスという時間が質的に変えていくことを古代人は知っていたのである。

それではカイロスの何が私たちの現実を質的に変化させていくのだろうか。それは「共にある存在」への確信、実感だった。私たち人間、自分は一人ぼっちではない、

私と常に共にある存在を実感すると、自分がかかえている現実問題に対しての姿勢が変化していくのである。

クロノスとカイロスの二つの時間を簡単に対比すれば表のようになるだろうか。

このように愛楽園で出会った人たちの独り言の中から、「共にある存在」への確信と実感が自分の中における現実受容の能力を高めていくことを教えられた。

「共にある」ということを実感することが私たちの現実を質的に変化させ、受け入

クロノス

(過去—現在—未来という水平な時間の流れで我々の現実時間)

- 誰も見ていない
- 誰も私の悲しみなど理解してくれない
- 私は一人ぼっち(孤独)
- 両親は死んでいない
- 友人、知人は死んでいない

カイロス

(好機とか恵みの時と理解され、「共にある存在」を確信する時にもたらされる特別な時間)

- 神様(仏様)が見ているぞ
- あなたの悲しみは私が一番よく知っている
- あなたは一人ではない。私が共にいる
- いつも私を見守ってくれている
- この世を去ってもなお私を支えてくれている



れがたい現実であるにもかかわらず、それに対する姿勢が大きく変化していくことを、これまで多くの場で教えられた。

私には忘れられない一つの光景がある。私の義兄で、二〇歳離れた長姉の夫、室田清作の死である。

子煩悩な人で、私が小さい時からとつてもよくかわいがってもらった。私も「オッチャン、オッチャン」といつて慕っていた。また、理由<sup>わけ</sup>あつた沖縄出身の子を養女として育て、嫁にまで出してくれた。そしてその子を素人民謡大会で日本一までに育ててくれた。とつても身体の頑丈な人で、五〇歳をすぎても草野球のエースをはっていた。病気とはまったく無縁のような人が急にやせ細っていった。ガンだった。夏までもつかどうかということだったので、六月の中旬、東京から富山へ見舞いに行った。あれこれ話していた時、姉が病室を出た。とその時、義兄は真剣な眼差しで、

「博、お前俺の病気のこと知っているやろ。本当のことを教えてくれ、俺にも覚悟があるから」

といった。私は一瞬たじろいた。大変な病気なのだということが、喉元まで出かけたが、私はそれを呑み込んで、

「なアーン、オッチャン、何も悪いものとは聞いとらんちゃ」

と答えた。義兄は「そうか」と寂しそうにいった。

私は午後の飛行機で東京へ戻らなければならぬ身、もし本当のことを話して義兄が取り乱したりしたとすれば、姉や甥に迷惑がかかると思った。私がずーっと側近くにいることができたなら、私は本当のことを話したと思う。そしてとことん彼の苦しみと向かい合ったと思う。でも数時間後に東京へ帰らなければならぬ自分には、本当のことはいえなかった。「そうか」と寂しそうにいった義兄。「お前まで俺に本当のことをいつてくれないのか」という声だった。

そのころ、七月下旬から八月中旬、私は学生たちとともにフィリピンの山岳州へ出かけていた。義兄の葬儀と重なりそうだった。何らかの形で葬儀に参加したかった私、それまでに私が撮った写真の中でいちばんよく撮れているのを引き伸ばし、黒枠の額の中に納め、遺影として用意した。

一九八〇年、フィリピン出発を直前にした七月二二日夜、危篤の電話が入った。明朝まではもたないだろうということだった。夜行汽車を乗り継ぎ、用意していた黒枠の写真をもって富山へかけつけた。着くころにはもう息を引き取っているかと思つて

いたが、生きていてくれた。義兄は最後まで意識がしっかりしていた。私は病室に入るなり黒枠入りの写真を取り出し、「オッチャン、何かあったらこの写真かざらしてもらおうぞ。どうや、よく撮れているだろう」といった。私はそうすることで、あの時本当のことをいってあげられなかったことを詫びた。義兄は嬉しそうにニコニコしながら「家にもある。家にもある」といった。それがこの世の最後の言葉だった（私の



遺影として用意した義兄の写真。

撮った写真、彼も気に入っていたのか、額に入れて家にかざってあった。

私が見舞いに訪ねたあの時、義兄は死の不安と戦っていた。「天狗が出てきて、お前、助かりたいのなら俺のいう通りにしろと行って、高い高い雲の上へ自分を連れていった。ここで逆立ちできたなら、お前の命助けてやると思ったので、俺は助かりたい一心でその目もくらむようなところで逆立ちした。必死な思いで逆立ちし、これで命助かったと思ったら目が覚めた。夢だったかと思ったら泣けて泣けて……」といって男泣きに泣いたと姉が泣きながら語ってくれた。死を前にした義兄のそんな時、私は彼の苦悩と向き合うことができなかった。彼と共にあって、その苦しみや悲しみを万分の一でも受け止めてあげることができたならと思うと、済まない気持ちで一杯だった。でもその死の直前、このようなかたちでお互いの心を通い合わせることができたこと、大きな慰めと思っている。

共にあるということ、誠実な気持ちの通い合わせこそが、苦悩に直面している人にとっていちばん大切なことであることを教えられた一時であった。

このように愛楽園で出会った人がいたかったこと、そして私とその出会いを通して勝手に理解したことは、「独り言」をいうということはブツブツつぶやくことでは

ない。自分の心の中の深い深いところに話し相手がいって、この世の誰もが理解してくれなくても理解してくれる存在がいって、自分を見守ってくれている。自分は一人ぼっちではない、共なる存在との間から生まれてくる独り言である。自分の心の深いところに真の話し相手をもっているか否かが、人生旅路を旅するうえでの大切な要素ということである。

私は、その共にある存在、独り言がいえる相手を旅の伴侶と思っている。

## 五. 自分との和解

一九八〇年から数年間、私はネパールに関わることとなった。岩村昇ドクター発案の「チトワン農業総合開発計画」への参画のためだった。岩村ドクターは一九六〇年初頭から一八年間、ネパールで結核予防対策に従事しておられた。「使用済み切手でワクチンを」—— 私たちも知らずにドクターの仕事に遠くのほうで関わっていたのだ。

ドクターはよく予防医学の大切さを私に話された。病気にかかった人を治すことも大事だが、いちばん大切なことは病気にならないようにすること。そのためにはネパールでは生活の向上と改善が急務であることを訴えられた。私たちが経営した農場は、石油消費型の現代農業ではなく、現地の農業技術にプラスチックを加えたもの、現状にひと工夫することによって「これなら俺たちでもできる」という農業を目指した。そのためネパールへは頻繁に通うこととなった。

当初、私が困ったことの一つはトイレだった。観光収入が大きな比重を占めている国のため、今日ではトイレもずいぶんきれいになったが、当時は私にはきついものがあった。ネパールの田舎ではトイレは自然一体型。トイレと名のつく場所はなく、「この大地がそれ」である。都市部の汚れたトイレよりも、田舎の自然一体型のほうが数倍爽やかだった。土地の人は空き缶に水を入れ、野に出かける。ことが済めば左手に水をため、おしりにかける。ウオッシュレットの原型である。

私はといえばかさばるトイレットペーパーを遥々日本から持参、何年経ってもネパール式には抵抗があり、できなかった。

そんなある日、「気持ちがいいですよ」の一言に誘われ、挑戦してみることにになった。彼らのようにわずかな水でというわけにはいかず、貴重な水をバケツに用意した。左手に水をため、おしりにかける。いく度もいく度も水をかけ、そして手でぬぐった。その時、何とも言いがたい気持ちになった。それまでは汚い物をふき捨てるようにしていた私。自分の身体の中の陽の当たらないところで、こんな仕事をしてかれている部分があることをはじめて実感した。私は「ありがとう、ありがとう」といいながら、いく度も手でふきなでた。何か深いところで自分と「和解」できたかのような、安ら



いだ不思議な気持ちだった。それは実に爽快な気分だった。以来、私はネパール方式の虜になってしまった。

学生時代に愛読し、今でも時として手にする本の一つに、P・ティーリツヒの『存在への勇氣』(Courage to be)がある。私たちの周囲には私たちの存在をおびやかす否定しようとする諸々の勢力がある(病氣、離別、事故、死等々)。そのような私たちの存在を否定するような事実が歴然としてある。しかし、「それにもかかわらず(in spite of)」「それでもなお(according to)」自分を肯定してやまないこと、それが勇氣であると彼はいう。

前章で古代ギリシャ人たちが、人間を「アンスローポス」と呼び、「レポー」——沈む、倒れる、屈することに「アンティ」——抵抗する、反対する存在であることを記した。そのような意味で、人間が人間であるということは、私たちの存在を否定しようとする諸事実に対して、私たちが「それでもなお」「それにもかかわらず」限りなく自己を肯定していく、そんな「勇氣」にあることを私は教えられた。このことの実実を雄弁に語り、身をもって私に教え示してくれたのが、ハンセン病を病んだ沖繩

愛楽園で出会った人々だった。そして彼らとの出会いを通して、各々の人生旅路の中で自己の現実と真正面から向き合い、日々の歩みを積み重ねている卒業生たちだった。

勇気としての人間とネパールのトイレ話と一体どんな関係があるのだろうか。

私は現在、飛驒の山中で旅人の宿の主をしている。いろんな人が訪ねてくる。そしていろんな人から相談を受ける。その中で一つ感じることは、自分と「和解」できている人は多くはないということである。

人生で受けた傷や受け入れがたい現実など、私たちはいろんな自分を背負っている。しかし、それらすべてが私である。それを認め、それを受け入れる時、本当の私の人生旅路がはじまるのではないだろうか。自分が自分のことを好きになると、不思議と「勇気」がわいてくる。「転んだら起きる」という旅する力は、ひよつとしたら自分の和解から生まれてくるのではないかと思う今日このごろである。



疲れた靴を履いて  
休んで行かぬか  
笑い話を  
してあげようか

雪深い飛騨の冬、新世紀を迎えた今年の冬仕事は原稿書きとなった。一晩で五〇〇六〇センチメートルの積雪はめずらしくもない。除雪作業と原稿書きの毎日だった。第四章まで書いたら春が来た。と同時に精神的に燃料切れとなり、原稿を書きつづける気力がなくなってしまった。

そんな時、卒業生の一人が沖繩で結婚式を挙げることとなり、半年ぶりに愛楽園を訪ねた。九二歳を過ぎた山城タケさんは心なしか一段と小さくなっていった。昼食は済んだか、今日はどこに泊まるか、家族は元気かと、タケさんは同じことを五分おきくらしいに訊ねるようになっていた。私の身の回りのことを心配する姿、晩年の母親そっくりだった。

「カジマヤ（九七歳の祝い年）まではがんばろうね」

「カジマヤまであと何年ある。（五年という私の声に）まだ五年もあるのか……。長いなアー」

といていたタケさん。そんなタケさんを見ていたら、原稿の仕上げを急がなけれ

ばという気持ちと、同時に、深いところでエネルギーが注がれたような気がした。

不思議なめぐりあわせというか、最終稿を書き終えた日、二〇〇一年五月二三日、日本政府はハンセン病訴訟熊本地裁判決の控訴を断念した。そして、ハンセン病者の強制隔離とそれに伴う幾多の人権侵害の非を認め、謝罪した。また、新しい一つの出発点ができた。なぜなら、ハンセン病を悲惨なものにしてきたのは、病原菌であるらい菌や強制隔離と人権侵害を含んだらい予防法という法律だけではなく、われわれ一人一人のうちに巣喰う差別、偏見であると思うからである。ハンセン病が問うているのは、われわれ一人一人の人間としての有り様への問いかけである。その第一歩として、国の謝罪、そして次はわれわれ一人一人の内なる差別、偏見に目を向け、われわれの人間性の高まりを目指していくこと、それがハンセン病を病んだことにより苦悩の人生を強いられた人々に対する、われわれのせめてもの責任ではないだろうか。

沖繩にはハンセン病に対する呼称の一つに「ちゅらむん」——美しい人——という、病者の変形した容姿を皮肉った呼び名があることは本文で述べた。

最初のころは何と心ないことをと思っていたが、愛楽園で出会った多くの人生の

良き旅人であり、私にとつての人生旅路の一里塚となつてくれた方々の人となりに触れてみて今思うには、何と素敵な呼称なのだろうと思う。彼らの外なる人は激しく変形しているかもしれないが、内なる人はまさしく「痛み経て 真珠となりし 貝の春」——「ちゅらむん」美しい人そのものである。

まつたく偶然に手にした一冊の本、そして青木先生はじめ愛楽園の人たちとの出会い。もしその出会いがなかったら自分の人生はいつたいどうなつていたかと思うと、小さな身震いを憶えるとともに、この偶然と愛楽園の人たちに、深く感謝せずにはいられない。それらの出会いを単なる「体験」にするのではなく、自分にムチ打ちつつ、「経験」にまで深めていきたいと願いつつ、日々を営んでいる。あの世での再会の時、与えられた己が人生旅路をしつかり歩んだ仲間として、迎えてもらいたいからである。

最後に、失礼を顧みず、不躰な頼みごとにもかかわらず、「序文」を快く書いてくださった報道写真家の石川文洋氏に、心より感謝いたします。

また、引用した卒業生たちの手記や手紙、個人のプライバシーに関わるものも多々あった。了解を取るための電話をしたら、「先生、今のような時代だからこそ、是非

書いて。そのために私の歩みが必要ならどうぞ自由に使ってください。私、信じられないほど強くなったから」といつてくれた。ありがとう。

そして、あぶらむの会をここまで育ててくださった多くの方々、ありがとうございます。ありがとうございました。

直球しか投げられず、それも荒れ球ばかりの男と、妻の育は二九年も一緒に歩いてくれています。表紙絵に彼女が描いた「老後の二人」を用いてもらいました。私たちかなりの「貝の春」を目指していきたく願っています。

こんな駄文を本にしましょうと真剣にすすめてくださった株式会社きんのくわがた社社長の小澤完氏と編集長の松寄剛氏に深く感謝いたします。

末筆になりましたが、こんな拙文を最後まで読んでくださいました読者のみなさまに心より感謝し、お礼申し上げます。

二〇〇一年六月二三日（沖繩慰霊の日）

大郷 博



# あぶらむ物語

人生のよき旅人たちの話

2001年8月1日 初版第1刷発行

著者： 大郷 博

発行所： 株式会社きんのくわがた社

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋1-7-9 山京第2別館2階  
書籍営業 TEL：03-5215-2298 FAX：03-5215-2297

発行者： 小澤 完

編集人： 松寄 剛

デザイン： エクイノクス デザイン（ヒラノコウキ）

DTP： 伊藤 淳子

印刷： 有限会社アープ

- 本書の内容は著作権上の保護を受けています。著者および発行者の許諾を得ず、無断で複写、複製することは、法律により禁じられています。
- 万一、乱丁・落丁本がございましたら、弊社宛ご返送ください。送料弊社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに表示しています。

©2001 Hiroshi Oogou

ISBN4-87770-065-X C0095 Printed in Japan





9784877700652



1920095018003

ISBN4-87770-065-X

C0095 ¥1800E

定価： 本体1,800円 +税

